

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要

Bulletin of the Akita Prefectural
Cultural Assets Research Center

第14号 1999

縄文ランドスケープ……………	小林 達雄 ……	1
本当に縄文時代観は変わったのか? ……	岡村 道雄 ……	17
世界と日本の文化財……………	田中 琢 ……	38
二ツ井町富根字駒形不動沢地内の アスファルト滲出地について……………	小笠原正明 櫻田 隆 ……	50
秋田県考古学関係文献抄録(1) - 須恵器・瓦 - ……	能登谷宣康 利部 修 ……	58

秋田県埋蔵文化財センター

Akita Prefectural Cultural Assets Research Center

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂（しろざか）遺跡出土の「岩偶」です。縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要

Bulletin of the Akita Prefectural
Cultural Assets Research Center

第 14 号

1 9 9 9

秋田県埋蔵文化財センター

Akita Prefectural Cultural Assets Research Center

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要 第14号

目次

縄文ランドスケープ……………	小林 達雄 ……	1
本当に縄文時代観は変わったのか? ……	岡村 道雄 ……	17
世界と日本の文化財……………	田中 琢 ……	38
二ツ井町富根字駒形不動沢地内の アスファルト滲出地について……………	小笠原正明 櫻田 隆 能登谷宣康	……50
秋田県考古学関係文献抄録(1)―須恵器・瓦― ……	利部 修 ……	58

縄文ランドスケープ

小林 達雄*

ただいまご紹介にあずかりました小林です。今富樫さんのお話にもありましたように、私の考古学あるいは縄文文化の研究におきましては、この秋田県というのは大変私にとっても大事なところで、つまりいろいろな遺跡あるいは遺物のことで教わって初めて今日あると言っても過言ではないかと思えます。そういうその縁の深いところで、皆さんと今日はちょっと耳慣れないタイトルかもしれませんがそれでも縄文ランドスケープということで少し考えてみたいと思えます。

ところで、人類は450万年前から遊動的な生活をしておりました。生活のパターンと言いましょか、暮らしぶりというのは、猿やチンパンジーと同じように朝目が覚めると、まず食べる物を探します。そして目の中に入る食べ物を手に取ると、そのまま口に持っていくというこれが長い間の実人類の生活でした。この点がお猿やチンパンジーと殆ど同じなのです。

その後、いろいろな条件が整いまして、食べ物があってもすぐにそれを口に運ばない、つまり食べ物は用意された籠の中に入れ、そしてそれを村に持ち帰るといような生活になるのです。これが実はお猿やチンパンジー的生活様式から、手に入れた食べ物は用意した籠に入れて村に持ち帰るといような生活に移り変わった時代なのです。これを私たちは定住と呼びます。一カ所の場所に腰を落着けて何年も、あるいは何十年も生活するようになったのです。これがチンパンジーと全く違うところでございます。

実は今日お話ししようとする縄文時代というのは、そういった半永久的な村を営むということが、この縄文時代の特徴でございます。それまでというのはせいぜい数日間そこに逗留すれば間もなく動かなければいけない、そういう生活だったわけです。実は猿やチンパンジーもあまり動かななくてもすむのなら動かない方がいいわけです。その方が楽なわけですね。暇ができれば遊んだり、それから子供の世話をしたり、あるいは昼寝をしたりしていればいいわけですが、なぜああいうふうに移動したりするかというと、それは食べ物の種類が限られていたからです。食べ物の種類がかぎられていますから、身の回りにあるものを食べ尽くすと、一つのグループにとってはそれ以上の食べ物が無くなって、そして次の新しい場所へ動かなければいけなかった訳です。そうやって夜になるとその夜の寝る場所を作り、そして朝起きるとまた動き始めるということだったわけです。

縄文時代に入るとそういう長い歴史、体験を踏まえて一つまた一ついろいろな種類の中から食べられる物を探し発見していきます。やがてそれまでには無かったような多種多様な物を食べるようになってきたわけです。それだけの成果を獲得したわけです。これは人類の歴史における大変な成果です。特に縄文時代の特徴はいろいろな物をわけへだてなく食べているということです。たとえばいろいろな動物を食べておりますが、鹿や猪は図体が大きいですし、一頭しとめるとその図体の大きいおかげでたくさんの肉が手に入ります。しかもおいしいです。けれども鹿と猪だけ食べているだけでは

* 國學院大學文学部教授

なくて、ウサギはもちろんの事、ムササビや狐や狸も食べます。カエルも食べます。ネズミも食べます。とにかく何でも食べているのです。そういう何でも食べるようになって、ますます安定していくわけです。つまり一つ二つの種類が手に入らなくても代わりになるものがいくらでもいるという事でいろいろな物を食べることによって、ある一定の面積の中で、あれもこれも利用することが出来るようになって別にあちこち頻繁に移動しなくても済むようになったというわけです。

縄文人はお猿さんまで食べております。お猿さんというのはまあ自分のことを棚に上げて言うのは何ですが、私の仲間には相当似通った顔がありまして、猿をしとめて肉を食うというのはあまりいい気持ちがないというのが世界各地の狩猟民の共通の思いなのです。ところが縄文人はあまり頓着しません。終始食べております。とにかくわけへだてしない、それが一つの大方針なのです。そして、何でも利用できる物は利用するという事で、彼らは生活するようになってきたのです。

それだけではなく実は、たとえばある食べ物、ドングリやトチでもそうですが、ドングリはクリと同じようなつぶで色つやもおいしい食べてみたいと思っても自然の状態のままではアクが強くて食べられません。そういうことでやがてアクを抜くということに成功します。そしてまもなくドングリだけでなく彼岸花の球根とか、いろいろなアクの強いもの、多少の毒のあるものの毒抜きにまで手を伸ばしていきます。あるいは魚においても我々が珍重しておりますフグも縄文人は縄文時代の前期以降には食べ始めております。そしてそれが結構彼らの好物だったらしく、海岸から離れた奥地の貝塚や遺跡からフグの骨が出土しております。だからすでにフグの毒を抜いて食べるということまで身に付けていたということがわかります。

さらにある種の植物については栽培するようになります。エゴマ、ヒョウタン、ヒョウタンももう相当早くから、今日発表がありました池内遺跡からも必ずヒョウタンが出るのではないかと思います。あの時代からヒョウタンを北陸地方では食べております。それはおそらく栽培していたのだろうと言われております。その他いくつかその栽培の候補があがっておりまして、場合によるとソバも栽培していたのかもしれないという可能性が北海道でも見出されております。

その他に彼らは犬を早くから飼育しておりますが、その技術的なバックグラウンドを基にして、やがてイノシシを飼育するようになります。このイノシシの飼育は縄文時代の早期に始まります。そのきっかけが伊豆の大島に、ある縄文人の集団が渡ろうとしたときに始まりました。伊豆の大島は火山島ですからイノシシあるいはシカは住んでいないのです。ところが発掘すると累々とイノシシの骨が出てくるのです。これは彼らがイノシシを連れていったからに他ならないのです。ところが彼らの船は丸木船です。太い木をくりぬいて、船を作ってそれに彼らは家財道具を積んで、女房子供も一緒に連れて海を渡るわけですが、その時にイノシシの成獣(大きくなったイノシシ)を連れていったのでは船が狭くなるので、子供のイノシシ数頭を連れて行って、それを島に着いたら飼育して大きくなったら食べるということをはじめたようです。

私も外国生活の経験があるのですが、一番困るのは日本のお醤油の味やうまいお米が食べられないということでした。縄文人はシカとイノシシが好きでしたが、島に渡るということは、シカやイノシシ、つまり僕ら日本人にとっての米食を諦めろと言われるようなものなのです。そこで、苦労して彼らはイノシシの子供を連れて行って飼育するというようなことを始めたというわけです。

こうして今くどくどと申し上げましたのは、縄文時代の文化を支えた底力というようなものがそう

いうところにあるということです。つまりただ自然のものを口に運ぶということではなく、アクのあるものはアクを抜く、必要とあれば適当な種類を選んで栽培するようになる。それから毒のあるフグならそれを抜いて食べる。そしてイノシシを連れて行ってちゃんと飼育する、そういうことをちゃんとやったこの底力がこれからお話しするような縄文文化を支えた大きな力になっているわけです。

このような技術を、私は縄文人による自然の人工化と呼んでおります。自然を自然のままではなく、自分の都合のいいように作り変えていく、そして利用していくということです。こういう考え方は実はまだまだあまり学界でも出ていない考え方です。少し栽培があると、すぐにそれを農耕だと言ったりします。しばしば縄文時代にも農耕があったとか、原始農耕があったというような話は実は幾つかの栽培作物があるとそれをもって農耕だというからです。ところが農耕というのはですね、実は本当の農耕のその性質というのは、ごく少数の限られた栽培植物に時間と人手を一生懸命かけて、そして収量を上げて安定しようとするところにあるのです。それが農耕なのです。ところが縄文時代というのは先ほども申しましたように、お猿さんまで食べるようにいろいろな物を食べておりますが、そういういろいろな物を食べることによって安定しようとするのです。だからいろいろな物を利用する。それに対してごく少数の種類を利用しようとする農耕とは相容れない姿勢なのです。縄文時代のその性質を私は縄文姿勢方針と呼んでいるのです。縄文人の生きる方針です。この姿勢方針は農耕とは反対の方向を向いている。けれども栽培ということもやっていた。その栽培は縄文姿勢方針を全うするために、あるいはさらに充実させるための一つの手だてであって、農耕ではないということです。そういうことで縄文の性質が弥生時代以降の在り方と際だった特徴をもつものとして見えてくるということです。

さて実は縄文時代の人達は、一カ所に留まって定住するようになったという話をしました。けれどもその定住こそが、この多種多様な物を利用することが出来るようになった大きな背景になります。毎日朝起きて、あちらこちら移動しながら食べ物を漁っているというような生活は、その場その場の関係が一回こっきりあるいは一時的なものにならざるを得ないのですが、今度一カ所にずっと住み続けるということによって、その場所を取り巻く自然と年間を通じ、あるいはさらに何年間にも亘ってつきあうということになってきたわけです。それによってまわりの生態学的な知識、植物、動物、昆虫、鳥などに対する知識が深まっていきます。そしてこれが食べられる、これが食べられないものと区別します。おそらく名前をみんな付けていったはずですが。そしてこれが毒であるとか、一方これが薬になるとか、そういうものを区別していくわけです。

そういう知識が、一方で膨らみながら彼らの生活の根拠としての家造りが始まります。竪穴住居です。移動に移動を重ねて、夜になると簡単な寝場所を造るというような、そういう生活におけるいわば鳥の巣みたいなものはですね、すぐに捨てられる。そして捨てられるとたちまちそれは自然に戻ってしまいます。ところが一カ所に住み着くんだぞというこの決意のもとに家造りを始めた。それがいわゆる竪穴住居と申しまして、地面を一定の広さに決めて掘り窪めます。そして床面を地面より下の方に造ります。そして壁をちゃんと造り、柱を立て、梁を渡して屋根を葺くという家を造るわけです。この家造りというのは一つには重要な意味を持っておりまして、おそらく狩だとか魚取だとかそういう時に共同で作業する、そういう食物を獲得する時の作業以外で初めて共同で一つのものを造るということをやった最初のものが竪穴住居ではないかと思えます。

ここにも縄文人にとっての新しい社会的な出来事が始まったということを意味しております。そして一方、その竪穴住居というのは、今までに自然の中には全くなかった新しい空間を自分たちが自ら新しいスペースを造ったということにおきましても極めて重要な意味を持ちます。この竪穴住居を造って、そして壁で囲った。壁で囲うことによってその家の外側と内側とはっきり区別されます。少し言い過ぎかもしれませんが、私はこのとき日本語としてのウチとソトという言葉及びそんな言葉に関わる観念が芽生えたのではないかというふうに思っております。換言すれば、もしかしたらそれまではウチとかソトという言葉が無かったのではないか、あるいはウチとかソトという言葉で表されるような観念はまだ無かったのではないかというふうに思います。

私たちの日本語というのは、もちろん新しい言葉も最近どんどん加わっておりますけれども、古くから使っている言葉もたくさんまだ残っております。ずっとさかのぼっていきますと、万葉の中にもたくさんの今我々の使っている言葉のルーツがあります。万葉集を作った時に初めて日本語ができた訳じゃ無いということはもちろん皆さんお思いでしょう。じゃあお父さんの前の代なのか、あるいは2代・3代前の時代に日本語が出来たのかというと、そうじゃないですね。あれだけ楽しい流暢なそしてリズムカルな日本語を駆使することが出来るようになったということは、ものすごい日本語の歴史がその奥にあるということをよくよく示しております。その日本語が縄文時代にもつながっているというわけです。そういった意味で、私は考古学は遺跡や遺物やそれから遺構だけとかそういうものではなくて、日本語をもって考古学をすると、そういうところをこれから考えるべきではないかと思いはじめておるところです。ちょっと脱線しましたけれども、とにかく竪穴住居を造るということによって新しい人工的な空間を作った、そしてこれは今までになかった自然の中の一つの空間として、その竪穴住居の内側と外側、ウチとソトこういうものができたんじゃないかと、そういうふうに思います。

竪穴住居の中には炉が設けられました。壁に囲まれた内側に炉があるということによって、さらにその新しい空間スペースの性格というものがはっきりしてきます。その炉もやがて石で囲ったりします。丸く囲ったり、四角く囲ったりします。またそれをちょうど箕のようにおもしろい形にデザインしたりします。ある時ある地方には、その傍らに石棒を立てたり、男根をかたどったようなああいふ特別なものです。あれを炉の傍らに立てたり、あるいは横たえたりしています。あるいは炉のそばに土器を埋めたりします。火鉢のように。さらにある時には奥壁に石で祭壇のようなものを作って、そしてその真ん中に自然の細長い石を立てたりします。まさに祭壇そのものです。いろいろそういうものを設けることによって、ますます竪穴住居の中は外にはない全く新しい意味を持つものになってきます。いろいろな民話の中にもありますが、炉の火というのはですね、あれは明かりを採るとか、暖房用とかあるいはものの煮炊きをするためとか言う以上にその炉というものが、その家のシンボルになっていきます。ご先祖様からの火だとか、あるいはその火をずっと守ることがその家を守ることにとか、そういう観念も出てきたりします。ですから炉が設けられて、炉を持つそういう竪穴住居の空間というのはますますその自然とは別の新しい空間としての新しい意味を備えていくということになります。そういう中で家の内が一つの精神的な世界としての構造を担っていくという、そしていわば家だとか、家系だとかそういう観念を生む土壌にもなっていったというふうに考えることができます。

ところで家の外に出ますと目に写るのは仲間の家です。仲間の家が群がっていて、それが実はムラ

なのです。このムラもですね、それまでの例えば四六時中移動に移動を重ねているような生活の中で、仮の宿的な寝場所を作ってそしていらなくなるとそれを捨てて行ったというようなそういう鳥の巣みたいなものではなくて、人工的な新しい構築物としていくつもそこに群がっている。これによって一定の範囲の空間を自然の中から切り取って、自分の物として占有して、そこから自然を排除して行って、こっちの勝手だけで一つのムラを人工的にデザインをするということにつながってくるわけです。ですからムラというのは単に複数の家が集合したということだけではない、集まった家と家がお互いに関係を結びながら一つの機能といたしましよか役割を担って新しい形を作り上げるものなのです。その典型的なものを私は縄文モデル村と呼んでおりますが、広場を囲んで竪穴住居がちょうど手を繋いで輪を作るようにぐるっと廻るのです。こうやって家というのが単なる雑多な集合ではなくて、約束事の基に一つの新しい空間を作るというそれがムラの誕生です。円形に並んだその中やあるいは内側、あるいはその並び方にも決まりがありまして、その中にお墓が設けられたり、あるいは今日の発表の中にもありましたが、貯蔵穴、穴蔵ですね、食物を貯えておく穴蔵を設けたり、あるいはある場所を決めてゴミ捨場にしたりというような、そういうデザインができあがっていきます。このムラというのはやはり重要なことでして、家というのはそれぞれの家族の私有物です。つまり私有権を持っている人達同志が集まりながら公の一つの空間を作ったというのがムラということになるかと思ひます。

我々が遺跡を発掘しますと、大規模な遺跡であればあるほどですね、長い間そこに住み続けていたということをお我々に教えてくれます。これはいったいどういうことなのだろうという素朴な疑問から入ってみようと思ひます。やはり生活条件が整っていたということをお何よりも示しているだろうと思ひます。だから何回も何回もあるいは長い間そこに住み続けている。その生活条件というのは何かというと、第一にそれぞれの人達が必要とする面積、それから具体的には平坦面がどれくらい広がっているかというようなことから、自分たちにとってどう必要とされるかという兼ね合いの中で場所を選んでいくのだと思ひます。それからもう一つ、場所はよくても食物の手に取りにくいような所では困る、だから食糧資源も豊富でなくてはならない。その周りにちょっと遠征すれば十分に食糧が手に入る、そういう場所ではなくてはならない。それからもちろん生活に必要な水の便が良くなくてはいけない。だいたいこういうような事がおその生活に必要な条件として考えることができます。群馬県の茅野遺跡というのがありまして、これは耳飾をたくさん出土した遺跡として注目されておりますが、その遺跡の低い所をちょっと見当つけて掘って見ると、見事な縄文時代の湧水の跡がでてきました。その湧水は今は枯れておりますが相当な量が出たということをお示すような、そういうような谷が入り込んでいる奥まった所にちゃんとありまして、そしてその場所にはたくさんの石斧だとか石皿だとか磨石だとか彼らがおその水辺でいろいろな作業をやっていたことを思わせる道具がいっぱい発見されました。

いろいろな遺跡がおそのそばにあるのですが、それだけの水量をお思わせる泉を持っている遺跡は他にありません。つまりこの茅野遺跡というのはお水の条件のいいところをお占領して、そういうところをお占領することが出来るという力を持っているのです。それだけの力があったからこそ一方では驚くべき数の耳飾を持つことが出来て、そしてその耳飾をおそらく近くの人々に分け与えるようなそういうことを思わせる集団、というふうにお思われます。つまり場所によってはその人達の強大な力をおも良く示

してくれるということがわかります。

ところがそういう私達が今考えつくような事だけが彼らの生活の必要条件だったのだろうかというところどうも一つわからない所がでてきました。最近、実は去年のことですが津軽海峡を越えた北海道の函館市に、函館空港のための工事を行っている時に、ものすごい遺跡が発見されました。中野B遺跡という遺跡なのですが、これはまだ縄文時代の早期、つまり縄文時代が軌道に乗り始めたそういう時代のものなのです。ところがその遺跡に行きますと、足の踏み場もないほど堅穴住居が累々と出てくるのです。縄文時代早期というと堅穴住居そのものもまだまだ試行錯誤で造っているというようなイメージが我々にもあったのですが、それがなんと弥生時代や古墳時代真っ盛りの時代の村の跡みたいにびっしりと縄文時代早期の堅穴住居が500軒以上も出てきたわけですね。それは先程申し上げたような水の便が良かったとか、食物の入手に便利だとか、あるいは必要な平坦面があったとかそういう事だけなのだろうかと思うと、同じ様な条件がすぐ隣にもあるのです。それは海岸に面しておりまして、その海岸に流れ込む川が幾筋もありまして、その川と川に挟まれた所にその中野B遺跡というのがあるのですが、そういう目で見ると全く同じ条件の地域がいっぱい並んでいるのです。ところがなぜか中野B遺跡というそのある一つの場所だけ、ずっとここだけに集中して他の所には目もくれないで住み続けて居るという事を示している。しかも堅穴住居というのは先程も申し上げたとおり、地表を掘り込んで床を作るのです。その時安定した床面ができます。火山灰の上に、黒土よりは赤土の上に作った方が、安定した硬い面ができます。だから生活する床としては理想的なのです。ところが何回も何回も同じ場所を掘りますと（よほど深く掘れば別ですが）、ある所はちゃんとした床面が確保出来るが、他の所は黒土になっている、つまり前の堅穴住居があったところで、そこはもう傷んでいる。一方床面だけでなく、壁も赤土の中に掘り込んだ方が、床面からちょっと立ち上がる立ち上がりがあって、壁も頑丈に確保できる。ところが何回も何回も同じ所に堅穴住居を造ると壁ももうグスグスの黒土になっている。ああいう黒土の所に皆さん畑仕事をしながら畝が壁にならず、すぐ崩れてしまいますね。そういう状態にも関わらず、同じ所に堅穴住居を造っているのです。ちょっと隣を見ると何メートルも離れていない所に同じ条件の所があるのにそこには目もくれてない。だからここにこだわる何かがある。だから私が先程申しました水の条件だとか、食糧の手に入りやすい所とか、必要な面積だとかだけでなく、どうも彼らはここぞと決めた所にはプラス α を見つけていたのだと思う。プラス α があってその場所を決めているということを暗示してくれます。プラス α というのは、なかなかプラス α としかいいようのないような、今の時点ではそのとらえ所のないものなのです、残念ながら。つまりどういう事かと言いますと、自然的なその条件とか物理的な条件ではなく、どうも心の問題、その心のこだわりみたいなもの、どうもそのプラス α というのはですね、そういう自然のこだわりがどうのこうのではなく、別のこだわりを持っていそうだとすることが臆気ながらここに見えてくるわけです。

実はそういうものについて長らく気にはしていたのです。例えば数年前のことです。長野県を走る高速道路の工事の時に、長野市の東に松原遺跡という遺跡が発見されました。そしておもしろいから見に来ないかというお誘いを受け見に行ったのです。そしたら一番下の方、つまり一番早くその松原遺跡に住み着いた人達は縄文時代の前期という時代なのです。縄文時代は六つの時期に分けておりまして、前期というのは草創期・早期・前期、三番目の時期です。その三番目の時期に人が住み始めた

のです。三番目の時期の早い頃に。その次にちょっと人がいなくなるのです。そしてまたしばらくすると、また人が戻って来て住みます。それが縄文時代の前期のおしまいの方です。それからまたいなくなるのです。それからまた今度は縄文時代中期の半ば頃、四番目の時期の中期にまた人がやってきて住むのです。中期に住んでまた一旦人が居なくなるのですが、中期の終わり頃またやってきてそして後期のはじめ頃まで住みます。今言ったように何回もいなくなっってはまた戻ってくるのです。そして次に弥生時代に入ってまた人が住みます。いなくなります。それから古墳時代にまたやってきて人が住みます。それからその古墳時代のうちにいなくなって、奈良・平安時代にまたやってきて住みます。その後、近世の遺跡、江戸時代の遺跡がまたそこに重なっているのです。その松原遺跡という所に、その遺跡に立って見ると、ここが遺跡の範囲というのは掘ってみるとわかるのですが、地上からは何の変哲もない平らな広がりなのです。ところが何回も住んで、いなくなってまた住むという所は範囲が限られている。ほとんど平坦で平らな場所なのです。これには私は非常にびっくりしました。なぜここにいろいろ時代を超えて住み続けるのだろうか。その理由は先程申し上げたような生活条件とか何かというような自然環境の条件とか言ってもそれだけでは説明できない。なぜここにいるのか。私はこれを屋根のない洞窟遺跡と名前を付けました。洞窟ならちゃんと庇があって雨露をしのげるような、天然の格好な雨露をしのぐ空間がありますから、洞窟があればそれを見てここで雨宿りをしようとか、ここにちょっとしばらく住んでみようとか、ここでキャンプを張ろうとか、そこを通る人は洞窟の外よりは洞窟の中でというのでそこで休んだり、洞窟だからということでそこで住んだり生活したり、時には洞窟だからということでそこを墓場にしたりするのです。ところがここは全く庇も何もないのです。だから変な表現ですけれども、私はこういう遺跡を屋根のない洞窟遺跡と呼んだのです。

そういうふうに見ていくと、実は屋根のない洞窟遺跡がたくさんあるのです。もし屋根のない洞窟遺跡のそのプラス α 、彼らのこだわりの何であるのかを突き止めれば、我々は遺跡の分布調査なんていうものに時間をかけなくてすむし、試掘調査も効率よく、ここは絶対人が住んでいるはずと同じレベルで考えればわかるはずなのです。ところが僕等は今わかりません。相当秋田県の人や東京の人から比べると自然と仲が良いように見えますが、その秋田の人でも藪の中にトレンチを入れたりしながら掘ってみてこれは遺跡だ、ここは遺跡ではないということを一生涯懸命確かめているのです。けれど、もしこの心がわかれば、ここは遺跡だという事をちゃんとマーク出来て、必ず遺跡だぞということになるはずなのですが、残念ながら僕たちはわかりません。どうも江戸時代の初めくらいまでは、その土地土地に住む人達は、ここがとてもいい場所でちょっとはずれるともうだめなんだという事がよくわかっているのです。いたはずなのです。縄文時代以来からの伝統的な自然を読む力です。ところが僕たちにはもう読む力がありません。そうするとどういうことになるかという、こういう場所がいいんだという、ただ単なる思想という非常に抽象的な次元で、ある場所がいいとか悪いとかという、あるいは方角を見るとかという方位の思想とかいうそういうのができます。あれはちゃんと自然に則って読んでいないんじゃないんですね。しょうがないから思想ということを作り上げて、そして後ろに山があって、南向きで、川がずっと流れている所、それが最も理想的な場所なんだというようなことでごまかしている。どうも思想というのはだいたいごまかしなんですね。風水思想なんかも一つの典型ですよ。ごまかしてやむを得ずその本質に近いところでしか本質が見えないから、しょうが

ないからもうエイヤーともうこの辺だぞとって、済ましているんです。

それはそれとしまして、とにかくここにはまだ現役で遺跡の調査をしている人がたくさんおりますが、そういう皆さんには是非こういう屋根のない洞窟遺跡をちょっと集中攻撃して、いったいなぜそこが屋根のない洞窟遺跡として、何回も何回も時代を超えて利用されたんだろうかということを考えていただきたいと思います。いくつかの考えることがらにつきまして、これから一つ二つあるいは触れる事ができるかもしれません。

さて、家ができることによって私の場所が確保されましたし、この家にはいろいろな意味があると言いましたけれども、もう一つだけまた別の面から言うと、その私有地あるいは私有とか、私有権みたいなものが、竪穴住居を造るようになってからやっぱり芽生えてきたこと、縄文時代というのは原始共同体で、みんなが平等で何を利用しようと好き勝手に、そして理想的なものであると思ったら大間違いである。やっぱり家をどこに造るというのはある一つの台地の上でも、あるいは一つの中央広場を囲んでそして丸く輪を描こうとしても、その中で南向きとか北向きとか、今日も池内遺跡の話の中でなぜ北側に住居があるんだろうとかいうような、今我々からみると条件が悪いんじゃないかというところがある。彼らにとってどうだったかわかりませんが、彼らにとってまた我々とは別の観点で、ここが良い場所だ、ここが悪い場所だというような所があるのです。それから先程申し上げましたように、力の強い物持ちの遺跡がすごく立派な泉をちゃんと抱え込んでいる。他の村は、その立派な泉のソトにある。そういったようなことから考えても家を一軒造るにもちゃんとしたい場所、悪い場所があるんですね。だから現実的にこういう家ができます。できるんですけれどもこれは一回決めたらですね、だいたい決まりで私はこの場所、おまえはこの場所と決まっているんですよ、どっちも。ところで一つの村に住み始めますといろいろな理由があるんでしょうけれども、ずっと途方もない長い年月住むことはできないんです。つまりゴミや排泄物で不衛生になる、周りの自然がちょっと条件が悪くなる、食物も採りにくくなる。そこから相当遠くまで遠征しないと必要な食物が手に入らないというようなそういう時には村を移動するのです。移動するんですけどもちゃんとこうした村を営む場所というのはもともと場所が良かったからここに家を造っているわけで、いなくなっても、回復するとまた戻ってくるんです。戻ってくるとどうするかというと、同じ場所に竪穴住居を造るのです。空いている所に造ってないのです。何回も何回もそういうふうにとどこかに行っては戻ってくるうちにもうビッシリと竪穴住居が並ぶ場合もあります。先程申し上げました中野B遺跡というのは何回も外に出ては戻ってくるものですから、ビッシリと足の踏み場も無いほどに古い竪穴住居がワーと残されたようになるんですが、ちょうど適当な竪穴住居の数の村の遺跡だとだいたい同じ場所で重なっているのです。だからこれは明らかにAさんはこの場所以外の他の所に造ってはいけません。なぜなら他の場所はBさんのものであり、他の所はCさんの場所なんです。あるいは、ここは広場で公共的なもの、お墓が作られたり、貯蔵穴が作られたり、それぞれまた使われ方は別です。お祭り用に使われたりとか、だからもう決まっているんですね。そういうことから私有あるいは私有権みたいなものがすでに縄文時代にもあったというふうに見ていく必要がある。そういうふうに見ることによって縄文時代の社会とか集団のその生活、あるいは社会のしくみみたいなものが、ただお猿さんやチンパンジーのようにずっと動き回っていて、夜になると適当な所に場所を選んで眠っているというようなものではない、ちゃんとお互いの関係の中で場所が決まっているんだということを考えなけ

ればいけないと思います。

それで私はちょっと穿った見方をしているんですけども、この中には、非常に縄文人の中にもあるいは我々にもあるんですけども、自分の場所に戻ってきた時、本当に自分の場所の狭い範囲で堅穴住居を造り直す人と、ちょっとはみ出して、ほんのちょっと引っかけしてから俺の場所を忠実に守っていますよ、他の場所には行っていませんよと、従来場所からはみ出して造る奴がいるのです。控えめな人は従来場所をはみ出さず、そのまま踏襲するんです。これを私は専守防衛型、それに対してはみ出す方を攻撃型と呼んでいるんです。いろいろな個人的な性質、個性みたいなものが見えてきておもしろいわけです。あるやつは専守防衛でちゃんとおとなしく自分の堅穴住居の上に造るのに、他の奴はちょっと足を引っかけたおいて造るのです。私心というのがここに出ている。

それはそれとして、こういう私があって実は公的なムラという空間を作ったのです。こういう意味でおもしろいのですが、そして実は公的なムラができた時、またムラの内側と外側とが区別されます。ムラというのは人工的な空間として、人工的な空間というのは自然を排除して自分勝手な縄文人が縄文人的な空間として独占するんですね、自然の一角を。自然から切り取ってこれは俺達の場所なんだという時に切り取られたそのソトは実はハラなんです。お猿さんやチンパンジーやそれから日本の縄文時代以前の旧石器時代というのはこういう人工的な空間で自然を排除したようなものを持たない時代ではですね、全部これが一緒になっているわけですね。だからこういう区別がないわけです。ところがこの区別ができたということはこれが人工的な空間として全く自然を排除した一定のものを作る、そして自然に対立するわけです。こうやって実はムラとかハラというのもこれも古い言葉だと思いますが、日本語で考古学をやるとこういうところにも踏み込むわけです。こういうハラは実は人工的な範囲の外に広がる世界です。ところがこのハラは自然の世界なんですけれども、自然一色ではなくて、このハラで食料を調達するんです。そしていろいろな道具の材料、石斧を作る時の石だとか、石斧の柄だとか、鏃(やじり)を作る材料だとか、それからさらに家を造る時の柱だとか、萱葺きにする萱だとか、そういう物を調達する場所でもあるんですね。だからこのハラというのは、人と自然が共生している空間なんです。自然が広がっているんだけど、人間が縄文人が積極的に入り込んでいて、材料を取らせてもらったり、食べ物を調達したりと、そういう場所としてのハラという性質を持っています。だからここに人の空間としてのムラ、そして人と自然が共生する場所としてのハラの間目がムラ境であり、ムラ境の内側と外側が対立するということになるわけです。

このハラの特徴はですね、いろいろな所に名前が付くのです。このハラっぱには名前が付きます。例えば川の名前とか、大きな石の名前、岩の名前、崖、巨岩がずっとそそり立つような、そういう崖にも名前が付いたりします。それから巨木、巨木なんかでも、例えば日光には太郎杉というのがありますし、妙高の方には黒姫太郎というのがある。屋久島には縄文杉というあだ名を付けられたのがある。皆固有名詞ですよ。おおきな木なんかにもみんな固有名詞が付くのです。岩にも付きます。そして川にも、川の名前だけでなく枝川、それから水の湧き出るところ、浅瀬、それから淵とか、そういうのにも全部名前が付きます。それはちょうどアイヌの人達のアイヌの地名を見ていくとそれが良くわかります。いろいろなところに、何でもこんな所までと思うほど細かくみんな名前が付いているわけです。それはハラだからです。名前が付いている所から、その村から外に出た人達の自然と共生する証しです。そういうスペース(空間)なんです。ところがその名前には彼らのいろいろな思惑と言いま

しょうか、物語とか世界観とかそういう物がみんなそこに転化されるわけです。今だったら弘法大師が座った岩があるんですね。それから木曾義仲が通りすがりに休んだ岩だとかどこにもあるんです。たぶんここには大館市史の民俗編を見ればいっぱい出てくるんじゃないかと思いますが、そういう物語がやっぱり付くんです。あるいはここはフナがいっぱい捕れる場所とか、ここでサケも捕れるとか、なぜそこでサケが捕れるのかということまで後で理屈を付けて、そして物語を作るのです。私は毎年木曾の御嶽山、信州の開田高原というところで考古学の発掘実習をやっているのですが、あそこの開田村というのはそんなに古い村ではないのです。近世の村なんです。その村に入っているいろいろ見聞きしましたら、そういう研究をやっている人がおまして、ここは血の池と言うところ、それは上流の方で大変な大合戦があって、そこを引き上げた侍がそこで血刀を洗ったんだ、それからここは真っ赤な池になったんだと。これは酸化鉄が浮いている池なんですけども。そういうふうにみんな名前が付いているんです。近世のそんなに古い村じゃないのですね。物語は大きな石には付いている。それから冷たい川のところには冷川と言ってそこにはちゃんと名前が付いている。みんな名前が付いているのです。そうやって自然と一緒に人が共生する場所なんです、さて、その向こうには実はヤマがあります。ハラに向こうにヤマがある。だいたい日本の風土からいうとこういう一つの連続性が見られるわけですが、そのヤマも単なる風景じゃないんですね。目の中に飛び込んでくる単なる風景ということではなくて、自分たちの生活空間として、このヤマは何のヤマとみんな名前が付くのです。今ここに住んでいる人、それからそれぞれの国に帰って、いったい自分たちがどれくらい目に見えるそのヤマの名前を知っていますかね。僕は新潟県の長岡ですけれども、そうですね東と西の方に信濃川を挟んでヤマが見えます。ヤマ並みが、そのうち東の方で僕でも10ぐらいはわかります。たった10です、残念ながら。みんな地図を見ると名前が付いているんですけど、普段見て言えるのは10ぐらいです。西の方では10はないですね。5つ6つぐらいです。西の方は遠いんですよ私にとって、ところがあれはわざわざ登ってこのヤマの形はこうだからと付けているのではないのです。みんなこっちから見て名前が付くんですよ。そういうヤマも単なる風景じゃなくて、名前が付いて、物語が付く。それを私は由緒と呼んでいます。だから自分たちの目で見えるそのヤマ並みの特に特徴的な形をしたものには物語がある。そしてその由緒を知ることによってそこに生まれて育ってという自分意識みたいなものですね、染みついて行くんです、刷り込まれて行くんですね、心の中に。

例えば縄文時代にも相当おもしろい事実がいくつかあります。群馬県の中野谷松原遺跡という所は縄文時代前期の遺跡なんですけれども、そこからは浅間山、しょっちゅう煙を噴きます、そして何回も爆発してますが、浅間山が良く見えるんです。そしてその中野谷松原遺跡では丸く広場を囲んで竪穴住居が並んでいるんです。そして10軒程度ですので、全部が全部手を繋いで一つの輪を造れないんです。そして空いた所をどうするかというと、お墓を作るわけです。だからこれもおもしろいことなんですけども、村は今生きている人とご先祖様(死者)と共同経営なんです。そうやって一つの公的な広場を囲んでいるんですが、この墓穴みんな同じ方向を向いて並んでいるんです。そして片側にいつも自然の細長い石が立てられているんです。ちゃんと立ったまま、中にはもう倒れかかっているものもあります。残念ながら人骨はもう腐って残っていないんですけれども、耳飾が発見されました。発見される場合は立石の側から発見されます。だからどうもそっち側に頭を置いて埋葬されているんです。調査を担当した大工原さんはいろいろ見ていたら、なんと立石側の延長線上にきれいな三角山の

浅間山が見えるのです。つまり全部の墓が浅間山を向いているんです。ある人はこれを偶然だという。しかし、それが偶然ではないだろうということは、たくさん例がありますから、段々賛成してくれる方が増えると思いますが、それでもこういうものが偶然だと言う人は相変わらずなくならないと思うんですね。皆さんには私は今こういう事実の宣伝期間でございまして、一生懸命こういうお話しをしているんですけども、これを偶然だというのなら、それは縄文人に対しての侮辱です。目に写る山はですね、単なるそこを通過する旅人の目に写る風景というような物じゃないんです。ここにずっと生まれてそして死んで行った人達の目に写った、きれいな浅間山がポッカリ浮いている、それを特別視して、それを浅間かどうかは知りませんが名前を付けて呼んでいたんですよ。そしてそれが爆発したり煙を出したりしています。そこで、浅間山を向いて祈り、もしかしたら死ぬと浅間山に帰るのかもしれない、例えばですよ。どういう理屈で彼らはそっちに頭を向けているのかはそれはもう知ることは出来ません。けれども例えばそういうような由緒を自分たちで作りながら向き合ってたんです。

長野県には阿久遺跡というのがあります。これも縄文時代前期なんです。つまり同じ頃、こんどですね、蓼科山を特別視しているのです。蓼科山もきれいなものです。これは三輪山と同じ形なんです。三輪山というのは古い神社の発祥地なんです。富士山のミニチュアのように左右対称形のものでしたら、三輪山型とか、あるいは神様が宿るところとって神備型という名前で、こういうきれいな姿の山を呼んでいるんです。

浅間もそうですけれども実は今申しましたように蓼科山も阿久遺跡から見ますとちゃんとそれが見えるのです。そしてその阿久遺跡から望めるその蓼科山を気にしながら大きな石を文化の中に取り込んでいきます。先程は自然の人工化の話をしましたけれども、実はこれを自然の社会化と呼びたいと思います。縄文時代の歴史というのは定住して、そしてムラを作って、そしてムラにその生活の根拠をおいた人達が、周りの物にみんな由緒を付けながら、言葉を換えて言えば、皆物語りをそこに創作しながらですね、自然を自然のままとしておかないで、そういう風景として置くんじゃなくて、自分たちの世界として作り変えるんです。

そしてその向こうには実は山の向こうにはソラがあるのです。ハラが自然と人工との共生の場だとすると、ヤマというのは実は自然なんです。人工色が無い所、人工の及ばない所、人の及ばなかった所、ヤマというのは越える所なんです。越えるとまた新しいよその国が広がる。ところがソラはですね、そのヤマを超えたところでソラにゆける訳じゃないんです。もう少し次元の高い、いわばちょっと、大急ぎで話をすると、それは神の世界、人知の及ばない雷様が住んでいたり、雲がどこからともなく湧いたり、雨を降らせたり、雪を降らせたりですね、星が輝いたり、お天道様があっから出てこっちに沈んだりとか、そういう不思議な事が起こる。そういうそのソラという別世界があるんです。

こうして実は壑穴住居を造って、彼らが新しい私的空間を身に付けると共にムラという公的な人工空間を作って、そしてそのソトにハラという、人と自然が共生する場を作って、そしてその向こう側にそのハラを区切るヤマを作って、ヤマを見て、そしてその向こうにソラが見えるというこういう構図を作り上げた。正に私はこれを縄文時代を考える時には重要なものになるだろうというふうに考えます。また後ほどもう少しこの裏付けを一つ二つ触れてみたいと思いますが、こうやって家のウチからソトに出るとムラがあって、それは人の空間なんですけれども、これはいわば自分が足で立

つ場所、つまりこれは近景です。そして広場が見えたりとかですね、自分たちの日常寝起きする人の空間。そして次のハラは中景になります。ムラのソトを見ると中景が広がっている。それは人と自然が共生している場所です。そしてその向こうにヤマがある、遠景だ。これは自然の世界、だからそのヤマ芋とかヤマ犬とかというのはですね、犬に対するヤマの犬で、オオカミで自然の犬なんです。ヤマ芋というのは里で作る芋に対して自然の芋なんです。これも古い言葉なんです。ソラというのはその向こうに背景となって、そしてこれは神の世界なんです。滅多に行けない、だからこのソラに対しては、いろいろなその思いがそこに反映されます。ある時は死の世界であったり、ある時は天国だったり、あるいはあるときは神様の世界であったりするわけですね。

それをとりもつのが鳥なんですよ。これは全くの駄洒落ではないのです。世界的に鳥が死者をあの世に運んだりというのはみんなこういう構図だからです。こういう構造が、弥生時代・古墳時代にも継承されていますが、縄文時代の定住生活の中から生まれてきた。これが縄文人のランドスケープであり、我々の原風景になっているのであろうというふうに思うわけです。

さてノラというのがあります。ノラについて考えてみましょう。ムラというのは人の空間で、ハラというのは人と自然が共生している空間なんです、ノラは、ノラ仕事などというのでわかるように、畑とかそういうものなんです、ハラの中に人工的な空間を無理矢理作ったところのものです。耕作地、ノラ仕事のノラはみんな農作業に関係します。だからムラ、ハラなどととも(ラ)が付いていて、関係しているんです。このノラが出てくるのは、弥生時代以降です。縄文時代にはだからノラのないランドスケープなんです。風景、景観なんです。

ところでこのムラが人空間として独立し、自然の一角を切り取り、ムラができていますけれども、そのムラの中にさらに縄文人は積極的な働きかけをするようになります。それが記念物、モニュメントを作ることです。ストーンサークルとか、土を盛り上げたり、それから太い柱を立てる。この三つが記念物の主要なものです。石を使って作る、土を動かして作る、巨木を打ち立てる、この三つがこの記念物の特徴なんです。この記念物を村の中を作るわけです。ムラというのは先程申し上げたように、家が集まってそして人工的な空間を作って、自然を排除したわけです。そしてもちろん広場を作ったり、お墓を作ったりとかそういうものが備わっていくわけですが、さらにその上彼らは記念物を作ったということは、もっともっと非常に顕著な、目に見えてアッと一目でわかるような、そういうものをわざと作って加えている。記念物の特徴は、石を持ってきてですね、それをズーと丸くデザインして“どんなもんだい”というふうにして誇って見せるようなものなんです。目立つものですね。それから土を盛り上げていく、そうすると平らな所に全く人が作るんですから、自然のものじゃない、人が作ってどんなもんだいというのを見せていくのです。それから柱を立てる。自然の中にも巨木があります。老樹があって巨樹がありますが、そうじゃなくてその枝葉を払って、エッチラオッチラ太いのをムラに持って来て、おっ立てる。どんなもんだいというそういう目立つものです。小さな石をですね五つ並べてもそれは記念物だとは言わないんです。やっぱりこう目立たなくてはいけない。規模が大きくなってはならない。だからこれの特徴は人手がかかる。だから日常的な衣食住に関わるいろいろな仕事(作業)とは桁外れに人手が掛かるんです。堅穴住居などは確かに共同作業のはしりだと申し上げましたけれども、そういう堅穴住居なんかは住むための家ですから、記念物と比べると相当短期間の内にさっと作ってしまうものなんです、これはとてもそんなものじゃ

ない。大勢の桁外れに多人数を動員して、しかも長い年月が掛かる。そして大規模で目立つやつを作ったというのが記念物なんです。この記念物をムラの中に作ることによって、この人空間としてのムラの、人工的なムラはハラに対して更に際立ってくる。ただ石ををちょっと並べたんじゃない、ただ家が並んでいるだけじゃない、それを越えたすごい目立った大規模な記念物を作るということによって、この人空間としての自然にはない人工的な作り物をここに表現していく、そして自然と対立して行くわけです。土塁はですね、とにかく今だったらブルドーザーとか何かちょっとしたものがあれば、あるいはそういう大きな機械がなければ少なくともスコップを持って、一輪車を持って土を動かすことができるでしょうけれども、当時は石斧だとかあるいは今日の池内遺跡で出たようなですね、掘棒みたいな先が尖ったやつだけですよ、あんなもので地面をほぐすんです。ほぐした土を手ですくって、そしてモッコみたいなものに入れて、エンヤコラ運んで土をどんだん盛りたてて行くんです。この近くの狐岱遺跡にみられます。三内丸山にもあります。そしてついこの間新聞に出ましたけれども、函館の石原貝塚や南茅部町の八木遺跡から土盛りが出ました。土盛りの土手が。それは土を動かすといっても大変なことなんです。砂遊びの砂山の一つ二つ作るのと違って、大規模な目立つやつを作るわけですから、人手が掛かって年月が掛かるんです。

同じように石造りとしてのストーンサークル、伊勢堂岱遺跡も今日発表がありました。それからすぐお隣の大湯の環状列石、ストーンサークル、更に青森でも小牧野遺跡とかですね続々とそういうストーンサークルが見つかり始めました。そういうストーンサークルも一人や二人では持ち上げることはできてもあるいはそれを運んでゆくなんて事はなかなかできないような、舗装道路じゃないすごい山道を、足下のおぼつかないところを運ぶなんて安易なことじゃない。そういう石をどんだん運び上げるそして伊勢堂岱は九百何個を数えながら、まだ半分以下しかできていない。あれはいったい途中で止めたのかどうなったのかという問いかけもありましたが、これは人手と年月がいかに掛かるかということを示しているんです。あれはサーと出来るものなら出来ていたんです。しかしコツコツやらなければできなかつたから、まだその建造途中のやつが残っていくんです。

一方、いつ彼らが働けるかという、極く限られているんです。雪の降る冬は出来ません。それから春になると冬中その緑のものが無いものですから、どこの自然民族も、とくに日本のような風土のところでは春になると大急ぎで緑のものを手に入れるために、そんな公共的な仕事はしてられないのです。だから春はちょっとそういう仕事は出来ません。関東地方でも雪のない地方でも、春になると大量に潮干狩りのシーズン、貝採りのシーズンが来るんです。秋は皆さんご存知のように、サケは上ってくるわ、クリやトチやドングリは色づくは、もう忙しくてしょうがないんです。そして冬のための貯えをそこで用意しなくてはならないので、だから秋もできないでしょう。そうするとようやくこういう仕事にですね時間を割けるとしたら夏ぐらいしかないと思うのです。その夏も皆が皆これに掛かりきりというわけには行かないのです。あるいは一日中というわけには行かないんです。今だったら必要な時間の間中働いて、帰りにスーパーでお総菜を買ってくれば飯を食うことが出来ますけれども、このころはそういう店があるわけじゃない生活ですから、そして冷蔵庫があるわけじゃないですから、毎日食べるものは、夏だったら自分たちで採取して食べていかなくちゃならないんです。だから夏に時間を割けると言っても、このために一方では人手が掛かるということにも関わらず、それから時間が掛かるということにも関わらず、一年間の内の夏のほんの少しの時間しか割くことが出来ない

のです。だから長い年月掛かって、依然として完成せず、途中なのです。あれでももう50年以上掛かっているかもしれないんです。だからそういうものがあるという事なんです、これがまた記念物のおもしろいところで、目立つというものを僕たちが持つことによってですね、あっ、これは私の生まれ育った場所なんだということを強烈にその刷り込んでくれる格好なものなんです。私の田舎は長岡でそこにはなにが記念物かというと水道の給水塔です。ちゃんと見えるんです。だから写生なんかすぐしちゃうんですよ。ちょっとした屋根に上ると、市内のどこからでも見えるんです。だからあれは私にとって長岡の原風景の一つの重要な要素なんです。それから長生橋というのがあります。鉄骨のですね。信濃川に架かった今はもう第四位くらいになりましたが、長らく第一位だったんです。長さで。これもすごいものです。それからもう一つ六十九銀行、番号銀行の六十九なんです、新潟はですね。六十九銀行の建物が一番大きいんです、そのころは。だからそれが僕等の原風景を特色づける記念物なんです。

大館だったら何だったでしょう、今あるでしょうか、大館でもやっぱり必要なんですよ。例えば、何年か前にバルセロナオリンピックがありましたね。あのバルセロナにあるガウディの聖家族教会というのは、今年まで100年くらい工事をやってます。まだ出来ていない、後100年くらいかかると言われている。しかし100年経てば完成するなんて誰も信じていないんです。何年掛かるかわからない、けど作り続けているんです。けど実は、これは多勢が年月を掛けているという継続を表します。継続性。そうやって継続することによって、一緒に記念物を作るという連帯感がここに生まれるんです。そしてできあがりつつあるものが目立つもので、これがオラが国サの自分が生まれた原風景として記憶に焼き付いて行くわけですね。刷り込まれて行くわけです。だからこの記念物という物はものすごく大事なんです。我々がですね、例えば何か不安で何を拠り所にしていいかわからないでしょう。だからこそ何かそういう拠り所としての記念物を、もう一度、大湯の環状列石みたいなものを皆で作らなくちゃいけないんです。大湯の環状列石を、あれをそのままというのではないですよ。僕たちが記念物を作るとすれば、継続して、そして多勢で、年月を掛けてそしてああでもない、こうでもないと言いながら作り続けていくことによるオラがクニ意識みたいなものが出てくる。やっぱりそれがいいとですね、おかしいんじゃないかと思います。

ある時は、城を造ることが記念物なんです。あれは諸国の大名がですね、権力に任せて、そして人民をただ使役しているんじゃないんですよ。使役していましたが、あれは奴隷のようにこき使われたんじゃないで、あそこで皆食い扶持をもらっていたんです。工事に参加することによって、石工は発達し、土木工事をやり、設計をやり、監督がいて、それから建具師がいて、壁屋がいて、更に襖絵を描く人がいて、あれはものすごい大事業なんです。

だから記念物というのはそうなんです。全員でやると言うことなんです。我々の歴史は、ああいうその江戸時代だとかなんだとか、ちょっとした山城なんかでも、あれは大変なその強突張りの豪族に一方的に使役されたんじゃないのです。ちゃんと報酬、今風の報酬じゃないかもしれませんが、それがあって、合意の基にやっているんですね。だからとんでもないものができるんです。ストーンサークルでもですね、なんだか訳のわからない奴を何年もかけて営々と100年くらいかけて作っているんですよ、あれは。それは全員の合意がなければ出来ないことです。

我田引水と言われたらその通りなんですけれども、例えば、ヒントは地域にその即した博物館みた

いなものは、私はすごい記念物になると思うんです。東京都庁なんかは記念物じゃないんですよ。コッソリサッサと作っちゃったんですよ。で、あそこに疑惑が出てきたりするんですね。何年もかけていたりすると疑惑なんて出ようもないんですよ。疑惑が表に出る前に終わらせないといけないんです、そういうものは。今はそういう意味で記念物を作っていないんです。博物館なんかでも、私はそれぞれの地域で記念物としての博物館、そしてそれは内容もそうですけれども、目立つということによる帰属意識、私がかここに生まれたところに、これがあったという風景。情けないことを言えばそうかもしれませんが、僕たちは風景の中でしか生きていられないですね。だから外国でずっと生活したこともありますし、何回も外国へ行ったり来たりしていますが、だけど外国にずっと住み続けようと思わないですね。帰ってくるところがあるから、こういう私の心の記念物があるところに帰ってくるということがあるから安心して外国を廻っていられます。そういう記念物はですね、すごく人工的な空間を作って、今人とは何を求めているのか、あるいは Identity ということをよく言いますね。あれはなかなか訳しにくいんですけども、昔は私は“自分意識”と訳したことがありますが、自分意識ではもっと弱いのではないかと、私は“自分証明”、自分を証明するものは、私がか生まれて私の目に写ったものです。私の写り方です。私の家がかどこにあったか、そしてどこかで遊んでいた時、目を開けた時にこういう山があつてということなんです。

ちょっと時間が過ぎましたけれども、一つ最後に話題を一つ。そのかわり質問無しかな。へへへアリガトウ、それが私の作戦かも。質問で立ち往生するとね、さっきの司会みたいに苦労したんじゃないそうだから。

例えばですね、そうそう皆さんこのパンフレットをお持ちですかね。これの24頁、これに大湯のストーンサークルの絵があります。二重ありましてね、そしてここになんか真黒くありますね。左肩に、その左肩にあるのが、この小さなパンフレットの表紙にあるやつです。これ日時計と呼んでいるやつです。この日時計はですね、大湯のストーンサークルの万座と、野中堂の両方にあるんです。二つを結ぶとですね、実はこの西北の方向というのは夏至の日に太陽が沈むところの線を表すんです。これは昔、川口さんという人が既に指摘していたんです。ところが、みんなよってたかって無視して（よってたかって無視というのはなんです）、あるいは積極的にあんなことはだめだと言う声が大きかったんです。で、私はどうもそれはおかしいなあと、これを気にしていたんですね。で、いろいろ富樫さんとも話をしながらですね、もう一度見直したらですね、見事にやっぱりここに沈んでくるんです。それを間違えて、この二重の輪というのは、調査した人が円を書いたんです。円の中心がちょっとずれるんです。ずれるからおかしいと言っている人がいるんですが、これは後で作った中心ですからね。日時計と日時計を結べばいい。そうするとピシッと日没線に当たる。この間、雪の中、冬至の時にですねまた調べたそうです。そうするとまたこっちから日が昇る、実はこっちが東でしょ、こっちが西でしょ、で、実は、夏至の時はですね、こっちの一番北寄りから日が昇り、北寄りに日が沈みます。そして、冬至の時は一番南寄りから昇って、南寄りに沈みます。それがどの山に当たるかというものがだんだんはっきりしてきました。その例を挙げたらきりが無いというほどあるんです。だから今日は挙げません。これがまたちょっといいことかもしれません。あ、挙げますかね、一つ二つね、群馬県ですねこれまた有力な援護射撃のところでして、天神原遺跡というのがあつたんです。このストーンサークルの西側に、一人では動かせないような細長い石が三本倒れていたんです。全部

倒れきらないで、ちょうど棒倒しの棒が倒れかかって、まだ先端が付かないやつをこう起こしてやる。そして中心から望むと、真西に妙義山が見えるんです。妙義山は三峰なんです。三峰にあうんです。そして今度3月21日に僕行くことになっているんですけども、ここにですね、春分の日はこの妙義山の三峰の真ん中の頂上に、太陽が沈むんです。もう温泉も予約してもらいました。去年はちゃんと大湯に、夏至の時に来たんですよ、写真撮りに。で、富樫さんの車にぶつかって、3万円レンタカー損しましたけれども、しかしちゃんと写真撮りました。今度は妙義山の夏至の日没の写真を撮ります。

ところで、こうした事実はまだ強力に反対する人がいるんです。有名な佐原眞、水野正好さんとかですね、錚々たる連中が“あれは偶然だとか、思いつきだ”とか言って反対しているんですけども、しかしなぜ僕の方が正しいかということを証明してですね、最後終わりにします。これはですね簡単なことなんですよ、佐原さんは頭が良すぎたんです。そして早々とですね、縄文時代とはこういうものだというイメージを作り上げたんです。天才だから。本当に天才なんです。この人の右に出る人はもうおそらく僕がそうだったんですけども、佐原さんのレベルに到達できない見通しが濃厚になってきました。それぐらいの人なんですね。僕がシャッポを脱ぐんだからわかるでしょ。それぐらいの人なのに、なぜ反対するのかというと、あの人は頭が悪いからではないんですよ、そう言いたいんですね。だけどそうではないんです。かえって、頭が良くて、早々と縄文文化についてのイメージができあがったから、もうこの事実を組み込むことができないんです。そんな馬鹿なというかもしれませんが、もうちょっと簡単な例え話をします。積み木があるでしょ、丸、三角、四角、長方形とかブロックがあるじゃないですか。頭のいい子は、ぱっぱとそれを全部使っていい形を作っちゃうんです。そうすると、僕がこんなおもしろいのがあるよと、星形を持っていっても、こんなのいらぬということになるんですね。僕はモタモタしていたんですよ。そこにこういう新しいのがあるんじゃないかということに気が付いたんです。こういうことは佐原さんだけじゃないんです。山内清男というものすごい大先生がいるんです。この人こそ世界的な人です。ノーベル賞を挙げなくちゃいけないぐらいの人だったんです。この山内先生は、縄文文化の研究を進めて、縄文土器の名前の由来になった縄目模様が、縄を転がすことによって出来るということを見つけた人だし、見つけただけじゃなく、その種類が千差万別で、ものすごい種類があるのを全部解明した人なのです。で、ドイツ語、フランス語、英語全部に通じていて、マルクスの資本論はですね、訳本より原書の方が安いからといって、原書で読むような人なんですよ。それぐらいの人が、最後まで縄文文化は、紀元前2,500年説なんですよ、始まりは。ところが事実、今から12,000年前、紀元前10,000年前なんです。これはもうはっきりしているんです。いろいろな物理化学的測定法で。山内先生は、考古学者なのに、物理学にいちやもんを付けて、結局そのことについては、誰にも相手にされないで死んでいくわけです。大天才ですよ。なぜかという、さっきも申し上げましたように、あまりにも天才で、縄文文化というものを早くイメージしちゃったから、そしてそれは、紀元前2,500年前に始まらなければいけないんです。だから新しいことが出てきた時にそれに反対しながら死んでいきます。それこそ憤死です。

これを私はウサギとカメの原理と呼ぶんです。もう一度あのお話を思い出さなければいけない。天才には天才の悲劇があるんですよ。ウサギなんかは絶対に負けないのです、カメに。負けないのに負けることがあるんですね。で、これがウサギとカメの原理。どうも御静聴ありがとうございました。

(於：大館市中央公民館 平成8年3月10日)

本当に縄文時代観は変わったのか？

岡村道雄*

文化庁記念物課と言うところにおります岡村と言います。記念物課といいますとあまり耳慣れないと思いますが、私の課では遺跡・史跡と名勝と天然記念物の3つを扱っています。秋田県で言えば教育庁の文化課が文化財を担当しているのと同じです。その中でも私は遺跡のことをやっています。今、全国で遺跡はだいたい37万箇所あるということになっていて、そこで年間に大体1万件ぐらい発掘調査をしています。その発掘調査に1,200億円かかっています、他と比較すると文部省が大学等の研究者に出す科学研究費のトータルが1,000億円ぐらいです。一年間で使う額ですから大変な額だと思います。それで、その1万件の発掘調査を地方自治体や財団法人に属する専門の職員の人たちが実施するわけですが、全国に去年5月の統計で6,250人ほどおられます。そういった非常に大所帯の全国の埋文行政になってますが、国には私を含めて5人調査官がおり、この5人だけで全国の遺跡を担当しています。その中で私が一応まとめ役ということです。全国で起きてくる毎年の問題点等をひとつひとつ解決していくというようなこと、あるいは大きな埋文行政の仕組みを作っていくといった仕事をしています。この分野の本格的な行政の歴史が30年くらいしかありませんし、これから21世紀に向けて行政的に洗練された新たな仕組みを考えていかなければいけない。そういった大きな転換期にもきていると思います。そんな中で日頃は大体年間80日を少し超えるぐらいの出張をしています。今日のような講演は出張ではなく、出張届けを出して公務で行く出張が80日ぐらいです。ですから昼間は円滑な行政発掘、開発の事前調査の実施と、遺跡をどうやって守っていくかといった仕事をしています。昼間は役人の顔をして、今年で10年になりましたが、背広が似合ってきたでしょうか。今日は、そういった役人稼業を離れて、本当に縄文時代観は変わったのか？といったことを、私の夜の生活、夜の生活と言ったら何となく変な感じですが、私は大体夜と土日は比較的遊べます。夜の趣味をきちっとしていないと昼間イライラします。電話もしょっちゅう鳴るし、1日に大体1~3組ずつ全国から来るお客様に対して、こうしたらいんじゃないかとアドバイスしたり、あるいは毎日のように会議を開いています。そんなイライラの時間の中で、夜はただ勉強すれば何かが分かるという非常に単純でわかりやすい学問の世界、これは本当にありがたい世界です。何か勉強すれば必ず何かが分かるという、そんな中に夜は逃げ込んで少しづつ勉強しています。

今日は、本当に縄文時代観は変わったのかというテーマにしたんですが、これはどう言うことかと言いますと、三内丸山が調査されてはじめて大変な遺跡が見つかったかのような宣伝のされかたをする。三内丸山遺跡をきっかけにドンドン東北の縄文の事を分かってもらって、これをきっかけにさらに東北・北海道にある、あるいは東日本にある縄文時代の事を、あるいはもっと広く言えば遺跡のことが広く皆様に分かっていただけの、そのきっかけだということで縄文時代観は変わった変わったと私も一緒になって騒いでいます。東京にいて10年になります。宮城県に居た時はしょっちゅうテレビ

*文化庁記念物課主任文化財調査官

に出ていましたが、東京に来て私はテレビに出る顔じゃないし、ずっと出ませんでした。それが、10年目になってこれは大いに宣伝する時期だと思ひまして去年は相当テレビに出ました。それもこれも埋蔵文化財・遺跡を通して世の中の役に立つ、そういった部分を出来るだけ拡大したいと思ったからなんです、そういう意味で縄文観は変わったと言っています。本心から言ってもやっぱり変わったと思います。今日はどんな部分が、どんな風が変わったのか、変わった部分をかいつまんでお話ししたいと思います。ただ本当に三内丸山で変わったかと問われますと、それはそうじゃない。やはり10年くらいの間いろいろな事が分かってきまして、そして三内丸山が5haという広さ、非常に広い範囲を掘って遺跡の広がり分かってきた。いろいろ珍しい要素があつたの遺跡の中に集約的にあつたと言うことだろうと思います。決して三内丸山だけで変わったのではなくて、50年前からのいろいろな発見が積み重なって、大きく縄文時代観が変わったと言うよりも、解明が進んできて分かるようになってきたのだと思います。私はそもそも東北地方、仙台周辺で20年間住んでいました。小学校3年の頃から、考古ボーイというか裏山で遺跡を掘って楽しんでいました。きちんと勉強をはじめたのは仙台に行ってから20年間なんです、その間は大体旧石器時代の研究をやってきました。私の師匠は芹沢長介と言う人ですが、芹沢先生は縄文時代の研究家だと思っていました。私は新潟の上越生まれですが、上越の図書館に3冊だけ考古学の本があつて、その中の1冊が芹沢先生が書いた『石器時代の日本』でして、そのほとんどが縄文の事を書いています。東北大に行けば芹沢先生のもとで縄文の事が学べると思って入学したんです。しかし、その頃の芹沢先生は石器だか石ころだかよく分からない資料を研究されていて、日本にも何十万年前から人が住んでいたんだと主張されていました。「お前これをやれ」とすすめられて、何とはなしにそれを研究しました。日本列島にいつ頃から人が住み始めたのか、日本列島の一番最初の人類はどこまでさかのぼれるのかと言うテーマにしろと言うことで。宮城県で座散乱木遺跡、馬場壇A遺跡の調査—今は上高森遺跡が一番古くて、今から60万年も前から日本列島に人がいたということが分かってきましたが一だとか、北京周口店に北京原人がいて生活していた頃もう日本にもそれと同じ時代の人々がいた、そういうことを明らかにしていく研究をしていました。ずっと旧石器時代を研究していましたが、東北歴史資料館に行ったら松島湾の里浜貝塚を掘りまして、縄文時代の人たちはどんな物を食べて暮らして居たのかと言うことを研究するようになりました。貝塚は言ってみれば生ゴミ捨て場ですので、生ゴミあさりをして当時の人たちはどんな物を食べていたのか、と言うようなことを研究してました。

ところで、今日縄文時代の話をするとは、だいぶ私も変わったなと思うんですが、なぜわたしがこの頃縄文をやるか、なぜ今日縄文の話をするか、このことについてちょっと聞いて頂きたいと思ひます。私は東京に行ってから10年がたちますが、その間に縄文時代がドンドン見直されてきている。いま日本に1,400ぐらい史跡がありますが、そのうち100近い史跡が縄文時代です。旧石器時代で国史跡になっているのが7つしかない。今、縄文時代の人々の精神、物の考え方とか暮らしぶりというのは一体どんなだったかを解明し、縄文人に学ぶ必要性が何か今の社会、世相の中から無意識的に感じられているような気がします。縄文縄文と皆様がおっしゃるように、具体的に私の仕事から申しますと、国史跡になっている縄文時代の遺跡を解明してそこで分かったことから、例えば家の跡を復元したり、お墓の跡を復元する。あるいはそこで行われていたお祭りなんかを復元して再現する。そういった仕事が必要になってきて、遺跡の内容、縄文時代は具体的にどんな生活をしていったのか、縄

文人は何を考えていたのか、と言うような事まで説明できないと仕事をしていけなくなっています。私の研究は、人の書いたものを読んで勉強し、ワープロに向かいながら考えをまとめ原稿を書いていく。ファーストハンドの物が扱えない。生の資料が扱えない。人の考えた物をまとめることしか出来ない。あるいは全国を100日位歩いていますから、その間にあんな事がある、こんな事がある、といういろいろな情報を集約できる立場にありますので、そんなことから勉強している。

そこで今日は、縄文時代の全体像がどんなだったか、新しくどんなことが分かってきたのかということについてお話ししようと思います。本当に縄文時代観は変わったのか。最近、縄文時代観が大きく変わった理由の一つに、開発前の大規模調査をしていることがあります。三内丸山は運動公園ができる、伊勢堂岱遺跡も道路ができる、と言うことで発掘調査が行われました。全国的には開発前の調査の原因の一番大きなのは宅地造成で、中には広い範囲を掘ることがあります。開発が大規模化していますので、大規模な範囲を全部掘って、その遺跡の内容を調べるようになってきています。ですから集落全体だとか、台地上にある村の全体を掘る。あるいはこの頃は周辺にも何か施設があるのではないかと調査する。考えて見れば当たり前の事なのですが、台地の上だけではなく、水だって利用しなければいけないし、周辺の林の中にも入り込んで行かなければいけない。そのためには隣り村との間や水場との間に道をつくらなければならない、というように村とその周辺とさらに向こうの村と連携するためにいろんな施設を整備している。今まで考えていなかったような所まで発掘するようになって、こんな所にこんな物があるんだと言ったことがドンドン分かるようになってきている。これも大きな背景だと思います。

また、低湿地遺跡の本格的な調査の例として福井県の鳥浜貝塚が画期をなしました。鳥浜は終わってもう15年くらい経ってますかね。河川改修が原因で10年くらい掘っていました。河川改修と言うことは、遺跡は水にいつでも浸されている低いところにあると言うことです。水漬りの所ですから、木の実とか木で作った道具だとか、あるいは生ゴミ、食べかすなどが捨てられていたり、あるいは犬の糞だと思いますが、糞の化石になった物がでてきたり、縄文の縄を転がす時の縄そのものが出てきたり、乾燥した台地の上ではみんな腐ってしまうような物がわんさかでてきた。すごいということで、そんなのがきっかけになって自然科学との提携が進んだというような画期的な調査が鳥浜貝塚で行われた。つまり、ドンドン調査の面積が広がっていき、生々しい出土物は縄文文化の復元的な研究を促しました。今まで縄文時代の研究というと、どちらの土器が古くてどちらの土器が新しいか。土器型式と言うのがあって、土器で年代の物差しを作るような作業を盛んにしていました。どうしても土器中心の研究で、今でも大体縄文時代の論文の内の3分の2くらいは縄文土器の研究論文のようです。そうした中で、先ほど言いました1,200億円も発掘でお金を使っています。その結果何が分かったのかと言うことが、常に問われるようになってきています。何が分かってきたかということの説明するときに、当時の人たちはこんな生活をしていた、というふうに復元的に説明することと、もっと更に今現在の社会にとってどんな意味があるのか、これからの行く末を見通す上でも縄文時代はどうだったか、平安時代の東北地方の暮らしぶりはどうだったのか、そしてそれに学ぶべき物は無いのか、もっと進めて、その遺跡を保存してその遺跡に行ってみたら当時の生活が分かって、その地域の人々の心のよりどころになるとか、町づくりの上で確かな空間として、自分たちの祖先が歩んできた歴史に触れ、歴史を学ぶ場所としたり、歴史に触れて自分たちの精神のよりどころを見つけていく、さら

に進めて人が沢山きて観光など、町おこしの材料になる。そういった事が盛んに求められてきている。何が分かったか、それだけお金をかけて何が分かったかと言うことが非常に問われている時代だろうと思います。都道府県の埋蔵文化財センターにいる専門職員が、発掘費用を年間1人当たりいくらずつ使っているか単純に計算すると、大体3,500万円から4,000万円くらい使っていることになります。市町村の専門職員で大体1,900万円くらい使っています。それだけの事をしているのだからもっといろんな事が分かなければまずい。遺跡をドンドン壊していつているのだから、いろいろ分かなければ困る。そういった背景のなかでより復元的に縄文時代を語る、各時代を語る、と言う事が問われるようになってきています。毎年1万件も発掘しているんですから、膨大な資料が蓄積してきているわけです。単純に出てきた出土遺物の量だけ言いますと、パンケースみたいなものに入れて全国に490万箱くらいあります。膨大な資料が出てきて、その中からいろいろ歴史が復元出来るような材料が用意されてきた。あるいはいろいろな地域と比較研究をして縄文時代を復元する、そういうことが出来るようになってきた。そういう大きな背景があった。そういう中で縄文時代が分かってきて、ドンドン解明が進んでだんだん縄文時代が変わってきている、縄文時代観が変わってきている、と言うふうに見えてきていると思います。ところで、縄文時代と言っても全国広いわけで、大ざっぱに言って、鹿児島県から北海道までの間の縄文土器が使われていた時代と言ってよいと思います。その中で地域によって自然環境も違いますし、そこで暮らす人たちの考え方も生活の様式も違います。今日はそんな細かいことは全部抜いて、大体、東日本の範囲で、いろんな事実をモザイク状につなぎあわせていくと、こんな縄文時代の進んだ生活の要素が分かる、と言ったような話をします。

まず、食料獲得と保存・貯蔵について説明しましょう。最近では、貝塚や低湿地遺跡の調査が進展して、例えば層ごとに定量分析をするようになってきている。定量分析は遺跡の土や貝層を全部持ってきて、その中に何がどれぐらいの割合で含まれているかという事を細かく分析するんです。今までのように、ただ目に付いた物を掘り上げるような調査ではなく、出てきた物全部を分析してみる。そういうふうにしてみますと、例えば貝塚を掘ると意外と細かなイワシの骨だとかアジの骨だとかの小魚の骨が沢山出てきます。今まで教科書的には、何となくマグロやマダイ、あるいはクロダイをとっていたように思われるかもしれませんが、そうじゃなくて、内陸の湖でもフナやナマズに似たギギという魚を多量に捕獲しています。実際、90%を超えるぐらいの量が小魚類だったりしています。小魚を多量に囲い込んでとるような技術、例えば、川の流れをうまく利用して袋状になるような柵を作ったり、罟のようなものをおいてその中に魚が沢山入ってくるようにする、あるいは海だと石垣のようなものが考えられます。魚がどっと押し寄せてきて、湾の近くから、湾の奥に入ってきます。それを遮断して、水がひいたときに囲い込んだ柵や垣の中に多量に魚が残る。そういった割合単純な仕掛け、言ってみれば寝て待っていれば捕れる、そういった仕掛けで魚の習性をうまく利用して沢山捕獲する、そういうことをしています。

また、山のほうだと、落とし穴を一山全体に沢山作ると言ったこともやっています。獣道もよく分かっていて、動物も囲い込んで追い込んでとる、と言うような仕掛けも作っているのです。出来るだけ一生懸命働かないで多量に物が捕れるといった仕掛けを考え出しています。今でも、縄文人はシカやイノシシと言った大きな動物だとか、マダイやクロダイを捕って、マグロも遠洋に出かけて捕っていたなんてことをいってる人がいますが、実際はそうではなく、出来るだけ働かないで、自分の身の

回りで出来るだけ多量に捕って、一日おしゃべりでもしながら生活している。大体1日4時間も働いたらいいんじゃないかと言っている人もいます。このような定量分析という細かな物まで捨てないで分析する事によって、いろいろな事が解ってきた。

今までは魚とか動物の話をしました、2番目に堅果類の話します。縄文人は、堅果類、クリだとかクルミだとかトチの実だとかの堅果類も沢山取っている。そう言う堅果類と貝や魚や獣などの動物性の食料とを、大体どの位の割合で取っているのかと言うのがなかなか今までわかませんでした。鳥浜貝塚が調査されるまではと言っていいでしょうか。あまり湿った低いところを掘っていない時には、弓矢で獣を獲り、魚を網で捕ってということをしていましたが、どうも一番効率のいい木の実がなってきたときにみんなで集まってドンドン採ればいい。木の実にも相当依存している事が解ってきた。実際にどのぐらいの割合なのかといった事がなかなか分からなくて、私も貝塚を掘っているときは動物の骨と貝殻ばかりを見ていました。たまに木の実が炭になって出てきますので、木の実をだいたい食べていたんだなと言うことが分かりますが、実際どれくらい木の実を採っていたのか、これがなかなか分からない。ところが、近年、滋賀県の琵琶湖のほとりにあります粟津という湖底に堆積した貝塚が調査されました。ここでは木の実と動物の骨、貝殻と一緒に出てきて、秋には木の実を採り、夏には魚を捕る、と言った季節的な繰り返しをはっきり分かりました。さらに、ここではカロリー計算もされています。簡単に言いますと、どんな物がどのぐらいの割合で出てきたかを1つ1つ現代の標本を作って、例えばクルミを採ってきて、このクルミと同じクルミが何個出てきたかを数えます。また、粟津の場合はトチの実がたくさん出ています。トチの実が何個あるか、それから貝殻何個、キギとかフナがどれぐらいはいるか、イノシシやシカ……、と言うように食品リストを作って行って、その量を調べて、クルミ1個あたり何カロリーとれるか、この魚1匹あたり何カロリーとれるかとカロリー計算していきますと、大体総カロリーの6割が木の実だと解りました。大体、植物質食料が6に対して動物質食料が4の割合というのが、現在の温帯地方にいる狩猟採集民の食料割合です。こういう事から言って、十分に妥当性のある結果だろうと思います。粟津は内陸の湖沼地帯ですから、たぶん海辺はより海の魚に依存しているでしょうし、山では木の実への依存率が高い、そういうことになると思います。いずれその地域、その地域の自然環境の中で、出来るだけ楽に多量にとれる、と言うことを基盤にしているようです。これは当たり前の話です。自然を熟知して、どこに行ったら何がとれるか、食料はどんな物がとれるか、よく知っていて、それを効率よく取り入れています。

それから、この頃クリを栽培していたのではないか、三内丸山でもクリを栽培していたのではないか、と言うことが盛んに言われています。これもDNAというクリの中に含まれている遺伝子の配列が非常によく揃っているので、栽培することによって性質を均一化していく中でDNAが揃うんだという説明がされてます。しかし、それは本当にそうなのかなと思います。科学の世界は自分の目で確認できないところが何となく不安です。先ほどの報告で墓の分析について科学的な分析をしますと言うような事を小袋岱遺跡のところで言っていました。墓の分析では、脂肪酸分析が最近よく行われています。どうも、この脂肪酸分析も怪しげです。私もずっと自然科学者につきあっていますが、人文科学の人よりも遥かに科学的でない自然科学者もたまにはいますし、その理論はあくまでも理論であって、ほんとに正しいかは分からないこともあります。そういう意味では考古学的事実とクロス・チェックしながら、どちらが科学的に正しいのか勝負しなければいけないと思います。そういう

勝負の歴史をここ 20 年ぐらい振り返ってみますと、必ずしも自然科学にだけ軍配が上がっているわけではありません。消えていった方法もあります。その時にものすごく流行った方法が今はやられていない。そういう意味でもクリの DNA は大丈夫かなと思わなくもありません。もう少し付け加えますと、青森あたりがクリの分布の限界なんですね。北海道では道南に少しあるくらいで渡島半島まで基本的には達していません。一番北の極限のところ、ある部分でしか山栗が生えていなかった状況も考えられます。DNA が揃うのは、栽培したから揃うのではなく、植生限界だから揃う事だってあるかもしれない。まだまだ分かりませんが、いずれにせよ遺跡でクリが多量に出てくる、花粉もいっぱいある、これは事実です。静岡県の森の石松で有名な森町というところに坂田北と言う遺跡があります。この遺跡の谷底に、ひよろひよろと水が流れていて、湿ったところにクリの木の根が並んでいて、周りにクリだとかドングリ等を貯蔵している穴がある。地下に穴を掘ってためておくような施設が出てきているのです。それだけの場所が発見されています。そこのクリの実是非常に大きいです。本来、陽樹、つまり日当たりいい高いところが一番適した木ですが、その場合は湿ったジメジメしたところにおりてきた林である。あんなのを見ているとクリを栽培していたのかなという気がします。たぶんクリは栽培されていたと思います。遺跡周辺の花粉分析結果はクリが多いですし、縄文人が使っている木の道具や建材を調べるとクリ材がほとんどです。北陸地方に杉が少し使われていますが、クリが非常に沢山使われています。クリの実に至る所に出てきます。本来食べてしまえば無くなってしまいますが、クリの実があれだけ炭化して出てきているということは、たぶんその背景に相当クリを採っていただろうと言えると思います。この頃、中間温帯と言う区分が盛んに植物のほうで言われます。中間温帯で主体となっているのはクリです。どうもクリに相当依存していた生活であったということが言えるそうです。クリだけでなくクルミも、そして後半にはトチノミもメジャーになりました。一方、縄文時代に農耕があったかどうかと言うことがずっと議論されてきました。この頃は、ひょうたん、豆類—緑豆とかですが—、ゴボウ、エゴマだとか、栽培種と考えた方がよさそうなものが結構出てきていて、縄文時代に栽培があったかどうかと言うレベルでいうと確実にあったと言っていいと思います。ただし、それは主体にはなっていなかっただろう。栽培種は知っていたけれど、それを取り入れて、特定の栽培植物に頼るような生活は選択しなかったと言うふうに考えた方がいいんじゃないかと思います。先ほどから言っているように、身の回りの食べられるもの、たくさんの種類の食べられるものを知って、うまい順番に、効率のいい順番に採っていったと言っていいのではないかと。どっか欠けても大丈夫なような仕掛けを身の回りで作っていたのではないかと思います。そういった時に、栽培植物はその一部分だという気がします。そして、このように考えてみると、縄文人はそれほど一生懸命に働かなくとも十分周りの自然は豊かな恵みを与えてくれた、そんなふうに考えられそうです。じゃあ先ほど言いました物は、春と秋の季節にどどっと多量にとれます。春と秋に魚は押し寄せてきますし、大きく依存していた木の実、秋の 10 月頃に集中的に採れます。一時に大量に採れたものを、保存貯蔵して、まんべんなく一年間暮らすか、その仕掛けを作る。木の実、冷蔵庫がなくても保存できますが、ほかのものは保存貯蔵の仕掛けを作らなければいけない。次にその工夫の話をしていきます。

まず、煮て乾かす方法があります。煮ればある程度もちます。これは当たり前の事ですね。干し貝を作っているのではないかと、つまり、貝を茹でてむき身にし、干して保存食量にしていたのではない

か。これはずいぶん昔から言われていました。後でちょっとスライドでご説明しますが、東京のど真ん中の北区の中里貝塚というところでは、干し貝を作っていたらしい作業場の跡や干し貝を作ったときの沢山の貝殻が出てきています。4mほどの厚さの貝層がずっと砂浜の上に1kmにも渡って形成されています。いろいろなものを干して、保存してしている。それから薫製があります。図1は鹿児島市掃除山遺跡で見つかった炉穴で、今から1万1千年ないし2千年ぐらい前の土の中に掘られた穴です。図の上の方は上から見た坑^{あな}の形、下の方は断面から見た穴の形です。上の図の右側が人が入る皿状に窪んだ穴で、その左側にトンネルがあって煙が出ていく。トンネルの出口の底面あたりには脂肪酸が検出されています。先ほど怪しげな方法だと言ってすぐ援用するのも何なんですけど、とにかくここに脂肪が多いというのは事実です。それから炊き口のトンネルのすぐ手前あたりに炭が沢山出てきています。ここで火を焚いて実験してみますと、トンネルに煙が誘導されてその先から煙がぼんぼん出てくる。その煙の出口に鳥だとか魚をぶら下げておきます。そうすると3時間も4時間も燻すと立派な薫製が出来て大変おいしいらしい。実験結果もかなり良好ですし、これは日本で一番古い薫煙用の施設と言えそうです。ここ以外でも、関東より南では、縄文時代早期まで—今から6千年位前まで—盛んに薫製という保存食料品を作っていたらしい。ひとたび、薫製という料理方法を獲得したわけですから、こう言った地下の穴の中で薫製を作ること自体はやめました。たぶん薫製そのものは続いていたんだろうと思います。そういう証拠がどこかにあるんじゃないかと思っています。

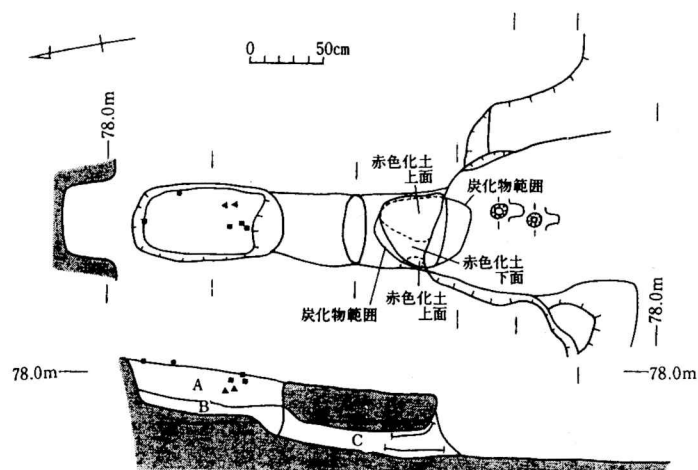


図1 掃除山遺跡の炉穴

それからレジユメに塩蔵と書きましたが、塩引きのような物です。塩に漬けて保存する。縄文時代後期末になりますと、専用の土器を作って浜辺に並べて海水を注いで、これを煮つめて塩を採るということを始めます。一方、例えば真鯛一匹を考えますと、頭一つに対して背骨が24個あります。貝塚に捨てられている頭と背骨の比率を見ますと、頭が圧倒的に多くて背骨が少ないのです。たぶん頭をはずして、背骨の付いたまま開きにして持ち出す。塩蔵品にして出す。干して出す。そう言うことをしていたようです。鯖なんかも、海辺の貝塚では頭に対して背骨が非常に少ないです。貝層を全部取ってきて調べていますから、これはサンプルの見落としではなく、頭だけはねて、貝塚、つまりゴミ捨て場に捨てて、背骨付きの開きを持ち出している。また、仙台湾で塩を作った時の土器が山形県村上市の宮の前遺跡で出てきています。相当遠い距離を、たぶん土器だけでなく、塩がぴっしりくっついてような塩付き土器の破片が山の手に乗ばれていたようです。

それから木組みのさらし場と言うものも見つかっています。これも後でスライドでお見せしますが、近くに流れている小川に木組みや石組みで池のような物を作って、その中に木の実をさらすという施設があります。木の実をさらして灰汁抜きをしたり、それを粉にして貯蔵すると言うことが盛ん

に行われていたと思います。調理方法を見ても、煮沸して消毒して干し貝にしたり、煮込んだり、干したり、あるいは薫製にしたりと様々です。また、木の実を粉にして木の実を主体にした縄文のクッキーのようなものだとか、ハンバーグのような形をしたコッペパンのようなものだとかを作っています。あるいは、細いかりんとうのような物だとかが全国の20遺跡ぐらいから出ています。青森県、岩手県など東北でも出てますし、関東周辺でも見つかってきています。大体東日本全体にそういう木の実を粉にして焼いたパンのような物が見つかっています。そんなふうにしてやると相当保存がききます。木の実そのままのほかに、このようにクッキーのように調理した物でも保存する。

3番目に貯蔵穴群について説明します。地下に穴蔵を掘ってそこに木の実を貯蔵しておきますと、夏でも18度位に保って、冬でも零下になりません。地下の冷蔵庫のようになっていて、木の実をかなり長く貯蔵できる。実際、宮城県の蔵王山麓などでも木の箱の中に砂を入れて、そこにクリを保存している。土の中に木の実を入れて貯蔵するという方法がいまでも行われているわけです。食料をとにかく確保して保存して、一年中安定して暮らせるような仕掛けをしていた。大きな村を作って定住して、そこにじっとしているとその村で不足している物が出てきます。不足する物を他から効率よく取り入れるために、広域のネットワーク、つまり村と村とのネットワークが必要になるわけです。縄文人の日常生活圏は隣の村と競合しないような自然の自分たちのエリアです。一般にとりの拠点的な遺跡までの距離が大体4kmくらいですから、この日常生活圏は半径1.5kmから2km位と考えられます。更にゴミ捨て場の中から出てくる主体となるような生ゴミを見ていくと、大体1km位、もっと近いでしょうか、数百m位の範囲の中で採れるような物ばかりです。そういうふうに日常生活圏は設定出来ます。そういう日常生活圏ではなくて、中・長距離交易圏と言うものがあります。半径100kmとか、物によっては200~300km先から不足物を広域で取り入れる、そういうシステムを作っています。図2・3を見ていただけますか。図にはアスファルトとオオツタノハ製の貝輪と言う一番典型的な物をあげておきました。アスファルトというのはご存じの通り縄文時代の接着剤です。現代では道の舗装に使われるアスファルトです。天然で出る場所は日本海中心にいくつかありますが、特にその中で秋田県の昭和町槻木と言うところから自噴してくるのがよく知られています。そこはコールタールの池のようになっているみたいですが、その周辺に土器がばらばら出てくる。アスファルト産地で遺跡があるのは今のところこの昭和町の槻木しかない。近年のアスファルト産地の分析結果によりますと、多くはこの昭和町産らしい。これらは北海道大学の小笠原先生の分析結果ですが、どうも秋田県の昭和町を中心にアスファルトが図2のように広い範囲で供給されているようです。まるで囲った所は石の鏝に矢柄をつける時の接着剤としてアスファルトが、石鏝100本のうちの30本くらいに頻りに用いられている範囲です。仙台湾なんかは昭和町から見れば相当な遠隔地です。そういう所にアスファルトが土器に入れられて運ばれているようです。どれくらいの距離でしょうか。北海道南部までいっているようですので、200~300km位はある。石斧は100km圏位です。糸魚川産の蛇紋岩の石斧が広がっている地域があります。これは大体100km圏位です。新潟市の北にいけますとほとんどなくなってきます。あるいは富山県に流れている境川流域にある石を使った石斧の広がりも大体100km圏位です。石斧もそれぞれの村で作ったんじゃなくて石斧を作る村があった。石棒という石で作った男性のシンボルを作った村もありました。今までのところ、石棒作りの村は群馬県、岐阜県、富山県、京都府にそれぞれ1箇所、全部で4つ見つかっています。あるいは耳飾りを作る村があった。それから塩を作る

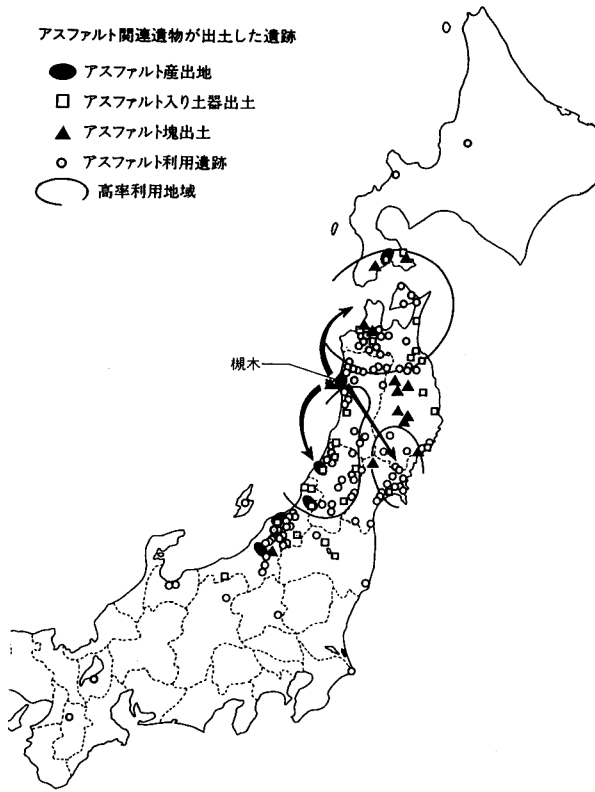


図2 アスファルトの道

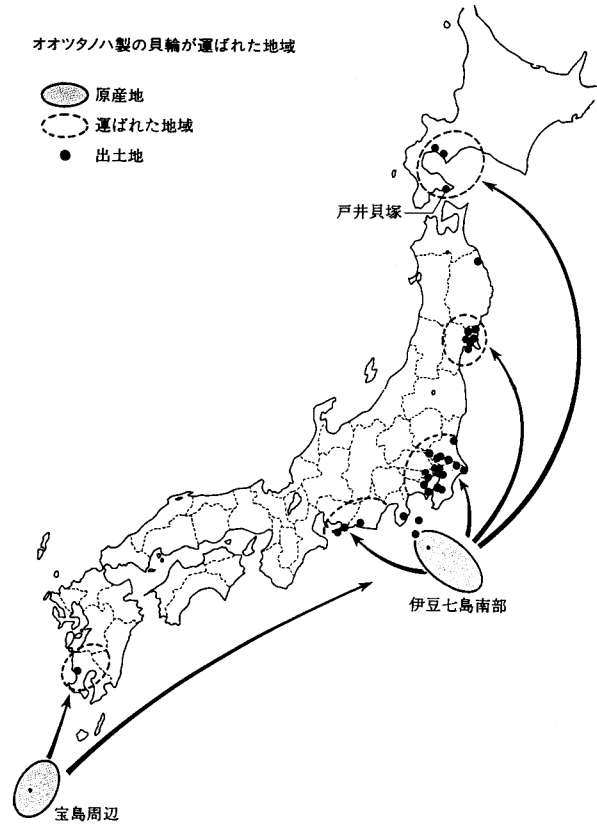


図3 オオツタノハの道

村があった。そういう手工業的な生産をやっているんですね。今後、更にある特殊な物を作って周辺の村に供給していると言った手工業的な姿がドンドン見えてくるだろうと思います。それから、先ほども黒曜石は当時の大切な石の槍の材料だと言う話が小袋岱遺跡の報告でありましたが、黒曜石はやっぱり石器を作る材料としてはピカイチです。旧石器時代の人、200~300km離れた非常に遠いところまで採りに行っています。縄文時代になるとちゃんと広域ネットワークが出来ていて、黒曜石は供給されています。黒曜石は割合に供給システムが分かっているので例としてあげますが、たぶん他の物も同じような運搬のされかたをしていると思います。中部高地の真ん中あたりに黒曜石産地がいくつかあります。その黒曜石が採れる山の麓に、例えば茅野市、原村、諏訪市などですが、縄文時代中期の集落跡で20~30個ほど黒曜石の原石をストックしている跡が見つかっています。麓の20~30km位の範囲にある定住的な村にはほとんどみんな黒曜石がストックされています。それが200~300km位離れますと、甲府盆地だと一番遠い所では群馬県の前橋、栃木県の佐野とかの北関東あたりですが、今度は拠点の村だけに入ります。拠点の村、つまりその辺の地域の中心的な村に黒曜石がストックされているのが発見されています。それからその周囲の村に黒曜石原石が供給される。そこで原石から石器を作っていて、石器の作りかけとか石器のかすなんか一杯出てきます。ところがこの地域を離れると、具体的に言いますと千葉とか、茨城あたりですが、黒曜石は完成した石器しか発見されません。この完成品も原産地から何100kmも離れていますから、小さくなっています。大事な石材だから、何度も修理しながら道具を作っている。そうして小さくなった完成品の石器が千葉・茨城県なんかでポツポツ出てきているのです。

今話を総合しますと、原産地の麓の村が黒曜石を採り出してストックし、そのある部分が200～300km離れた拠点的な村に持ち込まれる。そして、その拠点的な村を中心に原石がばらまかれ、更に遠いところには完成品しか運ばれない。そういった村と村との広域のネットワークがだいたい見えてきています。具体的にこの峠を越えて、こう降りていったその麓の村に黒曜石がストックされていた。大体この谷間をずっと行った北関東の山間の村に黒曜石はいったん中継されると言うような具体的なルートまで見えるような状況になってきています。図4が、黒曜石が20～30個ストックされている穴です。村の広場にストックされています。竪穴住居のすぐ脇なんかにもストックされています。図5は、伊豆の河津町の後期を主体とした段間と言う遺跡から見つかった20kgだったかの大きな黒曜石の原石です。これは伊豆七島の神津島の黒曜石が舟を使ってずっと大島をへて、ここまで運ばれたものです。また、大分県の姫島にも独特な灰色っぽい黒曜石があります。それが国東半島の羽田と言う遺跡にぼつぼつ出てきます。要するに陸揚げ港があるわけです。舟でずっと黒曜石が運ばれて、陸揚げ港があって、そこを中心にして分散していく、という図式が見えてきています。

次に図3のオオタツタノハの道について説明します。オオツタノハと言う貝は、南の島、トカラ列島の宝島とか伊豆七島でもずっと南の方でないと捕れない傘貝の仲間の扁平な貝なんですけど、その真ん中をくり



図4 高風呂遺跡の住居址内の黒曜石集中地点

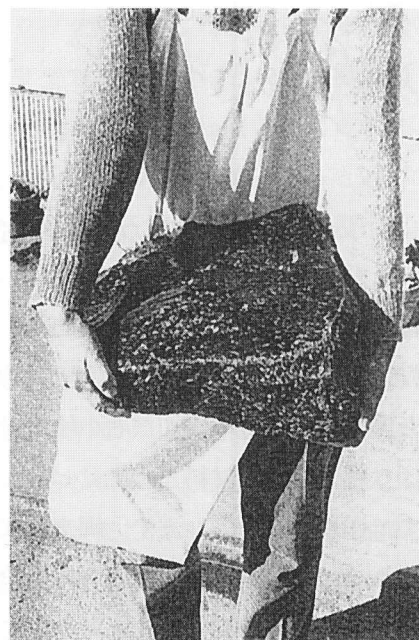


図5 段間遺跡から出土した重さ約19.5kgの大形黒曜石

ぬいてプレスレットにしています。この貝輪の完成品が、東京湾周辺、霞ヶ浦周辺、それから仙台湾と北上川流域、岩手県の久慈の二子貝塚、北海道南部の戸井町戸井貝塚だとか、伊達市有珠10遺跡だとかそういった所に出てきています。要するに1,000km、2,000kmの範囲を貴重品が動いている。そういう例が増えていきます。琥珀も同じです。琥珀は、岩手県の久慈、千葉県の銚子、あとは福島県いわきの海岸、それから岐阜県の瑞浪などいくつか産地があります。琥珀をたんねんに追っかけていくと相当出ています。さきほど話をしました滋賀の粟津湖底遺跡、石川県の能都町の真脇遺跡からも琥珀が出ています。随分琥珀も広がってきています。この琥珀の産地同定をしますと、いわきの海岸から採られたものが山梨県に入っていたりします。この場合でも200～300km離れています。いろいろな面で物流が見えてきています。それを支えたのは海路と尾根や谷伝いの陸路だったでしょう。特に、先の

オオツタノハ製の貝輪でおわかりでしょうが、もっとも頻繁だったのが海路と考えられます。黒曜石もそうですが、舟を使うと多量に運搬することができます。そういう意味で舟は便利です。イモガイも珍重されていて、縄文時代の早期から、今から6,000年、7,000年位前ですが、イモ貝や寶貝が大きく日本列島の中を動いています。

踏分け道や木道が発見されています。踏分け道が一般的で縄文時代でもかなり分かってきています。鹿児島島の種子島の奥仁田と言う遺跡で12,000年前の踏み分け道が見つかっていますし、鹿児島島の縄文早期の前原遺跡と言うところでも村の中を歩いて、谷筋を降りていく道がわかる。そういった例が出ています。北海道でも2・3例出ています。また、木道というのは、村からおりて隣の村に行く途中のじめじめした低湿地を歩くときにクリ材をだーっと横に並べて、それが動かないように杭を打って、何10mに渡って作った物です。このような木道が、埼玉県や神奈川県などで見つかっています。また、丸木舟を転用した木道が淡路島や鳥取県で見つかったりしており、随分そんな例が増えてきています。

さらに、山形県境に近い新潟県北部の朝日村にある元屋敷遺跡からは、ついに石敷きの道が発見されました。この地域に大きなダムの計画があり、ダムができると遺跡が水没するので、その前に調査を行っています。この元屋敷遺跡では石斧作りを盛んにやっています。ここでは、水場を作って、その脇で、石を割って水を使って研ぐ石斧作りをしています。水場は2つあって、お互い40m位離れています。その間に幅が2m位の道がある。その道の路肩には石が並べて置いてあって中には砂利が敷かれてある。砂利の中には細かく砕いた土器なども混じっていました。

一方では、舟の水上交通があります。丸木舟には前の方と後ろの方に間仕切りというか境を作っているものもあります。丸木舟は全国で大体40遺跡から100艘位出ています。残念ながら北海道・東北では確実な物は出ていません。ただし、郡山市ではほぼ丸木舟と言っていい物が出ています。オールは東北地方でもぱらぱらと出ていますから、舟があったに違いありません。丸木舟は大体7m位の長さのタイプと、4m弱位のタイプの大小のタイプがあります。7m位のタイプと言うのはもう小型漁船の大きさなんです。小型漁船で大海に出て行ったようです。今まで丸木舟は割合内陸で見つかったので、内陸専用だろうという意見もありましたが、この頃は海端からもかなり見つかってきています。それらはやっぱり7m位の大きさですので、やはりこれで大海にでていったんだろうと思います。さらに、確認しやすい黒曜石を例にあげて、少し補足しておきます。黒曜石の産地分析からは、沿海州と東北日本、九州と朝鮮半島南部がそれぞれ頻りに交流しているのが分かってきています。そのぐらいの海はへっちゃらで舟を出している。先ほど伊豆七島のことでも説明しました。伊豆半島まで舟による物流が認められた。相当の舟の行き交いがあっただろうと言うことが分かってきています。このように、資材なんかを安定して供給するために物流のネットワークができた。それは単なるネットワークではなくて、運搬道具、運搬路、それからどこの村にどんな物を作っているのか、という集落と集落の情報ネットワークがなければ成立しないわけです。そういう点で相当高度な社会的な仕組みが出来てきている。黒曜石なんかは弥生時代になると、東北・関東などの東日本では社会的ネットワークが崩れて、ほとんど流通しなくなります。まだ打製石器が使われていますが、ほとんど黒曜石が流通しなくなって、在地の石材で石器を作る。東日本は弥生時代には、いきなりそういう縄文時代からの社会的ネットワークが崩れた。東北日本でこれだけ発達した縄文文化は、単純に考えると弥生

時代になって、あるいはその先になるともっと発展するだろうと思うわけですが、必ずしも物事というの是一方向に発展していきません。

よく三内丸山遺跡と吉野ヶ里遺跡とを比較しますが、それほど無茶な対比ではない。可能な限り複雑なネットワーク、仕組みを作って、東北日本に適した縄文文化を発展させていった。そういうふうに見てもいいと思います。これは縄文人の末裔である、私たち東日本人のあるいは東北日本の人間が、誇りにしていい話だろうと思います。そういうネットワークが出来て、それを行う上で基盤になるのは定住生活です。定住生活のために、いかに設備投資をして設備を充実して生活を安定させたか言う点もこの頃かなりわかってきた。集落内外の造成や諸施設の建設、つまり大土木工事があったことが分かってきています。ひっそりと土地の造成もしないで、自然のままにそこにへばりついて生活していた縄文人観だったが、かなり違っていたようです。小林達雄先生は自然の人工化と呼んでいます、自然に人手を加えて自分たちが住みよくなる環境を作っていくと言うような仕掛けをしていたようです。例えば、中央広場となる平坦面の造成があります。先ほど伊勢堂岱遺跡の報告でも説明されていましたが、真ん中の高いところを削って、削った土を低い方に持って行って造成している。三内丸山でも認められるし、岩手県の宮古市の崎山貝塚でも見つかっています。ここでは、低丘陵の頭を平らにすぼんと飛ばすぐらい削って両脇に押し出して平坦面を作っています。平坦面を作ってグランド造成みたいにして、その真ん中にドーナツ状に堀を掘って、その中に広場が取り残されている。その両脇東西に石が立てられている。東村と西村を作る。そして真ん中に墓を作る。そういう宅地造成をしている村も分かってきている。環状列石が見つかっているところは、みんなどこも真ん中に広場を作っています。土を押し出して低い方に盛って平坦面を作り出して、その広場を中心に配石を作ると言うことが分かってきています。崎山貝塚では高い中央広場周辺に土を盛って平坦面を作り、溝で中央広場を区画している。環状列石の場合は、平坦地を造成して石を環状に並べて区画している。集落内を区画する堀・溝・柵、あるいは並べた石などのほか、杭なんかで遮蔽していると思わせるような物も出てきています。広場を巡る堀が北海道の千歳市と苫小牧市で見つかっています。400m位の長さで、長軸70mぐらいにぐるっと巡っている。伊勢堂岱遺跡でも山の中腹に段を作ってぐるっと巡らしている。そういう祭りの場を作り出す、あるいは、祭りの場所と日常の場所を区画するための溝、墓地を囲うための溝、柵とか、あるいは外部から家を遮蔽するための柵、板塀とかが見つかっています。これも今まで予想していなかったことです。縄文の村に堀や溝や柵があるとは考えていなかった。しかし、実は昔から断片的に報告はされてきました。図6は秋田市の上新城中学校遺跡の柵列です。真ん中に2重にまわっている細い溝を掘って、底に杭を立てて石で押さえ、そこに土を埋め戻して作った柵列の跡です。中央下あたりに四角く線を引いていますが、これは掘立小屋の跡です。この2軒の掘立小屋を柵で囲って、左下、左上、右上3箇所の墓地と区画している施設が見つかっています。こんな施設まで縄文の村にはありました。他に集落の諸施設として、大型の竪穴もあります。1棟が10mを超える大きな竪穴で、場合によっては30数mの大きさになる場合もあります。集会所とか、冬みんな集まって集合生活をするとか、作業小屋だとかいろいろな使われ方が推定されています。あるいは掘立柱の建物、盛土遺構、埋設土器もありました。そして、集落周辺にも諸施設、例えば木の実をさらしたり、飲料水を確保したり、木の半製品を寝かしている木組みや石組みの水場、踏分け道、木道、あるいは魚を囲い込むヤナ場、獣の落し穴、製塩の場所、祭祀の場所、粘土の採掘坑なども見

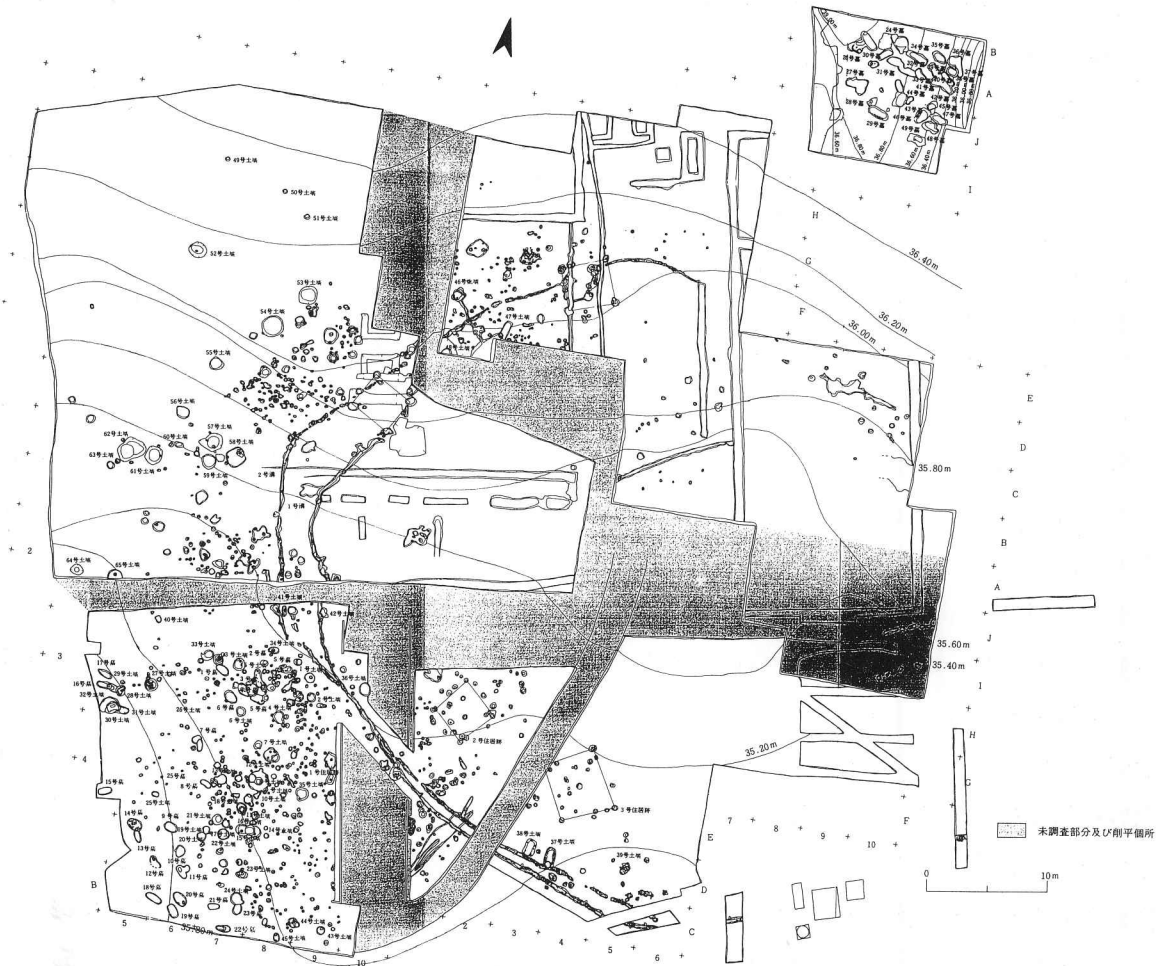


図6 秋田県上新城中学校遺跡の柵列

つかっています。粘土の採掘坑は秋田の家の後遺跡など全国で20箇所ほど見つかっています。そのうち、東京の多摩ニュータウンでは、500m離れた縄文中期の終わり頃の遺跡同士で、村から出てきた土器と粘土の採掘の穴の中から出てきた土器がくっついています。ある村の粘土取りの場所が500m先にあったということが分かっています。

ところで、どの位時間がたちましたか。私は、東京に行ってからは、時計をしないで自分の生命時計だけで動こうと、縄文人なりきろうと思って仕事をしています。文部省の中に一人ぐらい、縄文人がいてもいいかなと思っています。私は年中役所の中で革靴は履かないで、素足にサンダルで居ます。ただし、長官の部屋に入るときと、次長の部屋へ入るときはさすがに背広を着て、靴下をつけて革靴を履きます。それ以外は、裸足で時計を持ちません。少なくともそのぐらいは縄文人の気持ちを持ち続けていて、いつ現場に帰っても発掘は継続できるという気持ちだけはと思っています。

次に祭礼と祭祀についてお話しします。縄文時代人には定住生活をして1,000年も同じ場所にいる場合があります。もちろん、当時の平均寿命が30数歳ですから、1人の人が1,000年もそこに生き残った訳ではありません。いずれにせよ定住生活をする、毎日同じ顔とつき合わせてなくてはいけない。20人いたか30人いたか、大きな時は100人いた村もあったでしょうが、同じ人たちが毎日顔を合わせるとやっぱりいやになります。つまらないことで喧嘩をしたり、あるいは希少なものを余剰を誰か

が独り占めをしたりする。人と人とのつきあいの仕方が定住生活の中で凝縮されて、遊動生活をした旧石器時代では経験しなかったことを経験せざるをえなくなった。そのため、みんながいさかいを忘れて一体となるような仲間意識というかそういった意識を結集するための祭り、あるいは誰かが独占していたものをみんなが集まって消費する祭りが盛んに仕組まれる。火を焚いて石を並べて盛んに祭りをする、と言うのも当時の定住社会を維持する一つの仕掛けだったのです。

日本人は祭りをずっとやってきました。火の祭り、柱を立てるような祭りなんてものもあります。あるいは、青森に行くと「ねぶたっこ立てる」と言ったか、中心に何かを立ててみんなが等間隔に輪になって集まろうと言う、「誰か仮りに代表者に立てて」という意味の言葉があるようです。基本的に等距離外交をするような、中心の広場を囲んで車座になってみんなが取り組めるような、そういった集団原理の中で祭りを盛んにする。そんな祭りの仕掛けが見えてきた。その祭りのセンターであったのがやはり伊勢堂岱遺跡だとか、大湯の環状列石で、周辺の村々の寄り合いの場所だった、そんなことが分かってきています。縄文時代の前期の半ば、5,500年ぐらい前ですが、栃木県の宇都宮市に根古谷台と言う遺跡がありました。100年ぐらいしか祭りの場は維持出来ませんでした。真ん中に250人分位の墓穴があります。いくつかのまとまりがあって、ほぼそのまとまりごとに大型の建物が付属しています。1棟の長さ30m位ある建物が何回か建て替えられています。竪穴建物から、掘立柱建物に作り変えられています。5箇所位のところで常に同じような建物を建て替えながらそこで祭りをしている場所があります。先ほどの大湯や伊勢堂岱の報告で、6本柱の掘立柱建物の説明がありました。大湯も伊勢堂岱も同じように墓場を中心に仮設小屋のような物を頻繁に建て替えてそこで祭りをしていたようです。この根古谷台遺跡は斜面も全部掘ったんですが、ゴミ捨て場がありませんでした。生活のにおいがあまりしません。遺物もあまり出ていません。ただし、クリなどの木の実なんかの焼けたものはたくさん出ています。真ん中の墓地を中心にした周辺の村々の共同祭祀場だろうと思います。これはたぶん祭りの一つの原点で、縄文前期の関東あたりに集落共同体の祭り場ができた。東北北部や南部も含めてそういった祭り場は、縄文時代の後期になると非常に顕著になる。そんな社会的な仕組みが見えてくると思います。

縄文時代に階層が存在したかどうか、これも最近盛んに問題にされることです。みんな平等で、リーダーみたいなもの、身分の上下関係みたいなものはなかったんじゃないかとずっと言われてきました。しかし、どうも単純な上下関係じゃないとは思いますが、大きな土木工事などの時のリーダーがいて、設計図を書いてみんな働くようにと指揮をしなければいけない。リーダーは当然いるでしょう。祭りを司る人—おそらく女性—がいたでしょう。特に葬送儀礼などは、今の民俗例なんかを見ると、女の人が黒い布で顔を隠して死者の着物を着て出てきたりします。そういう祭りや葬式を司るリーダーがいたでしょう。手工業にしても、狩りだとか木の実を採るのだって、リーダーなしにはできないのですから、かなり職能的な階層、あとは男と女の差、同世代としての階層もあったと思います。いろいろな階層が錯綜して、常に上下関係に置かれるような階層じゃない階層社会が出来ていたのではないかと。これは墓から見ても説明できるようです。縄文時代の墓は基本的に一人一穴の平等な墓なんですけど、その中に、時と場合によって再編成される階層があったんじゃないかと思えます。と言うのは、墓の構造や何を持ってあの世へ行くか、つまりなにが副葬されているかなどを分析していくと、ある程度の階層が見えてくるような気がします。

最後にスライドをちょっと見ていただきます。大体お話したことのおさらいのようなスライドです。三内丸山遺跡です(図7)。野球場を作るために5ha発掘した。現在は大型の家、倉だと思われるものを復元し、そして展示館ができています。ここでは大規模な5haにも及ぶような発掘調査によって、遺跡の大きな広がりが見えるようになった。大規模な調査は止むおえずせざるを得ない状況なのですが、大規模調査によって、村及びその周辺の様子がよく見えてくるようになってきた。小川が流れていて、その斜面に向かってゴミが捨てられています。この裾の方は水漬りになっていまして、普通だったら腐ってしまうような木の実だとか、骨だとか、木で出来た道具あるいは人骨も出てきます(図8)。この谷の肩部に幅1mほどの遺物の出ないベルト地帯があります。その谷側の肩に2m間隔くらいでクリ材の杭が連続して打ち込まれています。遺跡の脇を流れる沖館川から谷伝いに上ってくる道で、道の路肩をクリの杭で補強している。谷底に向う湿った所からクルミの殻、漆を塗った木の器、木の道具、骨の道具が沢山出てきます(図9)。この水漬りの谷が普通は残らないような貴重な情報をたくさん我々に提供してくれた。このような調査の先駆けが、福井県の鳥浜貝塚だだと思います。

これは宮城県の里浜と言う貝塚です(図10)。毎年厚さ30cm位づつ掘っていましたが、アサリが沢山出てくる純貝層があります。春から夏に潮干狩りを盛んにして干し貝を作った後の貝殻を捨てた純貝層があったり、魚の骨が多い層があったり、炭化した木の実が沢山出てくる層があったりします。これらの土層を全部持ち帰って調べてみますと、季節ごとに非常に豊かな生活をしていることが分かる。季節的な切れ目が全然なく、この純貝層を1年目、2年目、3年目の春から夏と読んでいきますと、大体これで14年分位のゴミの堆積であることが推定できます。毎年捨てて、切れ目が



図7 整備された三内丸山遺跡



図8 北の谷の発掘状況



図9 谷に捨てられた壊れた道具や生ゴミなど



図10 里浜貝塚西畑地点の貝層堆積状況

ないんで定住生活をしていたということが分かりますし、季節ごとにどんな食生活をしていたかと言うことも分かります。この土を洗って見ますと、魚の骨が沢山入っていてその90%位が15~20cm位の鱒の骨です。

里浜貝塚から200m位浜辺に降りますと、波打ち際に塩を作った場所が出てきます。塩を作るには、土器の中に濃縮した海水を注ぎながら盛んに火を焚いて煮詰めます。その時の木を燃やした時にできた焼け土だとか、灰なんかが厚く堆積しています。塩づくりのために、専用の炉を作ってそこに専用の土器を置いていた作業場が見つかっています(図11・12)。塩作りと言った手工業的な生産が縄文時代の終わりにになると始まります。



図11 里浜貝塚西畑地点から見た海辺の製塩場

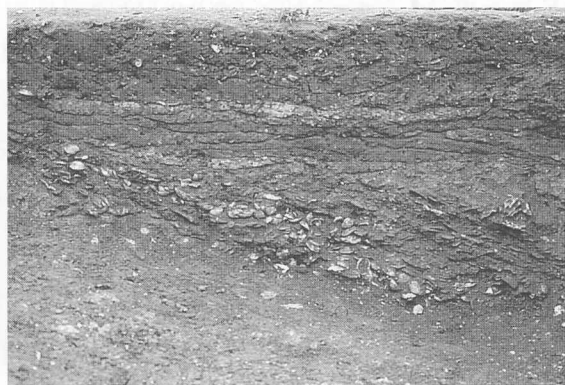


図12 製塩場の焼け土・灰、製塩土器片など

これは大分県の龍頭という遺跡です。村から少し離れた低いところに穴を沢山掘っています。穴の下は水漬りで、この中に南京袋みたいに編んだ袋に木の実を入れて短期に貯蔵する穴です(図13・14)。



図13 龍頭遺跡の低地に築かれた貯蔵穴群

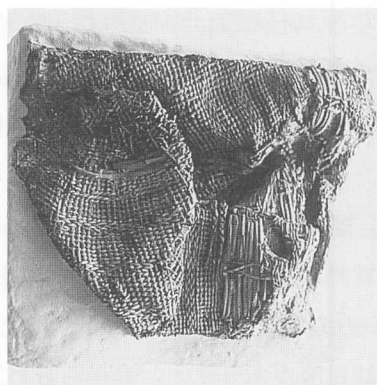


図14 貯蔵穴に納められていた木の実入り編み袋

東京都北区の中里貝塚です(図15)。厚さ4~5m位ずっと牡蠣と蛤の貝塚です。他の物はほとんど入ってこない、土器片すらほとんど入っていません。とにかく、牡蠣と蛤を多量に処理して捨てた貝塚です。こんな厚い貝層が砂浜の上に1kmもつながってあるらしいのです。これから1kmの広がりを少しずつ発掘して確認していく予定です。多量に捨てられた貝殻のすぐ脇の浜辺に、浅い皿状の坑を掘って、粘土を敷いた上に木の皮を敷いて、その中に焼けた石を投げ込んだ跡が見つかっています。波打ち際で、水が入ってくる所ですから、焼いた石を投げ込むと、石の余熱で水が瞬時に沸騰します。そして、あらかじめここに入れておいた牡蠣の口を開けさせると言うようなことをして貝を蒸す専用



図15 厚く堆積した中里貝塚の貝層

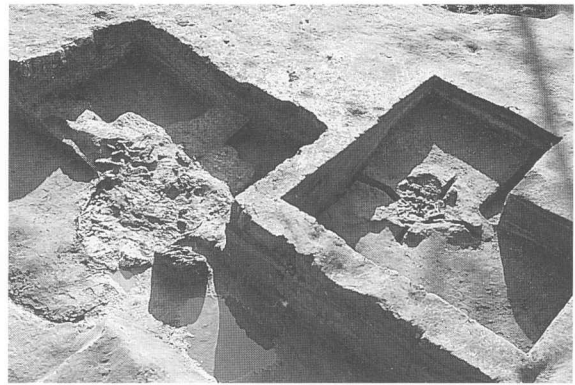


図16 浜辺に設置された貝蒸し施設

の施設だったようです(図16)。こういう場所はこの砂の堆積の中にいくつも出てきます。干し貝づくりの場所だったと言えそうです。

ところで貝層をずっと掘っていったら、下から杭が数本出てきて、杭に貝がまとわり付くようにひっついていました。人間が加工した杭だそうです。杭を作って、杭を海底に打ち込んで牡蠣が着装しやすいように、つまり牡蠣の養殖のような事をしていたんじゃないかと言われています。ほんとかかなと疑ってもみますが、ただ、牡蠣の殻を見ると、もともとくっついてた岩だったら岩、木だとかがプレスされているわけです。そういう状態は確かに木なんかにもまとわっている牡蠣が結構あったことを示します。酒詰仲男先生が牡蠣を養殖していたんじゃないかと言っていますけど、その考えが証明されて来ていると思います。

去年の11月13日ぐらいだったと思いますが、天皇皇后両陛下が北区の中里貝塚の発掘調査の現場を見に来られた(図17)。私にとって非常に大きな出来事でした。じゅうたんを敷いたり、周りに汚くないように砂利を敷いたり、一番最初に誰が挨拶するか、お迎えに並ぶ順番はとか、周りの汚い物をみんなしまおうとか、交通規制とか、その準備に2週間位かかったようでした。要するに国民の象徴である天皇が発掘現場に来てくれた、ま



図17 天皇皇后両陛下の行幸啓をえた中里貝塚

また去年は縄文まほろば博で東京の20万人の人たちが新宿の伊勢丹で行った縄文の展示を見てくれた。去年は幅広く国民が遺跡に縄文時代に親しんだ年だと、そういう意味では非常に画期的で記念すべき年だったと思います。来年もまた考古速報展(発掘された日本列島展)をやりまして、ここの貝層剥取と天皇皇后両陛下が見に来られた時の写真を展示します。

栃木の寺野東遺跡です。ここに環状盛土があって祭りをしていただろうという意見もある所です。そのすぐ脇の谷の中から水場の跡が非常に典型的に発見されました。3m×7mのクリの板材で枠を連続的に作って、そこに砂利を敷いてこの中で木の実をさらすというような事をしています(図18)。

次の写真は、周りに砂利を敷いて1m×1mの板材を組んで、そこに水をためている(図19)。これは飲み水の確保用でしょうか、こんな水利用の実態が分かってきています。こう言う水場が今のところ



図18 谷部の水場に設けられた木組み



図19 谷部の水場に設けられた木組み

全国で10箇所ぐらい見つかっています。歴史的にずっと追いかけていくと、北九州市の弥生遺跡や12・3世紀の擦文時代の北海道奥尻島で水場が見つかったり、江戸時代の水場が四国の方で見つかったりとか、このような水利用がずっと現代まで歴史的におさえられそうです。

次は埼玉県の西部の縄文時代中期の塚越向山遺跡です。石組みの炉の中に据えられた注口土器の中に黒曜石原石やチャートの石片が入っていた(図20)。さらにそれらを取り上げた下から10本の完形石斧が出てきた(図21)。たぶんこれらはこの土器の中に入れて運ばれてきた交易品だと思います。



図20 炉に置いた石斧と石器原材を入れた土器

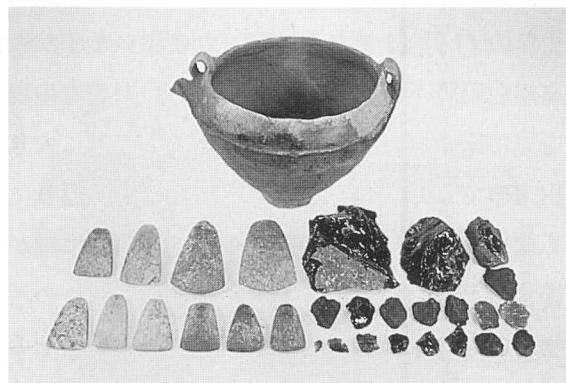


図21 土器と石斧、石器原材の黒曜石など



図22 炉脇に据えられたアスファルト塊

次は北海道南部の南茅部町の磨光B遺跡です。掘立柱建物の中央の炉の内に火を焚いた跡があって、底の土が焼けていました。炉の周りの4箇所に穴があげられていまして、そのうち2箇所に大きなアスファルトの塊が残っていました(図22)。中で火をたいてとけてきたアスファルトを、接着剤にしているような作業をしていた様子が良くわかりました。アスファルト利用の作業場だったようです。

次は同町の豊崎N遺跡です。そこから出てきた土器に入れて運んだアスファルトです(図23)。アスファルトは盛んに運搬されて交易品になっていました。



図23 土器に入れて運ばれたアスファルト

次は青森市の小牧野遺跡です(図24)。なだらかな斜面ですが、径30mを越える範囲を深いところで2m近く掘り下げて、こちらの側の斜面の低い方に盛って広場を作り出していました。その次に、斜面に長楕円形の石を立てかけるように等間隔に置き、それを囲むように両側に数段石を横に

積むように並べた小牧野型という石の組み方をしています。墓だと思われる石組みも含まれています(図25)。土地を造成するという意味では大変な土木工事をするわけです。小牧野のすぐ脇を流れている荒川という川に降りていって、川原の石を2,000個ほど山の上に運んで、さきほどの配石を作っている。土を動かす、石を動かす大土木工事をしていました。



図24 大土木工事で築かれた環状列石

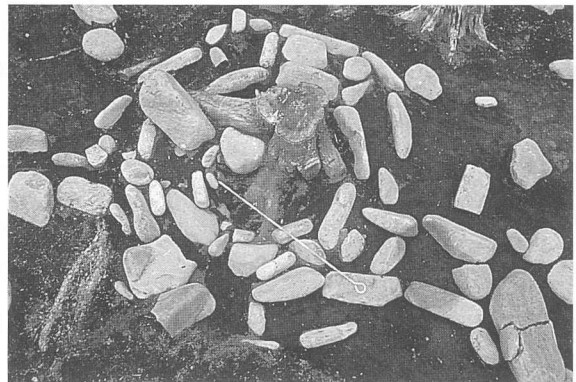


図25 環状列石に組み込まれた配石墓

次は群馬の矢瀬遺跡から出てきた絵を刻んだ石です(図26)。扁平な円礫に弓と矢をもつ人を描いています。縄文時代では非常に数少ない絵の一つです。縄文人は、狩りする姿とか魚を捕る様子だとか、あるいはシャーマンの姿などを、非常に数少ない例ですが、土器や石に描いています。これらが祭りの場所で使われたり、祈りの対象として使われたのだと思います。以上はしよった説明しか出来なくて恐縮です。

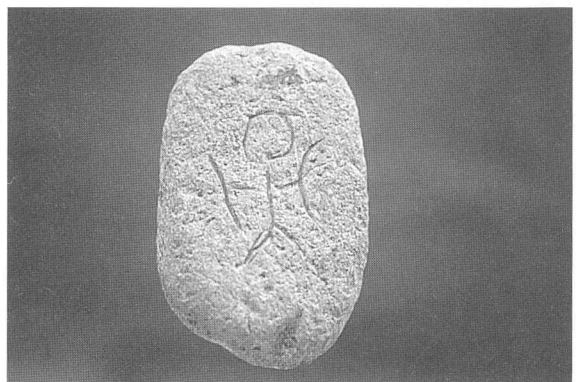


図26 弓をもった狩人が描かれた礫

今日どの辺の縄文時代観が新しく変わったかを説明しました。断片的な説明でトータルな説明は出来ませんでした。いかに工夫して定住生活を安定させていたかということを中心にお話してきました。定住しながら1年2年3年先、もっと10年くらい先の自分たちの生活を予想して、いろいろに生活を工夫しています。今回触れませんでした。例えば漆器を作るには、漆の林を管理して、夏場に

漆を搔いて、それを精製して真夏の天日の下でくろめにする。一方では、伐っておいた木を冬、里に降ろして、それを木の器にあらかた加工して、水にさらして寝かしておく。仕上げ加工をして、漆を塗っていく。非常に時間のかかる一連の行程を頭に入れているわけです。クリにしてもクルミにしても何年先になったらちゃんとたわわに実をならすだろうと、そう言う数年がかりの生活の仕組みを頭に描きながら、自然ときわめて調和した生活を送っているのです。自然を伐り開きするけれども、出来るだけ自然の再生を願って自然と調和的に生活していただろう。それもたぶんそれぞれの地域に合った、例えば横手盆地だったら横手盆地に合った生活を1万年もかけて縄文時代に工夫し、完成させていたはずです。そういう意味では自然を非常に大事にして、自然の恩恵を受けてきたわけですから、自然の恩恵に感謝しながら、ゴミも自分たちの祖先もまた自然に返し、また戻ってきて恵みを与えてほしいと言うお祭りも盛んにしていたようです。今アイヌ民族が行っているような再生の儀礼、あるいは火を焚きながら、空に道具類をまき散らして呪文を唱えて地上に降りてくる間に、天に上ってきてまた再生して私たちに恵みを与えてくれるように祈ると言うような、北アジアに広く広がっている儀礼と共通するような送りの儀礼を、縄文人はたぶん生活に組み込んでいたのでしょう。自然を余すことなく非常に調和的に暮らして、ひとたび採った自然の物、動物にしる鳥にしるろんな物に感謝をして、再生を願ってあの世に返してあげる。自然物を非常に大切にするとことん使い切ると言う気持ちが伺えます。昔は、私たちの身の回りには自然に出来た物が沢山ありました。ところが今、自分の家を考えてみても、自然物を利用した物はまずありません。石もないですね。骨で作った道具と言っても前は篋なんかありましたが、今は鼈甲だって高くてもとてでもないけど手が出ない。身の回りに自然物はほとんどありません。かつての日本人は自然物を大事にして、使い切ってから感謝の気持ちを込めてあの世へ返していた。和食だって基本的には大体ゆでて煮て食べるか、ごく一部生で食べる食べ方でしたが、これも縄文人が工夫して作った和食の原型でした。1万年の間に今の生活の基礎を縄文人は作っていて、それは日本の自然に非常に合っていた。どうも私の子供の頃の体験をさかのぼって行きますと縄文時代に行き着くことが多いような気がします。私は新潟の生まれです。付近の農家に行きますと家の台所まで小川の水を引っ張ってました。そこを水場にして米を研いだり茶碗を洗ったりしていました。自然と調和的な生活をしてた。それを今急激に忘れ去ろうとしている。一刻でも早く電車に乗って、電車も前の方に乗っていればあそこの駅は乗り換えで歩くのが短くてすむとか、そんなことばかり気にして時間に追われて生活している。ずっと縄文時代以来長いこと日本人の環境や生活に合わせて作り上げられてきた暮らしの原型が、今急激に亡くなろうとしています。ほとんど無批判に、亡くしているかどうかというのを考える暇もなく、亡くしているような気がします。あと100年先、200年先の考古学者や人類学者は、この今の時代はものすごく急激に変化した時代と特徴づけると思います。その前の時代の伝統を継承した最後を生きている私たちが、こういった選択で本当にいいのだろうか、そんなことも考えながら次の世代につなげていきたい。そういった意味で文化財の保護と活用が、住民の、広く国民の役に立てばいいなと思います。うまく伝えられませんでした。ご静聴ありがとうございました。

挿図出典

- 図1 新東晃一 「縄文時代のはじまり（南九州ルート）」 岡村道雄編『ここまでわかった日本の先史時代』
角川書店 1997(平成9年)
- 図2・3 岡田康博・NHK青森放送局編『縄文都市を掘る』日本放送出版協会 1997(平成9年)
- 図4・5 金山喜昭 「文化財としての黒曜石」『月刊 文化財』7月号 第一法規出版 1988(昭和63年)
- 図6 秋田市教育委員会 『秋田市上新城中学校遺跡』1992(平成4年)
- 図7・8・9 青森県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室提供
- 図10・11・12 筆者撮影
- 図13・14 大分県教育委員会提供
- 図15・16・17 東京都北区教育委員会提供
- 図18・19 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター提供
- 図20・21・22・23・26 文化庁編 『発掘された日本列島 '96 新発見考古速報』朝日新聞社 1996(平成8年)
- 図24・25 青森市教育委員会提供

(於：横手平鹿広域交流センター 平成9年3月9日)

世界と日本の文化財

田 中 琢*

こちらへ来まして、発掘調査をしているかたがたと話をしますと、三角縁神獣鏡の話をしてくれるのでしょうか、三内丸山遺跡はどうか、などといわれました。これはしまった、演題の選びかたをまちがったかな、と思いましたが、ご期待にそむいて、今日は、日本の文化財を世界的に見たらどのような特色があるのか、そのようなことを申し上げることになります。ご了承ください。

日本の文化財、文化財についての考えかたや保護の方法を世界的にみると、どういう特色があるのか。世界といっても、いろいろあります。近くはシベリアや朝鮮半島からはじまってヨーロッパやアメリカまで、そのあいだにもさまざまなものがあります。そう簡単に比較することはできませんが、一つの比較の基準として、ひとまず最近新聞にも盛んに登場する世界遺産をとりあげましょう。世界遺産といえば、鹿角の大湯環状列石を世界遺産にという大変熱心な動きが地元にあるようですね。この前も大分県の教育長さんがおみえになりまして、国東半島の磨崖仏や宇佐神宮が世界遺産にならないか、という相談を受けたこともございます。このように日本でも世界遺産のことが知られるようになりました。この世界遺産と対比するなかで、日本の文化財の特色が浮かびあがってくるのではないかと、思いますので、まず、世界遺産とはどういうものか、少しお話しします。

国際的な条約である世界遺産条約、「世界の文化遺産及び自然遺産に関する条約」は、人類全体にとって普遍的な価値をもつ自然遺産と文化遺産を世界遺産として登録し、それらを国際的協力によって保護することをめざしています。しかし、人類全体にとって普遍的価値をもつということは、どういうことでしょうかね。

世界遺産のことは最初にアメリカ合衆国がいいはじめたんです。1971年にニューヨークの国連で環境問題に関する会議がありました。そのころ文化庁におりました私は、外務省や環境庁の人たちといっしょにその会議に参加しました。その会議で、合衆国の代表が、世界的に文化遺産や自然遺産を保護することをやろうじゃないか、と発言しています。ニクソン政権のときです。

アメリカには国立公園制度があります。日本でいう史跡、たとえば鹿角の大湯環状列石ですね、あいうものを国立公園制度で保護しています。その制度が最初にできたのが、1872年のイエロー＝ストーン国立公園です。間欠泉が噴き出してくる情景がよく紹介されている、あのイエロー＝ストーンが国立公園の最初でした。それ以降、国立公園制度で、アメリカ合衆国では、文化遺産や自然遺産を保護の対象としてきたのです。この1872年に始まった国立公園制度の百周年を記念して、それを世界的に広めようという提案が世界遺産だったのです。翌1972年のユネスコの第17回の総会でこの条約が採択されました。そのユネスコ総会の議長は日本の代表だったんですが、その後20年間、1992年まで日本はこの条約を批准していなかった。

批准が遅れた理由を話すまえに、合衆国の国立公園制度について簡単にあげましょう。アメリカ

*奈良国立文化財研究所長

カの国立公園制度は、自然地域と歴史地域、そしてレクリエーション地域と大きく3つに分かれています。現在、歴史地域は180か所ほどあるでしょうか。いろいろなものがあります。カスター将軍がインディアンにやられた戦場がこの歴史地域になっています。最近発掘して、鉄砲の弾がどんな風に落ちているとか、調べていったら、伝承でいわれていることとちょっと違うなど、いろいろ分かってきています。歴史考古学の一部です。あるいは南北戦争のときの戦場なども歴史地域になっています。鉄のカーテンということばがありましたね。社会主義体制、共産主義体制が完全に崩壊して、鉄のカーテンなんか、今ではどこかへいってしまいました。この鉄のカーテンは第二次世界大戦直後の1946年に英国のチャーチルがミズリー州のウェスト=ミンスター大学で講演し、共産圏と西欧圏とのあいだに越すに越せない鉄のカーテンがある、と言ったところからはじまった冷戦時代を象徴することばでした。この講堂が歴史地域になっています。

私たちが歴史地域と聞けば、どうしても縄文時代の集落とか、新しくとも中近世の館跡とかを思い浮かべます。ところが、アメリカで歴史地域といえば、180か所ほどあるうちのほとんどがヨーロッパ植民以後のものです。インディアンの遺跡は15%ほどにすぎません。インディアンは歴史に入りにくいのです。

ワシントンには、中心部にザ=モールとよぶ大きな広場があります。そのあたりに博物館が沢山ある。そのなかに、スミソニアン機構のミュージアム=オブ=ナチュラルヒストリー、自然史博物館があります。この自然史博物館にいくと、昆虫であるとか、細胞であるとか、そういうものからはじまって、化石や恐竜など、さらにいろいろな動物や植物などがあって、一番最後にアメリカ=インディアンが展示されています。植民地以後の歴史は別のアメリカの歴史博物館になっています。原住民は自然の一部で、歴史のなかに入らないんです。バッファローの隣に展示されているんです。だから、ドンドン殺しても平気だったんです。今は少し変わってきています。正式な名称はミュージアム=オブ=ナチュラルヒストリーですが、一般向きにはミュージアム=オブ=ネイチャー=アンド=マンという呼びかたにしているところがあります。通称では自然と人類の博物館という呼びかたを採用しているのです。さすがに合衆国も変わってきたようです。また、別にインディアン博物館ができています。黒人の博物館もありますし、ユダヤ人のホロコーストの博物館も最近できています。アメリカにも多様な考えかたが出てきている、と感じています。

アメリカの国立公園制度では、先に述べたような土地に結びついた建造物や遺跡などの文化遺産、それとイエロー=ストーンのような自然遺産との大きく二本立てです。それを世界遺産として国連にもちこんできた。世界遺産はこの二本立てでスタートしました。

世界遺産では、何をやるのか。保護の仕事に従事する技術者を提供したり、専門家の養成を援助する。大きいのは、加盟した国が分担金を出しあって、それで世界遺産基金を作り、世界遺産に登録している文化遺産や自然遺産が破壊の危機に瀕したり、あるいは破壊されたら、その修理とか、保存のためのお金をその基金から出す、というシステムです。カンボジアのアンコールワット遺跡に対して世界遺産基金からもお金が出ています。ユーゴスラビアが分裂してセルビア人やスロバキア人、イスラム教徒の人たちのあいだで内戦があって、世界遺産に登録していたものが破壊されました。その修復のための経費を世界遺産から出す。そういうことです。あるいは資金の長期貸付もやります。そのためには、世界遺産のリストに登録しておかなければならない。登録しておいて、それが破壊の危

機に瀕したら、おたがいに助け合うための基金がありますよ、という考えかたです。

現在、加盟国は152か国です。文化遺産が418、自然遺産が114、後で申し上げる複合遺産が25で、現在552件登録されています。そのなかでは、カンタベリー大聖堂やノートルダム大寺院などの建造物が多いですね。遺跡ではストーンヘンジがあります。中国では、万里の長城、それに故宮も入っています。日本は、6年前の1992年、条約が成立してから20年後に加盟しています。なぜ20年間加盟しなかったのか。世界遺産は、まず各国が自国の責任で保存するのが前提です。それが自国で不可能になったとき、世界遺産に登録しておれば、国際的に協力しようというのです。日本では、法隆寺が壊れたからといって、アメリカに援助してくれとは言わないでしょう。阪神大震災とかがあって、五重塔がひっくり返っても、自前で直します。国際的に援助してもらわない。だから、ずっと加盟しなかったんです。大蔵省は渋いですから、なかなかそういうところにお金を出すのには賛成しません。日本の加盟は非常に遅れました。

では、20年目になぜ世界遺産条約に加盟したのか。これは自然遺産が関わっています。青森と秋田にまたがる白神山地の問題が大きかったのです。自然保護を推進しているかたがたが、白神山地を世界遺産に登録して保護をはかろうとし、力を結集して運動されました。それで加盟した、と言ってもよいほどです。文化遺産関係ではあまり積極的ではありませんでした。ともかく、私が文化庁で鑑査官をやっていた今から6年前の1992年に加盟したのです。

自然遺産は事前の準備がなくとも、これはというものがあれば、ドンドン申請して、認められれば登録できます。一方、文化遺産は、暫定リストを作成し、ユネスコに出しておかねばならないのです。それで諸先生がたに集まっていたいて、会議を開き、文化遺産10件の暫定リストを作りました。現在それを順番に登録しているところです。最初に法隆寺と姫路城を登録しました。その際、まず出すものは、人類全体にとって普遍的価値をもつ、と国際的に認められているものでなければならない。われわれが国内で重要と思っても国際的に知られていないものでは弱い。説明しなくてもいいようなものから始めよう、と考えました。そこで、奈良国立文化財研究所の友人に電話し、世界の百科事典の日本の項目にどう文化財が記載されているか、調べてもらいました。意外にも姫路城の写真がのっています。法隆寺もでてます。法隆寺は現存する世界最古の木造建築物ですから、説明の必要ないでしょう。それでも問題が出ましたが。

1994年に「古都京都の文化財」に登録しました。10数か所の神社やお寺をあわせて登録しました。このときもいろいろありました。世界遺産では、京都市から宇治市、滋賀県大津市の比叡山延暦寺まで市街地に点々とあるものを一括して登録する方式は、それまでありませんでした。かなり抵抗はありましたが、まあ何とか説明しました。余談ですが、このとき、古都京都の文化財に比叡山延暦寺や宇治市の平等院などをいれました。ところが、比叡山延暦寺について滋賀県議会で問題になりました。滋賀県と大津市が補助し、一所懸命に保護してきたではないか、京都の文化財に入れるとはもってのほかだ、近江の文化財として別に登録せよ、と言うのです。事前に説明に行きまして、大津市長さんも滋賀県の教育長さんも、いいですよ、と了解してくれていたのですが、揉めました。しかし、延暦寺は京都平安京の鬼門にあった寺だから栄えたのです。最澄さんは大変な政治家です。比叡山の盛衰というのは平安京とつながっています。平安京がなければ、つまり古都京都がなければ、延暦寺はどうだったか、分からない。しかし、滋賀県の県議会の議員さんたちはそういうわけにいきません。郷

土愛に燃えていますから。俺のところのものをなぜ古都京都のなかに入れるのか。ということで、揉めて困りました。「古都京都の文化財」の下にカッコ書きで京都市・大津市・宇治市と付け加えて、それで納めました。郷土愛で困りましたが、しかし、県民税や市民税を使ってるのではないか、と言う気持ちも分からないわけでもありませんが。

1995年には、白川郷と五箇山の伝統的な合掌づくりの家屋が残る集落を3か所登録しました。白川は岐阜県、他の2か所は富山県です。これらを一括して登録することは、国内的には問題がありませんが、ユネスコ側に問題がありました。なぜ合掌づくりの集落が3か所いるのか。同じものが3か所もいない、1か所でよい、と言うのです。白川郷1か所でいいじゃないか。これも世界遺産の考えかたです。しかし、庄川の流域には、蚕を飼うための特徴的な構造をもち、大家族が住んでいた家屋からなる集落がありました。そのような家屋は、明治のころには庄川流域に千や二千はありました。それが次第になくなり、まとまって残っているのが3か所ほどになっています。これだけ広くあったもののなかで今はこれだけだ、とかなりの時間をかけて説得し、ようやく認めてくれました。世界遺産では、似たものがあれば、1つでいい、というのです。

一方、日本では問題がなかったかと言いましたが、必ずしもそうでもなかった。文化庁で暫定リストを作るときの先生がたの議論で、法隆寺や姫路城などは異論がありませんでしたが、白川五箇山はどうでしょうか、と申し上げたら、あのようなものがどうして世界遺産になるのか、と言うんです。しかし、皆さん考えてください。現在、世界では、日本はソニーやパナソニックでしょう。あるいは、トヨタの車が世界中に走っている時代に、ああいう大家族で養蚕していた集落が3か所残っている。今はそのように使われていないけれども、村中が集まって屋根を葺き替える結の制度も残っています。現代日本を外から見たら、パナソニックやトヨタの時代ですが、そこにこのような集落とシステムが残っている。これこそが世界遺産なんだ、と先生がたに説明しました。

1996年に広島原爆ドームが登録されました。最初に作成した暫定リストにはありませんでしたが、原爆ドームを世界遺産にしろ、という運動があり、日本が申請して世界遺産への登録が認められました。しかし、このときアメリカと中国は賛成しませんでした。文化遺産には、歴史の明るい面を顕わすものばかりではないのです。法隆寺は世界最古の木造建造物ですし、姫路城は美しい。世界遺産になって、なるほどと思います。しかし、原爆ドームは、歴史のマイナスの面の遺産です。原爆は世界や人類の発展にとってプラスですかね。マイナスの遺産でしょう。そういうものをどう扱うか。実は、ナチス=ドイツがユダヤ人を大量に殺したポーランドにあるアウシュビッツ収容所が世界遺産なんです。それについて、いろんな議論があります。百年、二百年、三百年のち、おまえたちドイツ人の祖先がユダヤ人を殺した場所だ、と言われ続けば、どうでしょう。人類愛の精神、人類おたがい殺しあわないようにしましょう、というのは、きれいごとではないか。ユダヤ人から、二百年前あそこでドイツ人が多くの人を殺した、とドイツ人の子孫が言われたら、どうでしょう。そういうものを世界遺産にしているのか、と言う議論があるのです。

原爆ドームもそうなんです。日本人だけではなく世界全体にとって、原爆はあるべきではない、という考えを象徴している遺跡です。だから、記念碑として保存し、人類全体の反省の材料とすべきだ、と考えます。ところが、合衆国ではそうじゃありません。スミソニアン機構の航空博物館が第2次世界大戦の歴史展示で広島に原爆を落とした爆撃機の展示方法について猛烈な反対がありました。原爆

投下によって戦争は終わったから、何十万人ものアメリカの将兵も日本人も助かったのだ。原爆は戦争を終わらせるために不可欠だった。だから原爆を悪のように扱うのは、もってのほかである、と言うのです。このように原爆について考えかたがまったく違う人たちがいます。中国もそうです。中国が南京大虐殺の遺跡、千人坑、万人坑を世界遺産に、と言われたら、どうでしょう。わたくしたちの親や兄の世代がいろんなことをやったんだな、といろいろ考えさせられます。しかし、百年後、二百年後、日本人が中国人を虐殺して埋めたところだ、と言われつけ得るのです。原爆ドームもそういう風に受けとられる面があるのです。日本人は、原爆について比較的冷静に人類全体にとってどうだ、という考えかたでいますが、世界的には決してそれだけじゃない。世界遺産の備えるべき普遍的価値とはどういうものか。ここでも問題があります。

ともあれ、こうして日本の文化財保護が世界遺産という形で世界の舞台に登場しました。それによって、逆に世界遺産という鏡に日本の文化財を映してみたら、どう見えるか、という視点ができました。これまた、非常に面白い、と思っております。

日本の国家による文化財保護は、明治の近代国家日本の成立とともに始まっています。明治4年に太政官政府が古器旧物保存方について布告しています。古い物は大切にしなければいけないという布告です。この中心になった人物は薩摩出身の町田久成です。この人はとても面白い人で、たしか曾祖父が薩摩本家の筆頭家老をやっているような薩摩の支藩の藩主の家柄で、幕末には、薩摩藩の洋学の学校である開成所の学頭、つまり校長先生になる。あるいは、薩摩藩が幕末に留学生を出したときの引率者となっています。余談ですが、幕末にパリで万国博をやったとき、徳川幕府と薩摩藩とで別々に出陣しました。薩摩藩はフランスに対して独立国として行動したんです。大河ドラマで「獅子の時代」というのがありましたね。大河ドラマとしてはあまり当たらなかったという話ですが、わたくしにはとても面白かった。あれにパリ万博が出てきました。そのころ幕府からも留学生を出しているし、薩摩藩も留学生を出しています。のちに関西財界で活躍する五代友厚もその留学生にはいました。

町田久成は、若いときに江戸の湯島聖堂で儒学を学び、国学の平田篤胤の門下に入り、ヨーロッパも見ています。そういう人が、明治維新政府では、まず外務大丞になります。今の外務次官といってよいかも知れません。その人が、古いものがドンドン海外に流出しているから、今でいう博物館を造り、防止しなければ、と言いだしました。廃仏毀釈の時代です。維新政府の思想的なよりどころは国学ですから、仏教をおさえる。お寺もドンドン壊します。薩摩でしたか、お寺がほとんどなくなった、と聞いております。奈良でも、お経が古道具屋に山のように積まれていたとか、仏さんが売りに出されたとかいう話が残っています。そういう古いものは、昔のことを考えるうえで、非常に大事であり、残していかなければならない、そのための施設を作れ、と町田がいた外務省がまず言い始めたのです。

町田は、外務省から文部省から農商務省へと博物館を造る仕事を追って移動しています。農商務省は、今でいう農林省と通産省でしょうか、そこに移っているのです。なぜか。当時、海外へいろんな物品を輸出しなければいけない。まず、絹織物や漆製品など、伝統的な製品の輸出を考えます。そのためにインダストリアル=デザインをやる必要がありました。それで、博物館で古いものを調べ、研究し、それで新しい製品のデザインを考える手がかりにしようとしたのです。こうして博物館関係の部局が農商務省にいくのです。いま博物館は、蔵の中にあって捨てるのがもったいないような古いものを入

れるところといった受け止めかたがあります。実際、今、資料館に行ったら、いろいろ農具とか、生活用具とか、みなが使っていたものが並んでいます。ほこりをかぶって、ドンドン壊れているところもあります。博物館行きということばは、使いものにならない人という意味ですね。それからすると、明治のころは違った考えかたがあったのです。

町田久成は、博物館を造る仕事を追って役所を移っていきます。役職も次第に下がっていったようです。下がっても、仕事を追いかけていきます。官僚の生きかたとしては非常に面白い。偉いものです。明治の人は。われわれとはちょっと違ったのですか。町田は国立の博物館を一所懸命作ろうとするんです。そのころ内務省ができました。大久保利通が内務大臣です。それで、博物館の話は大久保利通のところにもっていくんです。考えてみて下さい。片方は薩摩藩の家老の家柄です。大久保利通は何ですか。下級武士もよいところでしょう。仕事のために、そういう過去の身分にはこだわられません。西南戦争のちょっと前のころです。内務省を発足させて、良かれ悪しかれ、近代統一国家を造りあげようと一所懸命走り回っているときに、大久保は上野公園に博物館を造る土地を見にいっています。上野の公園には、兵学校を作りたいとか、図書館を作りたいとか、いろいろ議論がありまして、博物館が造れるかどうか、瀬戸際だったんです。そのなかで、博物館を造りました。博物館を造ってしばらくしたら、町田久成はお坊さんになりました。書画骨董のコレクションがありましたが、全部博物館に寄付して坊主になりました。その心境に到ったのはなぜだったか。女性問題とか、いろいろな説がありますが、わかりません。いずれにしてもそういう生きかたをした。私も研究者を装っていますが、国家公務員として給料をもらっていますから、役人です。われわれの大先輩にそういう生きかたをした人がいたことが忘れられません。

明治のはじめ、そういった人たちが中心になって日本の文化財保護が始まりました。その後どのようになったか。古社寺保存法が明治30年にできています。明治4年ごろから動きがありながら、明治30年までかかっています。そのあいだに西南戦争とかいろいろあって、大変な時代でありました。神社とお寺やその宝物類の保存のために国が力を注ごうという法律です。建造物と美術工芸品の保護です。それに対して、大正8年に史蹟名勝天然記念物保存法ができます。払田柵や秋田城、平田篤胤の墓とかの史跡、特別史跡には大湯環状列石、名勝の十和田湖、奥入瀬溪流これは特別名勝です。特別天然記念物に玉川温泉の北投石などがある。要するに土地に結びついた文化財が史蹟名勝天然記念物です。ただし、大サンショウウオなどは土地に結びつかない天然記念物です。これが大正8年にできます。日清戦争が明治27、8年です。日露戦争が明治36年から37年です。日本は近代化が加速します。例えば、鉄道の敷設距離数をグラフであらわしたら、そのころからぐっと急上昇します。どこもドンドン開発してドンドン壊したものですから、これではだめだ、なんとか保存しなければ、ということになりました。保護行政は、壊れてから、何とかしなければということなのです。1つ2つ壊してから、必ず残せということになる。それで3つ目は残る。そんな感じがします。日清・日露の戦争後、日本は資本主義国家に突入します。土地開発がものすごく行われます。それで史蹟名勝天然記念物保存法が制定されたのです。

ところで、今は慣れていますが、天然記念物なんて変なことばですね。そのころ史跡保存の動きの中心にいた一人に日本史の専門家の黒板勝美先生がおいでになりました。東大の国史学教室の主宰者です。あの人は英国に留学しましたが、日本史の専門家ですから、日本語らしいことばの史跡を採用

しました。古蹟ということばもそのころありましたが。天然記念物を一所懸命やられたのは、三好学という東大の確か植物学の先生でした。このかたはドイツに留学します。ドイツにはナトゥール=デンクマールとクルトゥール=デンクマールの分類があります。文化記念物と自然記念物です。それを輸入したんです。黒板先生がドイツに留学していたら、あるいは、あわせて記念物保存法になったかもしれない。

古社寺保存法は昭和4年に国宝保存法に変わります。社寺だけではなく、民間にある美術工芸品・建造物を保存するのをねらったのです。

戦後の法隆寺の金堂の焼失事件を契機にして、昭和25年に史蹟名勝天然記念物保存法と国宝保存法を合体して文化財保護法ができました。文化財保護法では、秋田銀行本館のような建造物は重要文化財です。一方では仏像なども重要文化財です。ところが、福沢諭吉の育った家が大分のどこかにありますが、あれは史跡です。山口県の萩市に行ってください。明治の元勳などに関する建造物は史跡です。なぜあれが重要文化財ではないのか。国宝保存法でとりあげる建造物は様式的に優れているものです。史蹟名勝天然記念物保存法では、歴史的な由緒のあるものをとりあげました。吉田松陰が弟子を教育した松下村塾は歴史的に意義があるから史跡になるのです。しかし、建造物であることは同じです。文化財保護法になっても、そのあたりを整理せずに2つの法律をあわせた。だから、建造物でありながら、片一方は国宝や重要文化財になり、片一方は特別史跡あるいは史跡になる。私は悪口を言うんですが、日本で法律改正というと、今ある法律に付け加えることがあっても、壊すことがない。付け加えますから、ぐんぐん仕事が増えます。役人も増え、税金も高くなる。日本はそういうシステムになっています。わたくしは法律改正とは言いません。法律改定と言います。改正は正しく改めるですが、改めていますでしょうか。付け加えるから、仕事が増えます。役人も増やさないといけなくなる。規制緩和というのなら、法律をバラバラにすることです。文化財保護法もそうです。一度ばらして組みなおせ、と言っているのですが。

日本の文化財を世界遺産の鏡で照らしてみると、世界遺産が美術工芸品を全然取りあげない点が大きな特色になります。雪舟の絵は世界遺産では取りあげようがありません。レオナルド=ダ=ヴィンチの絵で壁画になっているものは、建造物の一部として世界遺産の保護の対象になりますが、一枚になっている額縁に入っている絵は、対象じゃない。フランスやイタリアで美術工芸品の海外流失を防止するために保護の対象にしていますが、文化財として美術工芸品を保護の対象にしているところは世界的にほとんどない。日本では明治のはじめに排仏毀釈で美術工芸品が海外へ流出する。それを国家が防止、保護しなければいけない、となって、古社寺保存法ができたのです。

天然記念物を文化財に加えている国もほとんどありません。これも大正8年の史蹟名勝天然記念物保存法でそうになっていたからそのまま文化財になりました。文化財といったら文化の財でしょう。人間の作ったものが文化財と考えて当然でしょう。しかし、戦後見つかったイリオモテヤマネコ、あれは文化でしょうか。どーんと爆発して昭和新山ができた。あれは文化ですか。イリオモテヤマネコという新しい種が見つかった。種について、あるいは生物学の分類のもつ意味についていろいろ議論があります。そういう点では文化的な意味もあるんですが、イリオモテヤマネコそのものが文化の一部とは思えません。環境庁ができたとき、天然記念物は、文化財からはずして、環境行政の一環として環境庁でやろう、という話がありました。ところが、ときの文化庁長官が、役人たるものが自分

の職分を他に引き渡すとはもってのほかと言って、天然記念物は残りました。ばかばかしいような話でしょう。役人はそういうところがあります。だから、さっき言ったように、付け加えることはあるけれど、自分のほうの身を切るということはまずありません。いま橋本首相が行政改革とか言っていますが、どうなりますか。

日本の文化財保護の一つの大きな特色は無形文化財や民俗文化財があることです。文化財保護法ができたときに無形文化財が設けられ、のちに民俗文化財が作られます。民俗文化財にも有形と無形とがあります。秋田の男鹿のなまはげは無形民俗文化財ですね。有形のほうには男鹿の丸木船があります。無形文化財では、たとえば人間国宝が無形文化財です。社会のなかで現在生きている人、あるいは生きている行事、そういうものを文化財として保護の対象としています。これは世界中どこにもありません。

むかしフィリピンの博物館長が来られたときのことで、日本の文化財保護がフィリピンにとって参考になる、とのことでした。フィリピンの歴史はスペインの植民地以後は文献史料でわかる。古いほうは考古学でわかる。ところが、その間が抜けてしまう。日本でいえば古代や中世が抜ける。このあたりが、日本でいう民俗文化財あるいは無形文化財などで埋め得るのでないか。こんな話でした。開発途上国が新しく文化財保護関係の法律を作るとき、先進国のいくつかの法律をユネスコが雛形として渡すなかに日本の文化財保護法がありました。それは無形や民俗の文化財に着目していたからです。

しかし、無形文化財や民俗文化財にも問題があります。建造物を国宝や重要文化財として保護する。これは、極端に言えば、がちがちに保護すればいいんです。誰も触るな、落書きするな、子供は入るな。それでも保護です。しかし、人間国宝をがちがちに保護できますか。あるいは、男鹿のなまはげは、いつから始まっているのか存じませんが、幕末や明治、変わっているでしょうね。いずれにしても、生きている人間がやると、変わることもある。お寺や神社などのいろんな行事が民俗文化財に指定されているとします。太鼓叩いたり、笛を吹いたりします。この行事を観光資源にしようということで、補助金を出すから、もっと盛大にやして下さい、と観光課がいう。今までトントンとしか叩かなかった太鼓を大きくドンドンと叩くようになる。それが20年、30年続いたら、どうでしょう。歌舞伎の役者には、昔の所作のままではなく、創意工夫する猿之助のような人もいます。歌舞伎は時代の先進的な最新のパフォーマンスであった、というのです。となると、文化財としての歌舞伎とは、一体なんだということになります。

文化財には寺院や神社の建造物があります。お寺が本来の宗教活動をきちんとやっている場合、お堂を改造しなければならないとか、新築しなければならないこともある。重要文化財の建造物だったら、それがむづかしい。困りました。現代社会に組みこまれているもの、生きている人間が直接関係している文化財、その保護や保存は問題が少なくない。それを受け継いで発展させるのか。発展させず、継承するだけなのか。

日本の文化財の大きな特色の一つに名勝があります。秋田県では、奥入瀬溪流が名勝ですね。富士山は名勝です。天橋立も名勝です。ただ単なる山や自然ではありません。人間がそれを育てていくと言うか、観念的に育てている。文化的なものです。人間と自然の間になるものです。日本には史蹟名勝天然記念物保存法以前から名勝の概念がありました。世界的には非常に珍しい。ただし、最近で

は、世界遺産も変わってきています。ニュージーランドで自然遺産に登録していた山がありました。ところが、ニュージーランドの原住民のマオリ族が、あれは自然の山ではない、われわれが先祖代々崇拜してきた山であり、自然遺産とは何ごとか、というようなことがあって、そこで自然遺産と文化遺産の両方にまたがって登録する複合遺産ができたのです。この点では、ようやく世界が日本に追いついてきたのです。日本の文化財保護もまんざら悪いところだけではなく、良いところも少なくない。

最近では、世界文化遺産に歴史的景観という概念をもちこんでいます。富士山を世界遺産に登録するとなると、おそらく歴史的景観として文化遺産になるでしょう。日本では早くから名勝だったので。中国に「竹林の七賢」があります。自然のなかで悠々と生きる。羨ましいですね。ここでは自然と文化は対立概念ではない。東洋はそれを認めるのです。自然と人間活動は渾然一体となっている。自然は克服すべき対象である、というかつて欧米に強かった考えは、自然のなかに生きる人間とする考えかたとは対立します。自然と人間、自然と文化をつなげるとする考えは、日本的というよりアジア的といえるかもしれません。おそらくもっと広くあるんでしょう。世界的にみれば、対立的にとらえる欧米のほうが特異なのかもしれません。

世界遺産との関係では、保護の手法でもいろいろ議論がありました。建造物を世界遺産に登録するには、デザイン・材料・技術・周辺環境が本来備わっていた状況にあることが条件になっています。日本の法隆寺や姫路城を登録しようとしたとき、欧米から反対の声が聞こえてきました。伊勢神宮は20年ごとの式年遷宮で全部新しく造りかえます。そこから日本の古い建物は20年ごとに全部建てかえるのだ、材料も全部新しくなる、材料が本来のものではないから、世界遺産には登録できない、というのでした。そこでうさがたを日本へ呼んで、法隆寺で6割まで当初材が残っていること、修理したときははずした材は倉庫に残していること、また、柱の根元が腐っている部分を切り取り、新しい材で根継ぎするような修理方法をとっていること、修理の報告書がきちんと出版されていることなど、実際に見聞してもらって、ようやく納得してもらいました。

ただし、歴史的建造物の修理について、日本でも考えなければならないことがあります。例えば唐招提寺金堂ですが、構造的に弱点があり、柱が上の方でずんずん内側へ傾いています。一度ばらしてどう補強するかを考えなければいけません。金堂は、奈良時代の建物ですが、鎌倉時代や江戸時代に修理しています。みなさん江戸時代のお寺を思い出してください。屋根の勾配が急でしょう。水はけが良いから勾配が急になっているのです。それだけでなく、立派に見えます。奈良時代とは大きく変わっているんです。唐招提寺の金堂でも、調査の結果、最初の屋根の勾配がわかっています。今度ばらして修理、補強するとすると、これまでのやり方では、もとの勾配の屋根に戻すことになります。当初の形がもっとも美しく、それ以後の改造は改悪である。もとの戻さなければいけない。そういう考えかたがあったのでした。それに対して、欧米の歴史的建造物の修理に対する考えかたはまったく違って、現状を保持することを原則としています。世界遺産でもそのような考えかたに立っています。奈良時代の建物を鎌倉時代に改築する。あるいは、ある宗教行事をやるときに内陣を少し改造する。そのお寺のお堂の歴史です。何を残すのか。当初の建造物の姿を残すのか。その建造物の歴史を残すのか、歴史を残す立場なら、後の改造や改築の部分はそのまま残すことになります。本来のお堂に戻すのか。歴史の結果として現状のまま残すのか。

日本の建築史の専門家のあいだにもこの2つの考えかたがあります。日本の建造物では、雨漏りし

たりして屋根は痛みやすい。しょっちゅう葺きかえたり、改造したりしています。しかし、柱や大きな桁や梁といった軸部には、屋根から比べると破損率が低く、割合古い状況が残っています。解体修理しますと、軸部は本来の状況がわかりやすい。ところが、屋根はよくわからない場合が少なくない。そこで、軸部だけ当初の姿に戻して、屋根は改築した新しいものを載せるということも稀にはありました。そうしたことが許されるのか。そういう反省もできています。建造物の保存と修復に関する重要な問題でしょう。

世界遺産の考えかたで、もう一つ問題になることがあります。今、三内丸山遺跡でいろいろな建物や構築物を地上に再現、復原しています。私どもの文化財研究所が管理している奈良の平城宮跡で朱雀門を再現しました。36億円かかりました。あのような再現、復原について、世界遺産はすごく厳しいのです。確実な根拠のあるものならよろしい。図面があり、写真があって、どうであったか分かるものならいい。発掘して建築部材が見つかり、そのもので再現できるのなら、よろしい。そのような考えかたなのです。しかし、朱雀門は、あまり大きい声ではいえませんが、本当に二階建て風の重層だったのか、分かりません。だって、柱の数と間隔は分かる。それから、基壇の大きさが分かって、屋根がどれほど出ていたんだろうか、と議論することができる。しかし、屋根全体が入母屋風なのか、寄棟だったのか。柱の数と間隔だけでは、分かりません。重層かどうかも分かりません。ただ平城宮と言ったら都の中核部でしょう。その正門だから、立派だったろう。立派だったら、重層だろう、ということなのです。こんな考えかたは、世界遺産にすれば、もってのほかです。三内丸山でいろいろ造っていますが、専門家でなくても、いろいろ問題があるように思えます。世界遺産であれば、あのような復原はとうてい認められません。

わたくしは、地上の再現や復原がまったくだめだ、とは考えていません。払田柵跡や秋田でも復原されているでしょう。今日ここへお見えのかたは、文化財に関心をおもちで、史跡を訪れたら、ここには昔は鳥居があり、ここには建物があつたとか、昔の姿が頭のなかに浮かび上がってくるでしょう。楽しいです。それが史跡、遺跡、歴史の楽しさのひとつです。しかし、社員旅行でどこかの温泉に行く。少しは勉強しようや、ということで、バスのなかでビール飲みながら、秋田城に寄った、とします。そういう人たちにとっては、門が一つ復原されているだけで、イメージの膨らみかたが違うのです。なにもない野原のままだと、イメージを掴まえる手がかりが全くない。門がこうだったら、城というから、真ん中に天守閣があつたのだろうか。いろいろ説明を聞くと、天守閣でなく、政庁という。政庁とはなにをやるところなのか。説明がほしいな。こんな風にイメージが膨らんでいきます。復原や再現はその手がかりになるのです。

若いころのわたくしの経験ですが、日曜日でしたが、平城宮跡の現場事務所で土器を洗っていました。和服姿の妙齡の美人が見学に来ました。いろいろ聞かれて、独身だったわたくしは丁寧に答えました。ところが、最後になって、鎌倉時代と平安時代はどちらが先ですか、と聞かれてました。皆さん笑われます。義務教育で習っていることでしょう。しかし、社会に出て10年、20年経ったらどうですか。今は歴史について情報があふれていますので、そのようなことはほとんどないでしょう。しかし、そういった一般のかたがたがおいでになって、秋田城は天守閣のない城だ、ということが分かったら、それならどういうものであつたのか、という風にイメージを膨らませる手がかりになるもの、それがいるんです。その場合、復原といっても、どこまでどういうふうに復原するか、という問題が

あります。あんまり造りすぎると、イメージが固定されてしまいます。中国西安の華清池跡は、楊貴妃が入ったという風呂のある庭園遺跡ですが、発掘中にみたとき、おもしろい遺跡だ、と思っていました。ところが、最近訪れたところ、建物がことごとくといってよいほど復原されていました。明朝くらいの建物の感じですが、あそこまで復元されてしまったら、ぞっとしましたね。イメージを膨らませる余地がほとんどなく、イメージに完全に枠が嵌められます。

ところが、イメージを膨らませる手がかりを造ることすら、世界遺産はだめだと言います。オーストラリアから来た専門家と激論したことがあります。その人は、確実な根拠がなく、想定のある復原はだめだ、言うんです。古代ギリシアやローマの遺跡なら、それでいいでしょう。大理石の部材が一杯転がっています。発掘すれば、多量に出土するでしょう。その大理石の柱を2、3本起こしたら、たちまちイメージを膨らませる手がかりができますね。こんな立派な柱だと、建物は、といったふうにイメージが膨らんでいきます。だから復原はだめというのは、古代ギリシアやローマの遺跡の考えかたじゃないか。日本の遺跡はほとんどは田圃と畑だけです。平城宮跡には私鉄が通っています。この電車に乗っていたら、土地が余っていてもったいない、家でも建てたら、という会話を聞いたことがあります。そういう考えかたがでできます。昭和30年代の終わりごろから40年代はじめにかけて全部公有地化しました。一坪当たり3千円から6千円ほど払っています。この金は税金です。タックス=ペイヤがどう受け止めるか、その期待に込んでいるか、それがまず大事なのではないか、専門家の言うことだけじゃだめだ、と激論したことがあります。

逆に言うと、日本の場合、町長さんや村長さんが村の観光資源として村おこしの起爆剤になるように復原しようとする場合があります。天守閣のない城に天守閣を造ろうとする。入母屋でもない建物を入母屋に造るとか、壁のない建物に平気で壁をつけるということもあるでしょう。竪穴住居は、いろいろ見ていくと、草葺きの上に土をかぶせているものが少なくない。土饅頭みたいになります。草葺きでもっともらしく造っているのが普通ですが、実際には土をかぶっているものが多かったようです。厳密な復原がいかに難しいか。難しいけれども、一方ではイメージを膨らませる手がかりもほしいです。ところが、起爆材としてやり過ぎてしまうことも多い。そこまで復原するのなら、生ゴミを持ってきてばらまいて下さい、と言うことがあります。貝塚はそうでしょう。生ゴミ塚ですから。発掘したら、当時の生ゴミが一杯出てきます。蠅はブンブン、悪臭ブンブン、それでこそ本当の復原です。普通はそこまでやらないで、きれいごとだけになる。

日本の文化財保護が備えている特質もあります。無形文化財もそうです。古都京都の文化財を世界遺産に登録しました。京都市民のあいだから、大文字の送り火を世界遺産に登録を、という声がありました。世界遺産は絶対に受けつけません。そんな考えかたはないのですから。アメリカ=インディアンの踊りは合衆国の国立公園制度には入っていません。特別なイベントとしてあっても、文化財の保護の対象にはなっていません。日本では、無形文化財や民俗文化財として、それをやっています。伊勢神宮の式年遷宮も、20年ごとに少しづつ変わっているでしょうけれど、伝統的な技法で伝統的な材料を使って新しく造る、それ自身が一つの行事になっています。無形文化財的なものと有形文化財的なものが総合されているのが式年遷宮なんです。そういうものは総括的に保護の対象にすべきでしょう。

世界遺産は、はっきり言って、かなりいい加減なものです。合衆国流の勲章です。勲章は付けると、

なかなかいいものでしょう。勲章がほしい人も沢山いるようですね。あれをもらうと、自分はよっぽど偉いと思うんでしょう。中身はかわらないのに。ところが、世界遺産としての勲章を付けると、人が沢山行きます。勲章をもっていると偉いと思うんでしょう。京都のあるお寺を世界遺産の「古都京都の文化財」に加えようと思ったんです。しかし、建物だけが重要文化財で、土地が史跡になっていなかった。土地と建物の両方が国内で保存が保証されていないとだめなんです。お寺のなかで争いがあって、まとめて史跡に指定できなかった。ところが、「古都京都の文化財」が登録されると、史跡指定を受け入れるから是非加えてくれ、と言ってきています。世界遺産に入るために仲良くなった、ということです。勲章としての効果は大いにあるようです。

この点では、問題もあります。勲章はあった方がいいのでしょうかね。姫路城は世界文化遺産という勲章を付けました。とすると、他の城は全部だめだ、ということになるのですか。ユネスコの担当者から城は2か所は登録できませんよ、と言われていました。熊本城、姫路城、松本城、全部違うじゃないですか。烏城の岡山城は白鷺城とは全く違います。私たちが見ると、ヨーロッパの教会や修道院はみんな同じように見えるが、全部違うということで、片っ端から世界遺産になります。いかに欧米中心主義かということです。これは私たちだけが感じるものではありません。世界遺産にずっと関係していたタイの長老が日本に来て、私と一緒に講演をしたことがあったのですが、彼もヨーロッパの連中は勝手だ、と言っていました。アジアはアジアです。それぞれの国によって違いがあります。文化という物は多様なものです。地球上にはさまざまなものがあります。このごろ細胞から同じ人間ができるらしい。クローン羊を作っています。あんなことになったら、進歩や発展なんかありません。日本と外国との考えかたややりかたが違うから、おたがいのあいだで議論し、進歩向上もあるのです。市長さん、町長さん、村長さん、町議会、市議会、みんな考え方が違う。そのなかで、よそのものを見て、あれは取り入れよう、あれはだめだ、とおたがいに切磋琢磨するなかから、新しい良いものができる。多様性とはそういうものです。

欧米流の世界遺産は、アウトスタンディングでユニバーサル、傑出してかつ普遍的な価値をもつもの、としています。普遍的な価値をもつ、とは何でしょう。価値は空間と時間の差異のなかで変わるものでしょう。昔は子供には教育をつけて、帝国大学を卒業させて、大蔵省にいられて、と思っていたでしょう。今はその価値がガククリ変わりました。大蔵省に入れるぐらいなら、地元の銀行に入れたほうがいい。これなら家から離れないし、いいじゃないか、というように、です。ドンドン価値が変わってきます。大蔵省と地元銀行という多様なものがあるから、比較ができます。全部同じ考えかた、日本銀行しかなかったらどうなりますか。多様なものがあるということが重要なのです。文化財を見ることによって、われわれの祖先がいろんなことをやってきた、さまざまな人間活動があった、多様な人間行動があった、ということ如実に知ることができるのです。そのなかで、われわれの今はどうであるか、ということを考えることができます。文化財のもつ意義はそういうものだ、と思っています。

わたくしも世界遺産を契機にして日本の文化財のありかたを考える機会を得て、勉強できました。みなさんも、日本の文化財保護に加えて、いろんな観点から文化財をみる必要性をお感じいただけたら、と思っています。時間もまいりました、このあたりで終わらせていただきます。

(於：能代市文化会館 平成10年3月15日)

二ツ井町富根字駒形不動沢地内の アスファルト滲出地について

小笠原正明* 櫻田 隆** 能登谷宣康***

1. はじめに

日本海側の新潟県から秋田県にかけての油田地帯にはアスファルトの産出地が多く、今でもその産出が続く南秋田郡昭和町の豊川油田・槻木遺跡は有名である。

秋田県内の縄文時代と続縄文・弥生時代の遺跡から出土したアスファルト塊、土器や石器に付着したアスファルトは、すべて昭和町の豊川油田・槻木遺跡から産出したものが運搬、使用されたものと考古学的に解釈されていた。土器の産地同定が行われるようになって、アスファルトの産地同定を行なうという発想・研究が皆無であったため、「天然アスファルト＝昭和町産」の図式を疑う余地はなかったのが現状である。

平成8(1996)年度に、秋田県北秋田郡鷹巣町に所在する伊勢堂岱遺跡を担当していた秋田県埋蔵文化財センターの小林克文化財主査(当時。現文化庁記念物課調査官)と五十嵐一治学芸主事が、たまたま現場を視察に来た北海道大学文学部の林謙作教授からアスファルトの産地同定ができると知らされ、同遺跡から出土したアスファルト塊を同教授を介して北海道大学高等教育機能開発総合センター高等教育開発研究部の小笠原正明教授に依頼した。

北秋田郡上小阿仁村小袋岱遺跡の発掘調査担当職員も、発掘調査後に埋蔵文化財センターでこのアスファルト産地同定の話聞き、同遺跡から出土したアスファルトも分析してもらうべく小笠原教授に電話連絡し、センターに保管中の他の縄文時代の遺跡から出土したアスファルト塊や石器付着アスファルトも同封送付した。

小笠原教授がこれらを分析した結果、秋田県内でよく知られていた南秋田郡昭和町の豊川油田・槻木遺跡とは別のデータ数値が現れたため、他にも原産地があるのではないかとの連絡が小笠原教授から埋蔵文化財センターに寄せられた。

この話を伝え聞いた別の職員が、過去に櫻田から「天然アスファルト滲出露頭が二ツ井町駒形温泉の近くにもあるらしい」と聞いていたことを思い出し、櫻田に確認後、小袋岱遺跡の発掘調査担当職員に伝えるとともに、櫻田が二ツ井町駒形温泉の近くで採取していたアスファルト試料を小笠原教授に届けた。

その結果、この滲出地が秋田県北部の縄文時代の数遺跡から出土したアスファルト塊や石器付着アスファルトの産地として同定でき、かつ南秋田郡昭和町の豊川油田・槻木遺跡産とは識別が可能であることも明らかになったとの連絡があったという。

他県の考古学研究者も、「小笠原教授から二ツ井町産であるとの報告を受けたので現地の状況等を

* 北海道大学高等教育機能開発総合センター高等教育開発研究部教授

** 秋田県埋蔵文化財センター調査課長補佐

*** 財団法人福島県文化センター調査課文化財副主査

教えて欲しい。」あるいは「アスファルト産地が昭和町以外にも秋田県北部にあるという噂を聞いたので、もしそれが事実なら現地を視察したいので教えて欲しい。」「いつ頃発見されたのか、掲載されている文献が欲しい。」などの問い合わせが秋田県埋蔵文化財センターに入るようになった。

そこで、滲出地の考古学的発見者となった櫻田と能登谷がその滲出地点と発見の経緯を記し、小笠原教授から戴いた化学的分析も併記し、向後の利便を図ることにした。

2. 滲出地の考古学的発見の経緯

1988（昭和 63）年に、国道 7 号二ツ井バイパス建設事業のため、遺跡の大部分が消滅することになる竜毛沢館跡を記録保存するための発掘調査に出張を命じられた櫻田と能登谷は、遺跡近くの駒形温泉春秋亭を宿舎とし、その任務に従事していた。

この温泉旅館の経営者である工藤辰芳氏は、旅館近くに発見されていた須恵器系中世陶器の窯跡であるエヒバチ長根窯跡の表面採集品をガラスケースに展示公開しており、櫻田と能登谷が二ツ井町教育委員会の依頼を受けて、エヒバチ長根窯跡の範囲確認調査を 1988（昭和 63）年 10 月 22・23 日、11 月 5・6 日の 4 日間実施した際は、多数のボランティア参加者の宿泊に便宜を図ってくれるとともに、エヒバチ長根窯跡に案内してくれた。

10 月 22・23 日に、奈良教育大学の三辻利一教授、富山大学の広岡公夫教授ほか、県内外の中世陶器研究に携わる考古学研究者など 55 名のボランティア参加者の応援を得て、エヒバチ長根窯跡では窯体 3 基と工房跡を確認し、11 月 5・6 日には測量と埋め戻しをして範囲確認調査を無事に終了した。

その夜、二人が風呂上がりに工藤辰芳氏とロビーで工藤氏が入れてくれたコーヒーを飲みながら雑談するうちに、縄文土器や須恵器系中世陶器を製作する粘土に話が及んだ。工藤氏は、エヒバチ長根窯跡で焼成された須恵器系中世陶器には窯跡に近接するこの辺りの土を使ったに違いないと確信し、粘性の強い「ベントナイト」が旅館前の丘陵にあったことを思い出し、それで作ろうとしたがうまくいかなかったことを話されたのであった。

櫻田と能登谷の二人は、工藤氏の言う「ベントナイト」なる土が、いかなる土性・土質なのか皆目見当もつかなかったが、そこに行ってみることにした。翌週の土曜日の午後に現地踏査したが、「ベントナイト」がどれなのか分からなかった。（「ベントナイト」とは「粘り気のある土」のことであるということが今回初めて分かった。）工藤氏に同行を頼まなかったことを悔やみながら歩き回り、丘陵斜面の土取りされた区域で、灰白色の凝灰岩質の崖面の小さな亀裂から滲出する幾筋もの黒い液体があるのを発見した。

この黒い滲出物に触ってみると、わずかながら粘りと油特有の臭いもあり「もしかしたらこれは、天然アスファルトではないか」という疑問とともに、「この辺りでは石油も出ていないのになぜこんな凝灰岩の丘陵斜面からアスファルトが滲みでてくるのか。」という疑問も抱かざるを得なかった。「いつか機会があったら分析してもらおう」と思いサンプルを採取したが、能登谷が福島県に去ったこともあり、分析することもなく経過してしまったのである。

3. 滲出地の概要

二ツ井町は、秋田県北西部に位置し、東西 14.3km、南北 34.55km、面積 180.89km²の細長い菱形を呈す

る。町域の70%、12,636㎥は、山林原野で、町の中央部を東から西に米代川が自由蛇行しつつ貫流しているが、町の東部で北上してきた阿仁川と、白神山地から南下してくる藤琴川が米代川に合流する。また、小滝山に源を発する種梅川は、河岸段丘を形成しながら南に流れ、房住山に源を発する内川も段丘を形成しながら北に流れ、ともに二ツ井町西部で相前後して米代川に合流する。

二ツ井町を中心とした秋田県北西部区域の地形を観察すると、岩手県北西部の四角岳に源を発し、秋田県北部を西流し、能代市で日本海に注ぐ米代川の右岸区域には、標高1,000m±の白神山地があり、その南側の山腹際をなぞるように標高100~200mの山頂が斉高性を示す大小起伏丘陵地が発達している。この丘陵地の西側と南側には標高20~50mの台地・段丘が開け、波浪状の小起伏面を含む一大平坦面を呈している。

これらの丘陵・台地・段丘を開析する小河川は、南西あるいは西に流れて沖積低地をつくり、海岸砂丘地を隔てて日本海に注いでいる。米代川左岸地域は、七座山山地の西側に山頂が斉高性を示す大小起伏丘陵地が発達し、さらにその西には6~7段の台地・段丘が東から西に向かって傾斜しながら展開し、八郎瀧の湖岸低地および砂丘地を経て日本海に続いている。

以上のようにこの地域の地形は、山地、丘陵、台地、沖積低地、砂丘地に大きく5区分できる。このうち台地は、高位段丘面（標高100~200m）と、中・低位段丘面（標高20~100m）からなり、中・低位段丘面は場所により7~8段の段丘に分けられる。沖積低地は現河川沿いおよび砂丘地と台地の間に分布しているが、米代川沿いでは蛇行した旧河道が微地形としてよく残されており、現河床に近い面と、10m高度の面の2段に段化している。後者は所謂シラス洪水面である。

アスファルト滲出地は、米代川左岸の山地地形中の茂谷山（247.7m）から北側の駒形集落方向に開析された茂谷沢・不動沢・堂ノ前・本沢と、南側の谷頭から名付けられている谷地形の、中間部に当たる不動沢の右岸（東側）の丘陵斜面が土取りされている区域である（第1図）。地質的には凝灰岩質の女川層とその直上層が褶曲して背斜構造部分が露頭している。この右岸（東側）丘陵は広大で、米代川に面するあたりには、縄文時代中期の集落遺跡である烏野遺跡も所在する。

現在は、エスケイエンジニアリング株式会社の二ツ井鉱山として天然アスファルトの鉱区設定がされている。同社の佐藤修氏によると、株式会社石油資源開発が昭和30（1955）年代に石油探査の地質調査中に発見したが、採掘が始まったのは平成4年になってからであると言う。

土地の古老の話では、地元では戦前から知られており、昭和32（1957）年から始まった八郎瀧干拓時には築堤用の土として使用が検討されたこともあったとのことである。

土取りされている区域の左前方約300mに駒形温泉春秋亭があり、工藤辰芳氏によると、駒形温泉春秋亭の裏側の崖面にも滲出が見られるということで、地形・地質的にも春秋亭の裏側も含む不動沢の右岸（東側）の丘陵斜面全体に滲出する可能性は高いと考えられたが、佐藤氏からは表層ボーリングの結果では二ツ井鉱山として天然アスファルトの鉱区設定した区域だけであるという回答であった。

櫻田が、平成10年10月24日に再訪した時の現況写真を掲載する（写真1~4）。

4. 化学的分析

天然アスファルトは、何らかの理由で地表付近に漏れ出た原油中の揮発性成分が失われて残った不

揮発性の物質である。そのもとになっている原油は、古生代において海や沢地、湖沼などに沈積した生物有機体とその後の地形の変化によって地中深く埋もれて堆積岩によって閉じ込められてきたものである。長い地質年代の経過とともに地熱や地圧や周囲の無機物の影響によってさまざまな変成作用を受けている。これらの根源生物のバイオポリマー（リグニン、セルロース、脂質、蛋白質など）はもともと複雑な化学構造を持っている上、生物過程においても複雑な化学変化を起こす。その結果、原油はきわめて多様な化学成分を含むことになる。その主成分は、飽和炭化水素、芳香族炭化水素、含酸素、窒素、硫黄ヘテロ化合物などである。このような複雑な物質を区別する方法としては、(1) 統計的、平均的構造解析、(2) 化合物タイプとその同族体分布の測定、(3) 個々の構成成分の同定などが考えられる。

われわれがこれまで行った出土アスファルトの分析結果は、次のように要約される。

元素分析：アスファルトの主成分は炭素Cであり、全体の約80%を占める。次に多いのは水素Hで、Cに対するHの原子数の比が1をやや上回ることが石油起源のアスファルトの特徴である。イオウSの濃度は産地を決める指標となり得るものであるが、これまで分析した資料ではいずれも0.8%程度と違いが少ない。ただし、場所により3%以上の高い値を示すものがある。

溶媒分析：アスファルト試料をベンゼン-メタノール不溶分、アスファルテン、オイル成分に分けることができる。しかし分割結果は試料ごとに非常に異なっており、使用された後どのような環境におかれたかによって変わるので、産地同定のための指標とはなりえない。

オイル分の分析：高速液体クロマトグラフィー（HPLC）を用いてパラフィン系（フラクションP）、1環芳香族系（フラクションM）、2環芳香族系（フラクションD）、多環芳香族系などに分割できる。オイル分中のフラクションPとフラクションM、D（フラクションMとフラクションDを足したもの）の比は一つの指標となり得る。これまで、産地とみなされる秋田県および新潟県のほかに、岩手県および北海道の遺跡から出土したアスファルトの分析が行われているが、これらは秋田県の系統と2つに分けられる（ただし出土品がこの2地域から来たものとは必ずしも言えない）（小笠原ら1995）。

質量（MS）分析：MS分析では質量の違いによって分子が分別されるので、信号のピーク強度からそれぞれの化学種の存在量を知ることができる。「化合物タイプとその同族体分布」に関する直接的な情報が得られる。近年いわゆるソフトイオン化法（停電圧電子衝撃：LVEI、電界脱離：FD電界電離：FI、化学イオン化：CI、高速原子衝撃：FABなど）の技術が発達して、フラグメントイオンをほとんど生じさせず、主として電子1個を放出した分子イオンM⁺のみを生成させることが可能になった。

FI-MS法で東日本各地から得られた多くのアスファルトのパラフィン成分の分子量分布を測定してみると、①伊勢堂倍タイプ（ $m/e = 400$ 前後に非常に強い鋭いピークがあり、その前後の信号は弱い。このピークの低質量側および高質量側方向に向かってなだらかに減衰する）②羽白目タイプ（ $m/e = 400$ 付近ピークのほかに $m/e = 550$ 付近にもう1つのピークがある）、③塩ヶ森タイプ（同様 $m/e = 400$ 前後に強いピークがあるが、 $m/e = 470$ 付近にもう1つのピークがあり、その前後に強い信号が分布する）、④苫小牧タイプ（全体に幅が広く、 $m/e = 550$ 付近にピークがあるが、 $m/e = 400$ 付近のバイオマーカーのピークがない）、の4タイプに分けられる。以上のタイプはいずれも遺

跡出土の試料を分析して得られたものであって、原産地を特定したものではない。また東日本出土の試料をすべて網羅したものではないので、将来これ以外のタイプが見いだされる可能性はおおいにある。このような限界はあるが、現時点で、比較すると、ある程度の正確さをもってアスファルトの原産地を推定できる。伊勢堂岱遺跡出土のアスファルト試料のパラフィン成分のマスペクトルは、 $m/e = 400$ 付近の信号のみが強く秋田県昭和町の羽白目遺跡出土の試料のように $m/e = 550$ 付近にはっきりしたピークを示さず、高質量側スペクトルは単調に減衰している。このスペクトルは、岩手県の君成田、赤坂田、寺久保、川口の各遺跡から出土した試料のそれにきわめて類似している。岩手県には油田が無く、天然アスファルトの産出地も知られていないから、これらは、源流付近で互いに錯綜する馬淵川と米代川を經由して秋田側から持ち込まれたことを示唆している。

5. おわりに

1988 (昭和 63) 年 11 月 6 日に、櫻田と能登谷が偶然に発見した天然アスファルトの滲出地は、既に地元では戦前から認識され、戦後石油探査中に地質学的にも確認され、採掘のための鉱区設定もされていたものであった。しかし、この区域で石油や天然ガスが産出しなかったことから、一般に公表されることがなく、秋田県発行の「秋田県総合地質図幅」にも記載されなかった。

このため、考古学的には、伊勢堂岱遺跡での林謙作北海道大学文学部教授のアドバイスがなければ、今回のアクションはなかったもので、小笠原教授の分析結果が出て、「昭和町以外の産出地かもしれない。」という結論に成らざるを得なかったかもしれない。

今回の小笠原教授による産地同定結果からは、縄文時代に少なくとも秋田県内には 2 カ所の天然アスファルトの産出地があったことになる。各地の縄文時代の遺跡から出土する天然アスファルトを分析することにより、この 2 カ所の産出地からの天然アスファルトの交易範囲を知る手掛かりとなる。

特に、米代川流域の縄文時代の遺跡から出土するアスファルトが二ツ井町不動沢産であることが分かっており、地理的にも米代川とその源流部が奥羽山脈中の分水嶺で近接する馬淵川とその支流沿いが岩手県北部と青森県東部への流通ルートではないかとの推測もできよう。

また、今後の分析結果次第ではあるが、もしも昭和町豊川油田・槻木遺跡から産出した天然アスファルトが秋田県中央部から県南部、雄物川や玉川などの支流源流部から分水嶺を越え岩手県側に流通したということが判明すれば、その供給範囲があたかも縄文時代前・中期の円筒土器分布圏と大木式土器分布圏とも重なることになり、第 1 義的に二ツ井町不動沢は円筒土器分布圏へ、昭和町豊川油田・槻木遺跡は大木式土器分布圏へ供給する産地と見るができるかもしれない。もちろん、北海道南で昭和町産のアスファルトが発見されていることから、縄文人の交易圏の広さを考えると、日本海を南・北に遠く運ばれた可能性もまた否定できない。

なお、当地の天然アスファルトの滲出地は、現在エスケイエンジニアリング株式会社の二ツ井鉱山として天然アスファルト採掘の鉱区設定がされており、同社に無断で採掘することは盗掘にあたるため、立ち入りも同社の許可が必要である。研究者の利便を考慮して同社の電話番号を記すので、事前に許可を得てもらいたい。

エスケイエンジニアリング株式会社 秋田市中通 2 丁目 3-8 アトリオン 9F 電話 018-835-4928

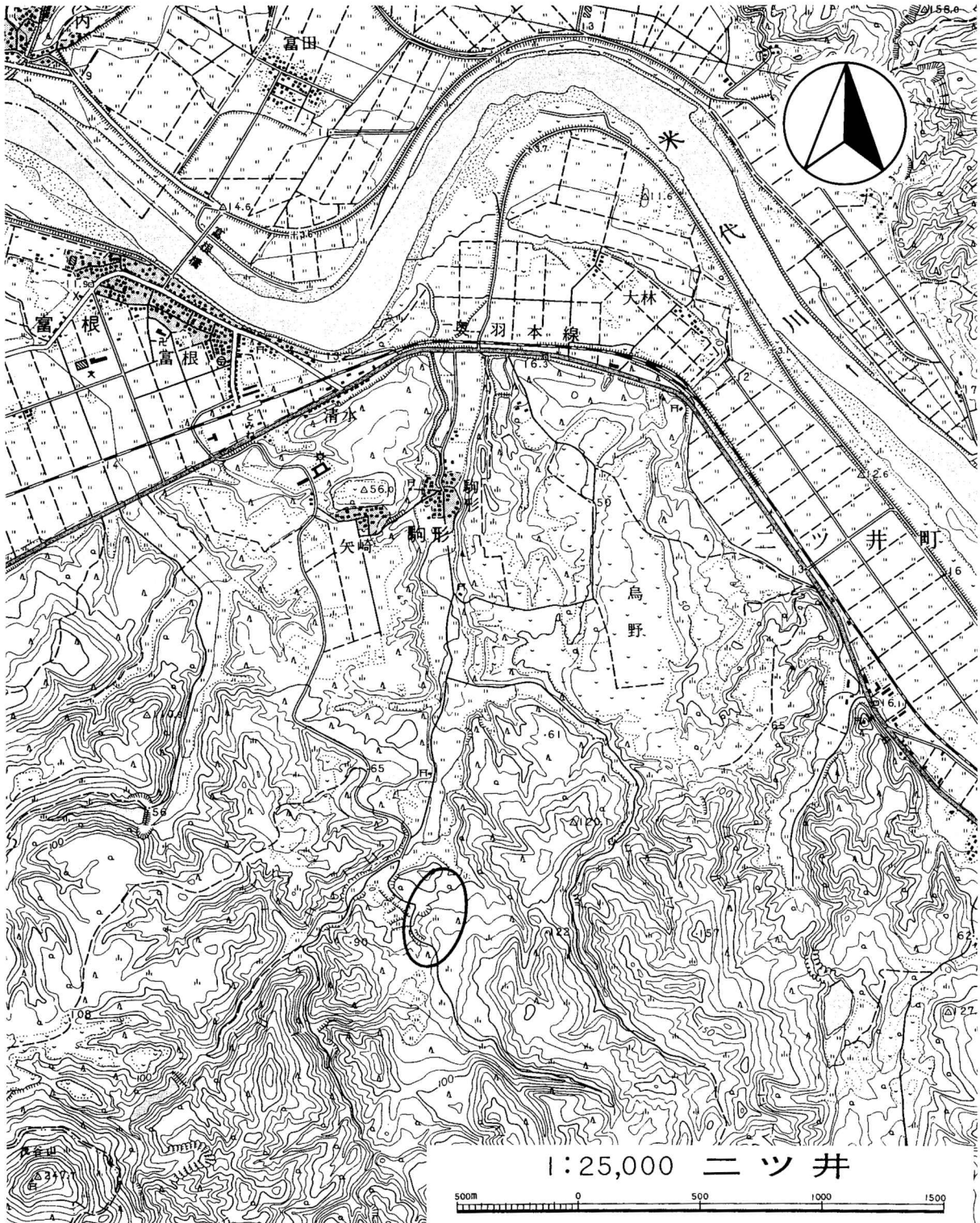
参考文献

横山晋・鈴木優（1995）『石炭液化油の質量分析－液化オイル成分のドゥータMSスペクトル－』 自家製本

小笠原正明・阿部千春・前川靖明・横山晋（1994）「豊崎N遺跡出土の天然アスファルト塊」

『考古学ジャーナル』373 P. 25～29

（平成11年1月4日）



第1図 アスファルト滲出露頭地位置図



写真1 ニツ井町不動沢地内の天然アスファルト滲出地遠景（南西側から撮影）



写真2 同上 採掘現場（掘削された崖面に天然アスファルトが滲出する）



写真3 凝灰岩から滲出する天然アスファルトの産状1 (スケールは17cm)

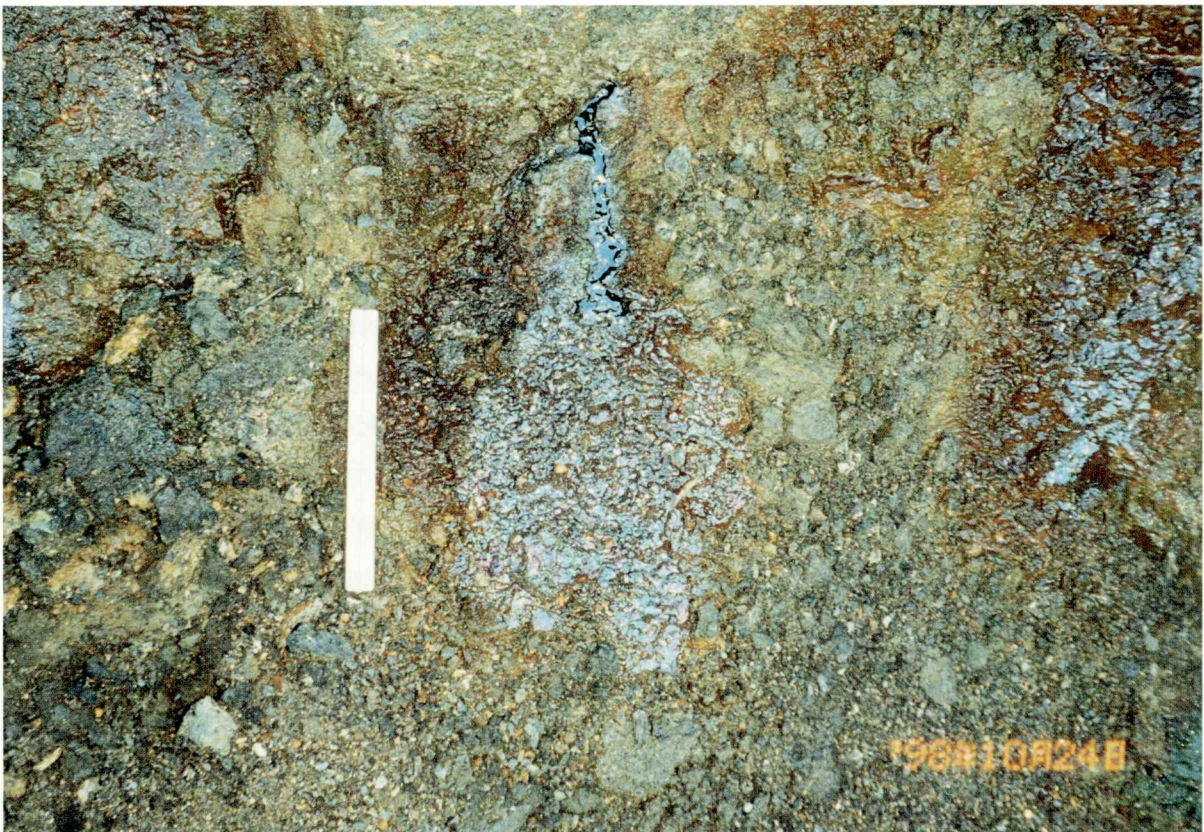


写真4 凝灰岩から滲出する天然アスファルトの産状2

秋田県考古学関係文献抄録（1）—須恵器・瓦—

利 部 修*

1981（昭和56）年に秋田県埋蔵文化財センターが設置されてから今日まで、市町村の発掘調査機関の増加とともに発掘調査件数が増加してきている。開発行為に伴う対応策が同時に、県民の考古学・歴史学に対する興味と関心を引き起こし、各種歴史研究団体の活動も活発化している。この結果、発掘調査記録・新聞記事・論文等々の記録が生み出され、秋田県の考古学関係文献も他県の劣らず膨大な数にのぼってきた。この後も、将来にわたって多くの文献が累積され続けていくことは確かである。今こそ、秋田考古学の文献目録の必要性が痛感されてならない。

考古学の研究にとって、他の学問と同様に研究史の理解は基礎となる作業である。秋田県の文献目録は1979（昭和54）大友俊和・庄内昭男・富樫泰時によって、1868（明治元）年から1978（昭和53）年までが、発行年月順に人名別索引も付け加えられた形で纏められた（『秋田県考古学関係文献目録』）。冒頭、富樫によって述べられた「私達の研究は私達の先輩が築いた研究の上に成立っている」の一文は、研究を志す者にとって強く銘記されなければならない。

これより以前の1977（昭和52）年には、大和久震平が『秋田県史考古編』の中で「第四節 文献目録」と項目立てを行って、1886（明治19）年～1958（昭和33）年の原始時代を発行年月順に扱った。これに溯る1967（昭和42）年には、奈良修介と豊島昂によって『秋田県の考古学』に主要参考文献と題した1858（文政5）年～1966（昭和41）年にわたる文献目録が記載されている。それは1先史時代、2有史時代、3全般にわたるもの、4市町村史誌等、と時代と書籍の種類によった分類で年代順に掲載したものである。このように、不特定の記述を網羅したりある時代を限定したもの以外に、個別遺跡をとりあげた例として「秋田城関係文献目録」（『昭和55年度秋田城跡発掘調査概報』1981）や「払田柵跡関係文献目録」（『払田柵跡—政庁跡—』1985）がある。

本文では須恵器と瓦をとりあげる。つまり、時代と遺物を限定した個別テーマである。個別テーマの設定による文献目録は、新たに研究を深化させようとする後進にとって、文献収集に費やす時間を節約できる試金石である。ひいては考古学研究者の裾野を拡大し、研究の進展に大いに役立つ。今後、分野・時代・遺跡・遺構・遺物などをテーマに文献抄録の回数を重ねたいと思っているが、その積み上げによって秋田県の考古学関係文献の全体像に少しでも近づき、本県考古学における研究史の基礎的資料にしたいと考えている。掲載文献の誤謬や遺漏もあると思われる、大方の助言と情報を賜わりたい。そして、各時代を専門にしている研究者の間で、その個別ごとのテーマによる文献目録作成の気運が高まることを期待したい。

なお須恵器と瓦について、窯跡以外の報告書の掲載は行わない。ただし、横手市オホン清水北遺跡（1984）からは5世紀代の須恵器が1点出土しており、例外として扱った。また、緑釉・灰釉陶器を今回の抄録に含むことにする。

*秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室 学芸主事

〈1932(昭和7)年～1998(平成10)年〉

1932. 12. 大山 宏「秋田城址について」『秋田県史蹟調査報告』第一輯 秋田県史蹟名勝天然記念物調査會
1954. 4. 武藤鉄城「秋田県仙北郡九十九沢窯跡」『日本考古学年報』2(昭和24年度) 日本考古学協会
1957. 9. 上法香苗「秋田市上新城の古代窯址群について」『秋田考古学』第8号 秋田考古学協会
1957. 9. 奈良修介「金足堀内出土の須恵器」『秋田考古学』第8号 秋田考古学協会
1957. 9. 伊藤種秋「秋田市高清水採集土器」『秋田考古学』第8号 秋田考古学協会
1958. 5. 小武海松四郎「井川村南台における土師須恵の骨壺について」『秋田考古学』第10号 秋田考古学協会
1958. 5. 伊藤種秋「由利郡由利村小菅野採集土器」『秋田考古学』第10号 秋田考古学協会
1958. 5. 豊島 昂「調査略報三項」『秋田考古学』第10号 秋田考古学協会
1958. 奈良修介「秋田城址出土の文様瓦」『秋田考古学』第11号 秋田考古学協会
1958. 上法香苗「秋田城址の瓦類について」『秋田考古学』第11号 秋田考古学協会
1958. 12. 上原甲子郎「東北地方における緑釉陶片の新例」『考古学雑誌』第44巻第2号 日本考古学協会
1959. 4. 小武海松四郎「墨書須恵器(坏)の一例」『秋田考古学』第12号 秋田考古学協会
1960. 7. 上法香苗「南秋田郡天王町地域の古代土器」『秋田考古学』第15号 秋田考古学協会
1961. 6. 磯村朝次郎「脇本飯森家屋埋没遺址調査概報」『秋田考古学』第18号 秋田考古学協会
1961. 11. 奈良修介・豊島 昂「秋田県南秋田郡五城目町「岩野山古墳」」『秋田考古学』第19号 秋田考古学協会
1963. 3. 大和久震平「平鹿郡雄物川町末館窯址発掘調査報告」『横手郷土史資料』第35号 横手郷土史編纂委員会
1964. 7. 男鹿市「第二節 秋田城時代の男鹿」『男鹿市史』男鹿市
1964. 7. 内藤政恒「須恵器利用の硯について」『考古学雑誌』第50巻第1号 日本考古学会
1965. 5. 高橋一夫「羽白目遺跡出土の布目瓦について」『秋田考古学』25 秋田考古学協会
1965. 12. 山下孫継「第五章 奈良・平安時代の土器及び銅鉄器」『湯澤市史』湯澤市史編さん会事務局
1967. 2. 奈良修介「二 住居跡・窯跡出土遺物」『秋田県の考古学』吉川弘文館
1967. 2. 奈良修介「三 城柵出土遺物」『秋田県の考古学』吉川弘文館
1967. 2. 奈良修介「九 土師器・須恵器編年」『秋田県の考古学』吉川弘文館
1967. 3. 大川 清「(4) 七窪B地区」『足田遺跡発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第10集
1967. 7. 倉田芳郎・坂詰秀一「二 古代・中世窯業の地域的特質—(1) 東北・関東」『日本の考古学』歴史時代(上) (株)河出書房新社
1967. 7. 岩見誠夫「高野出土の墨書土器」『秋田考古学』第26号 秋田考古学協会
1968. 12. 門間光夫「羽白目秋田城外壘烽遺跡について」『秋大史學』16 秋田大学史学会
1972. 2. 岩見誠夫「南秋田郡若美町海老沢出土の須恵器に関して」『秋田考古学』第30号 秋田考古学協会

学協会

1973. 5. 伊藤鉄太郎「須恵器編年考」『土器と城郭』
1974. 3. 鍋倉勝夫「5. 城神廻り地区出土須恵器の再検討」『足田遺跡第7次発掘調査略報』羽後町教育委員会
1975. 3. 秋田県教育委員会『城土手遺跡緊急発掘調査報告書・海老沢窯跡緊急発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第32集
1976. 3. 秋田県教育委員会『成沢遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第36集
1976. 3. 横手市教育委員会『郷土館窯跡』横手市教育委員会
1976. 8. 日野 久「秋田城跡出土土器(2) 一須恵器杯(台付杯)について一」『秋田考古学』第33号
秋田考古学協会
1976. 10. 小松正夫「秋田城跡出土瓦について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
1977. 4. 奈良修介「第三節 土師器・須恵器の編年」『秋田県史 考古編』株式会社加賀谷書店
1977. 4. 奈良修介「第五節 窯址」『秋田県史 考古編』株式会社加賀谷書店
1977. 4. 奈良修介「一 秋田城の瓦」『秋田県史 考古編』株式会社加賀谷書店
1977. 11. 八郎潟町史編纂委員会「第三節 弥生、土師・須恵器の遺跡」『八郎潟町史』八郎潟町
1978. 1. 石郷岡誠一「秋田城跡出土土器(3) 一須恵器(蓋)について一」『秋田考古学』第34・35合併号
秋田考古学協会
1978. 3. 本荘市教育委員会『葛法窯跡分布調査報告書』本荘市文化財調査報告書第2集
1978. 沼山源喜治「東北北半部」『歴史時代土器の研究—東日本に於ける土器編年—』歴史時代土器研究会
1978. 小松正夫「秋田県(旧羽後地域)」『歴史時代土器の研究—東日本に於ける土器編年—』歴史時代土器研究会
1979. 3. 板橋範芳「第一節 土師器文化の波及」『大館市史』第一巻 大館市史編さん委員会
1979. 12. 矢島町史編纂委員会「第五節 土師器と須恵器」『矢島町史』上巻 矢島町
1980. 10. 島田亮三「一節 古墳及び大和時代以降」『雄物川町郷土史』雄物川町郷土史編纂会
1981. 2. 杉渕 馨「物見窯跡について」『秋田地方史論集』みしま書房
1981. 12. 岩見誠夫「三、海老沢窯跡」『若美町史』若美町史編さん委員会
1982. 3. 山崎文幸「仙北町の遺跡紹介」『字母連木』第9号 うもれ木編集委員会
1982. 11. 柳沢弘志「第一節 古代の文化」『鹿角市史』第一巻 鹿角市
1984. 3. 日野 久「秋田城跡第三十六次調査出土の漆紙文書」『秋大史學』30 秋田大学史学会
1984. 3. 横手市教育委員会『オホン清水～第3次遺跡発掘調査報告書～』横手市文化財調査報告10
1984. 6. 庄内昭男「考古部門展 古代の窯跡」『博物館ニュース』No.46 秋田県立博物館
1984. 9. 西鳥羽礼子・小松正夫「四、秋田城跡出土墨書土器集成」『秋田城跡発掘調査事務所研究紀要・秋田城出土文字資料集』秋田市遺跡保存会・秋田城跡発掘調査事務所
1984. 9. 富樫泰時「四 中山丘陵西麓の窯跡群」『平鹿町史』平鹿町史編纂委員会
1984. 11. 三辻利一・桜田 隆「土井遺跡出土須恵器の胎土分析」『秋大史學』31 秋田大学史学会
1985. 3. 庄内昭男「平鹿郡平鹿町中山窯跡発掘調査概要」『秋田県立博物館研究報告』第10号 秋田

県立博物館

1985. 3. 山崎文幸「第V章 遺物」『払田柵跡—政庁跡—』秋田県文化財調査報告書第122集
1985. 3. 船木義勝「第2節 遺物」『払田柵跡—政庁跡—』秋田県文化財調査報告書第122集
1985. 3. 山崎文幸「払田柵跡出土の文字資料—表採・寄蔵資料—」『字母連木』第11号 うもれ木編集委員会
1985. 11. 岩見誠夫・船木義勝「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」『秋大史學』32 秋田大学史学会
1986. 3. 雄物川町郷土資料館「末館I・II窯について」『雄物川町郷土資料館報告書』第3号
1986. 3. 船木義勝「「秋田城跡」についての一考察—8世紀の土器と施設の創建年代—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第1号 秋田県埋蔵文化財センター
1986. 3. 高橋 学「秋田県内出土の墨書土器集成」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第1号 秋田県埋蔵文化財センター
1986. 11. 小武海松四郎「二 井川における土師器・須恵器の分布」『井川町史』井川町史編纂委員会
1986. 11. 小武海松四郎「三 骨蔵器と墨書須恵器」『井川町史』井川町史編纂委員会
1987. 3. 三嶋隆儀・庄内昭男「男鹿市小谷地遺跡の墨書土器」『秋田県立博物館研究報告』第12号 秋田県立博物館
1987. 3. 桜田 隆「鹿角盆地に於ける古代土器群の様相」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第2号 秋田県埋蔵文化財センター
1987. 3. 若美町教育委員会『西海老沢遺跡発掘調査報告書—昭和61年度若美町海老沢地区団体営農道整備事業に係る埋蔵文化財調査—』若美町教育委員会
1987. 10. 小松正夫「まとめ—2) 須恵器有蓋環形土器について—」『宮崎遺跡発掘調査報告書』西目町教育委員会
1987. 11. 池田正治・高橋 学「由利郡西目町で採集された墨書土器—土の下の歴史を求めて—」『秋田考古学』第39号 秋田考古学協会
1987. 11. 秋田魁新報社「平安後期の“生活”出土」『秋田魁新報』秋田魁新報社
1988. 2. 河北新報社「東北では最大級須恵器の甕出土—大館野遺跡—」『河北新報』河北新報社
1988. 3. 山本哲也「擦文文化に於ける須恵器について」『國學院大學考古学資料館紀要』第4号 國學院大學考古学資料館研究室
1988. 3. 羽後町教育委員会『七窪遺跡発掘調査報告書』羽後町文化財調査報告書第8集
1988. 10. 朝日新聞社「初の「平瓶」出土—竹原遺跡—」『朝日新聞』朝日新聞社
1989. 3. 秋田県埋蔵文化財センター『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡—』秋田県文化財調査報告書第178集
1989. 4. 秋田県埋蔵文化財センター「考古ニュース—竹原遺跡から奈良・平安期の窯跡確認—」『月刊考古学ジャーナル』No.303 ニュー・サイエンス社
1989. 6. 小松正夫「八、九世紀における出羽北半須恵器の特質」『考古学研究』第36巻第1号 考古学研究編集委員会

1989. 6. 富樫泰時「おもしろ秋田むかし考②」『朝日新聞』朝日新聞社
1989. 8. 能登谷宣康「大曲市蛭川遺跡より採集された遺物について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第4号 秋田県埋蔵文化財センター
1989. 12. 仙北新聞社「文化財に「横釜」と「熊野の本地」を指定」『仙北新聞』仙北新聞社
1990. 3. 高橋 学「西目町井岡遺跡で採集された遺物について」『秋田考古学』第40号 秋田考古学協会
1990. 7. 新野直吉・船木義勝「序章 古代の北羽」『払田柵の研究』文献出版
1990. 7. 新野直吉・船木義勝「10 出土遺物」『払田柵の研究』文献出版
1990. 7. 新野直吉・船木義勝「終章 出羽国府の移転」『払田柵の研究』文献出版
1990. 12. 渡部誠一郎「第二節 大和朝廷の勢力北上」『秋田市旭川郷土史』秋田市旭川郷土史編集委員会
1991. 2. 利部 修「竹原窯跡」『第17回 古代城柵官衙遺跡検討会』古代城柵官衙遺跡検討会
1991. 3. 櫻田 隆「田久保下遺跡古代窯跡・富ヶ沢A～C窯跡の調査」『平成2年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』秋田県埋蔵文化財センター
1991. 3. 利部 修「横手盆地の古代窯跡について―竹原窯跡を中心に―」『平成2年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』秋田県埋蔵文化財センター
1991. 3. 利部 修「竹原窯跡における坏蓋の変化」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第6号 秋田県埋蔵文化財センター
1991. 3. 桜田 隆「須恵器窯の側壁・天井架構材について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第6号 秋田県埋蔵文化財センター
1991. 3. 秋田県埋蔵文化財センター『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書―上猪岡遺跡―』秋田県文化財調査報告書第208集
1991. 3. 秋田県埋蔵文化財センター『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書―竹原窯跡―』秋田県文化財調査報告書第209集
1991. 3. 秋田県埋蔵文化財センター『七窪遺跡発掘調査報告書―公害防除特別土地改良事業亀田地区に係る埋蔵文化財発掘調査―』秋田県文化財調査報告書第215集
1991. 7. 富樫泰時「第一節 古墳時代」『六郷町史』上巻・通史編 六郷町史編纂委員会
1991. 7. 富樫泰時「第二節 奈良・平安時代」『六郷町史』上巻・通史編 六郷町史編纂委員会
1991. 9. 秋田県立博物館「考古部門展 竹原窯の須恵器」『博物館ニュース』No.85
1991. 10. 船木義勝「秋田市金足大清水出土の須恵器―遺物の新しい情報から―」『土崎史談』31号 土崎史談会
1991. 11. 三浦圭介「古代における東北地方北部の生業」『北からの視点』日本考古学協会 1991年度宮城・仙台大会実行委員会
1992. 2. 小松正夫「秋田城とその周辺地域の土器様相（試案）―第54次調査の木簡・漆紙文書伴出土器を中心にして―」『第18回 古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会
1992. 3. 富樫泰時・児玉 準「本荘市上谷地遺跡について―由理柵推定地の調査―」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 秋田県埋蔵文化財センター

1992. 3. 利部 修「竹原窯跡の須恵器編年」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 秋田県埋蔵文化財センター
1992. 3. 小林 克・高橋 学「峰浜村手前谷地尻遺跡出土の遺物について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 秋田県埋蔵文化財センター
1992. 3. 秋田県埋蔵文化財センター『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—富ヶ沢A・B・C窯跡 田久保下遺跡 富ヶ沢1号～4号塚—』(第一分冊) 秋田県文化財調査報告書第220集
1992. 3. 秋田県埋蔵文化財センター『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—富ヶ沢A・B・C窯跡 田久保下遺跡 富ヶ沢1号～4号塚—』(第二分冊) 秋田県文化財調査報告書第220集
1992. 8. 利部 修「秋田県・横手地方の須恵器編年」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸古窯跡群検討会・会津若松市教育委員会
1992. 10. 阿仁町史編纂委員会「第三節 平安時代」『阿仁町史』阿仁町
1992. 10. 巽淳一郎ほか『平城宮・京出土須恵器の分類と産地同定—平成元年～3年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告—』
1993. 3. 船木義勝・泉 広宣「秋田市松木台Ⅱ遺跡の須恵器」『秋田県立博物館研究報告』第18号 秋田県立博物館
1993. 3. 利部 修「下藤根遺跡出土土師器の再検討—東北地方北部における位置付けを中心に—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第8号 秋田県埋蔵文化財センター
1994. 3. 利部 修「払田柵跡の平瓦渦巻文考」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第9号 秋田県埋蔵文化財センター
1994. 6. 小松正夫・日野 久・伊藤武士「秋田城跡出土の袍衣壺」『月刊考古学ジャーナル』No.376 ニュー・サイエンス社
1994. 9. 伊藤武士「大沢窯跡Ⅰ遺跡の須恵器について」『秋田考古学』第44号 秋田考古学協会
1994. 9. 伊藤武士「古城廻窯跡」『平成6年度 秋田考古学協会研究会資料』秋田考古学協会
1994. 11. 八木光則「奥六郡・山北三郡の城と柵」『歴史評論』通巻第535号 歴史科学協議会
1995. 2. 利部 修「横手盆地の古代遺跡と払田柵跡」『第21回 古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会
1995. 3. 高橋 学「秋田県内出土の墨書土器、篋書・刻書土器」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第10号 秋田県埋蔵文化財センター
1995. 3. 利部 修「砂底須恵器の一考察」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第10号 秋田県埋蔵文化財センター
1995. 3. 利部 修「十二林遺跡」『能代市史 資料編 考古』能代市史編さん委員会
1995. 3. 磯村朝次郎「第六節 男鹿の古代遺跡」『男鹿市史』上巻 男鹿市史編纂委員会
1995. 11. 池田明朗・伊藤博幸「第1章 東北古代窯業遺跡の研究史(抄)」『須恵器集成図録』第四巻 東日本編 雄山閣出版
1995. 11. 池田明朗・伊藤博幸「第2章 窯跡の分布—2 各県の窯跡分布と区分」『須恵器集成図録』

第四巻 東日本編 雄山閣出版

1995. 11. 伊藤博幸「第2章 窯跡の分布— 3 須恵器生産の諸段階」『須恵器集成図録』第四巻 東日本編 雄山閣出版
1995. 11. 伊藤博幸「第3章 主要窯跡と須恵器」『須恵器集成図録』第四巻 東日本編 雄山閣出版
1996. 1. 利部 修「北日本の須恵器についての一考察」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
1996. 3. 三辻利一・利部 修「竹原窯跡出土須恵器の胎土分析」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第11号 秋田県埋蔵文化財センター
1996. 6. 利部 修「秋田県の9世紀以降の様相」『北陸の9世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会
1996. 8. 和泉昭一「二ツ井町の須恵器・土師器新資料紹介」『秋田考古学』第45号 秋田考古学協会
1996. 12. 小松正夫「秋田県の7世紀以前の土器」『日本土器事典』雄山閣出版株式会社
1996. 12. 小松正夫「秋田県の8世紀の土器」『日本土器事典』雄山閣出版株式会社
1996. 12. 小松正夫「秋田県の9世紀の土器」『日本土器事典』雄山閣出版株式会社
1996. 12. 小松正夫「秋田県の10世紀の土器」『日本土器事典』雄山閣出版株式会社
1997. 2. 利部 修「平安時代東北の長頸瓶」『生産の考古学』倉田芳郎先生古稀記念会
1997. 3. 利部 修「出羽地方の丸底長胴甕をめぐる」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第12号 秋田県埋蔵文化財センター
1997. 3. 秋田市史古代部会『古城廻窯跡発掘調査報告』秋田市史叢書1 秋田市史編さん室
1997. 5. 伊藤武士「出羽における10・11世紀の土器様相」『北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会
1997. 6. 高橋 学「第一節 古墳時代の増田」『増田町史』増田町史編纂委員会
1997. 6. 高橋 学「第二節 奈良・平安時代の増田」『増田町史』増田町史編纂委員会
1997. 10. 小松正夫「古城廻窯跡と秋田城」『秋田市史研究』第6号 秋田市史編さん室
1997. 10. 利部 修「北部日本海側における須恵器生産の特質」『日本考古学協会1997年度大会研究発表要旨』日本考古学協会
1997. 10. 秋田城跡調査事務所「秋田城跡出土土器と周辺窯の須恵器編年(試案)」『蝦夷・律令国家・日本海—シンポジウムⅡ・資料集—』日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会
1997. 10. 北野博司「古代北陸の地域開発と出羽」『蝦夷・律令国家・日本海—シンポジウムⅡ・資料集—』日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会
1997. 10. 利部 修「辺境における出羽北半の窯跡出土須恵器」『蝦夷・律令国家・日本海—シンポジウムⅡ・資料集—』日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会
1998. 3. 利部 修「東北以北の双耳環と環状凸帯付長頸瓶」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第13号 秋田県埋蔵文化財センター
1998. 3. 伊藤武士「秋田城跡周辺須恵器窯の動向について」『秋田考古学』第46号 秋田考古学協会

(平成10年12月28日)

発行 1999(平成11)年3月

秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第14号

発行 秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802
秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話 (0187) 69-3331

印刷 株式会社三戸印刷所
〒010-0923
秋田県秋田市旭北錦町3番50号
電話 (018) 823-5351

